

B. 第2石棺墓群 (第51図)

E-4グリッドに所在する。第1石棺墓群の所在する第9号住居跡から2mあまり下の、入波沢に由来する河成砂礫層中に構築されており、同一面上に縄文時代の遺構は発見されていない。

周囲に、斜面上の住居跡群に由来する遺物集中区が存在し、これらの遺物を取り上げてゆく過程で偶然発見された。

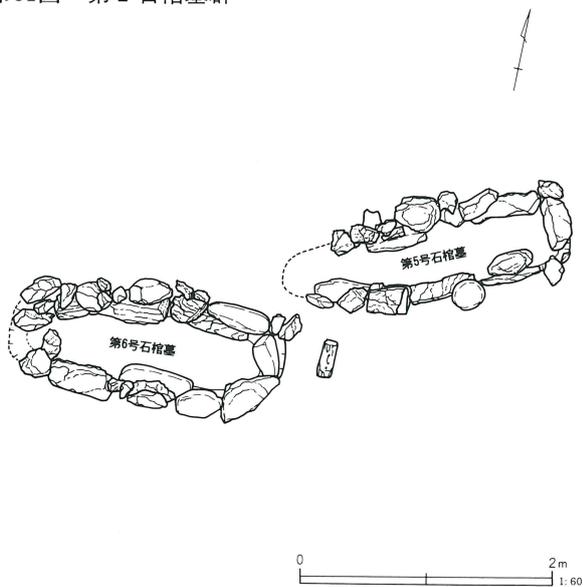
当初は敷石住居にともなう配石と考え、第6号住居跡(SJ6)と命名したが、上面の石材を撤去した結果、下面に埋葬主体部が存在することが判明した。

周囲の地山の状態は遺構の検出に適さないが、第1石棺墓群のように既存の遺構の再利用はされていないものと思われる。

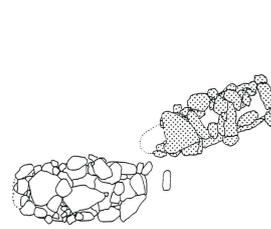
2基の石棺墓は若干軸方向を違えて、東西に並んでおり、切り合い関係にない。したがって両者の新旧は不明である。

SJ6と呼んだ範囲からは後期初頭～中葉の土器片が出土しているが、第1石棺墓群ときわめて近い位置にあり、時期差をうかがわせる技法上の違いもみられないことから、ほぼ同時期、縄文時代後期前葉堀之内2式期ないしそれ以降の所産と考えていだろう。

第51図 第2石棺墓群



第52図 第5号石棺墓の位置



第5号石棺墓 (第52図・第54図)

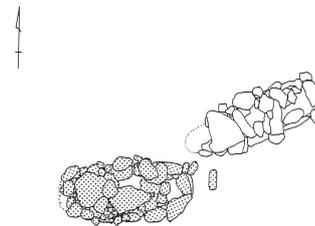
旧称SX11である。墓群中東寄りに位置している。西端部分を建造物の基礎で破壊されている。

配石外縁部分の長径2.34m、短径1.02m、埋葬主体部内の長径1.95m、短径0.35mを測る。壁高は最大29cmを測る。主軸方向はN-65°-Eを指す。

長方形プランの両側縁に大型の角礫や川原石を置き並べ、上端に板状の石材を平置きにする。短軸側の側石は板状の川原石を小口立てにし、上端に板状の石材を平置きにしている。

蓋石は板状の準片岩や川原石でモザイク状に閉塞される。底石は存在しない。

第53図 第6号石棺墓の位置



第6号石棺墓 (第53図・第55図)

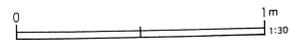
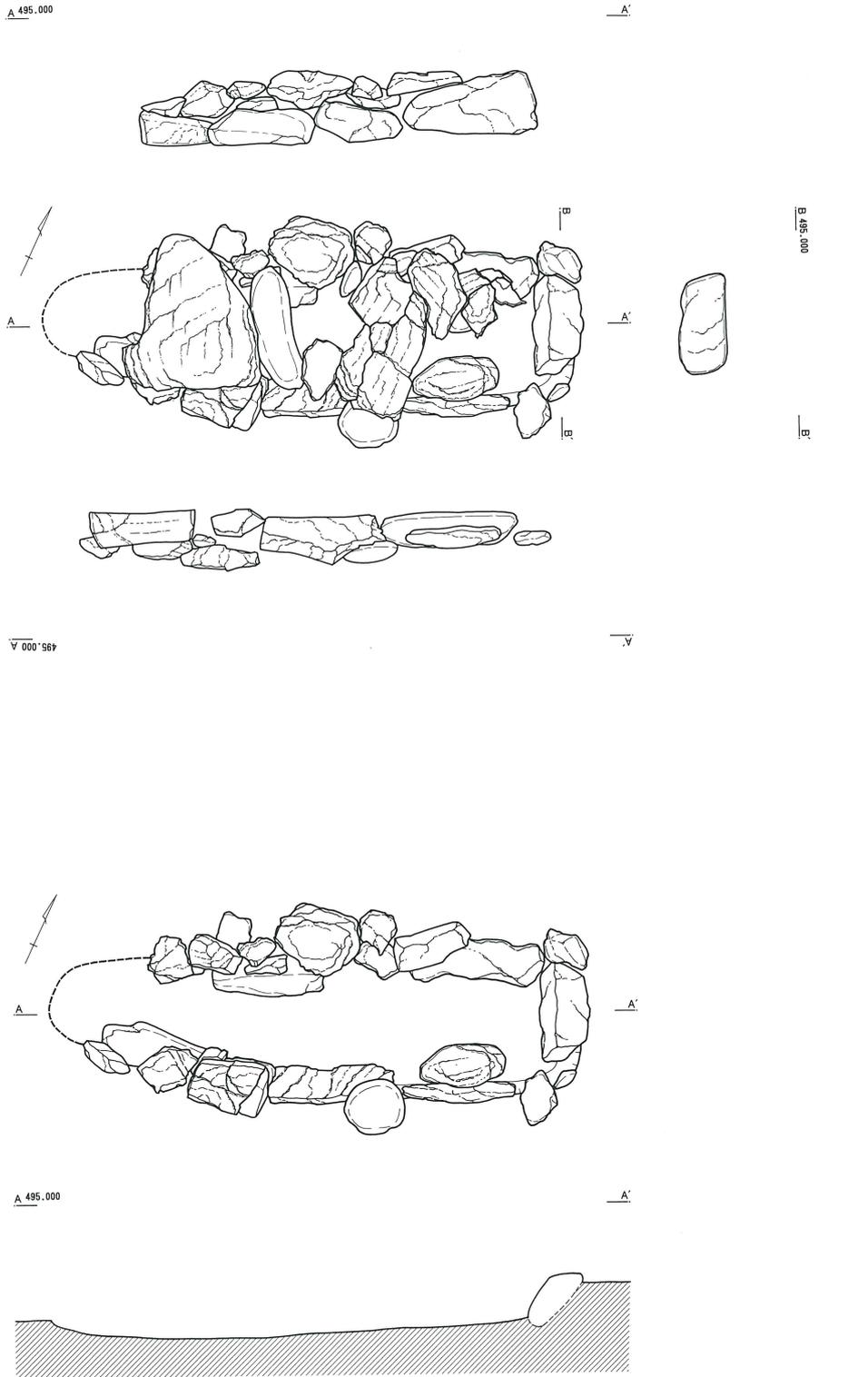
旧称SX12である。墓群中西寄りに位置している。

配石外縁部分の長径2.14m、短径0.94m、埋葬主体部内の長径1.84m、短径0.35mを測る。壁高は最大24cmを測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。

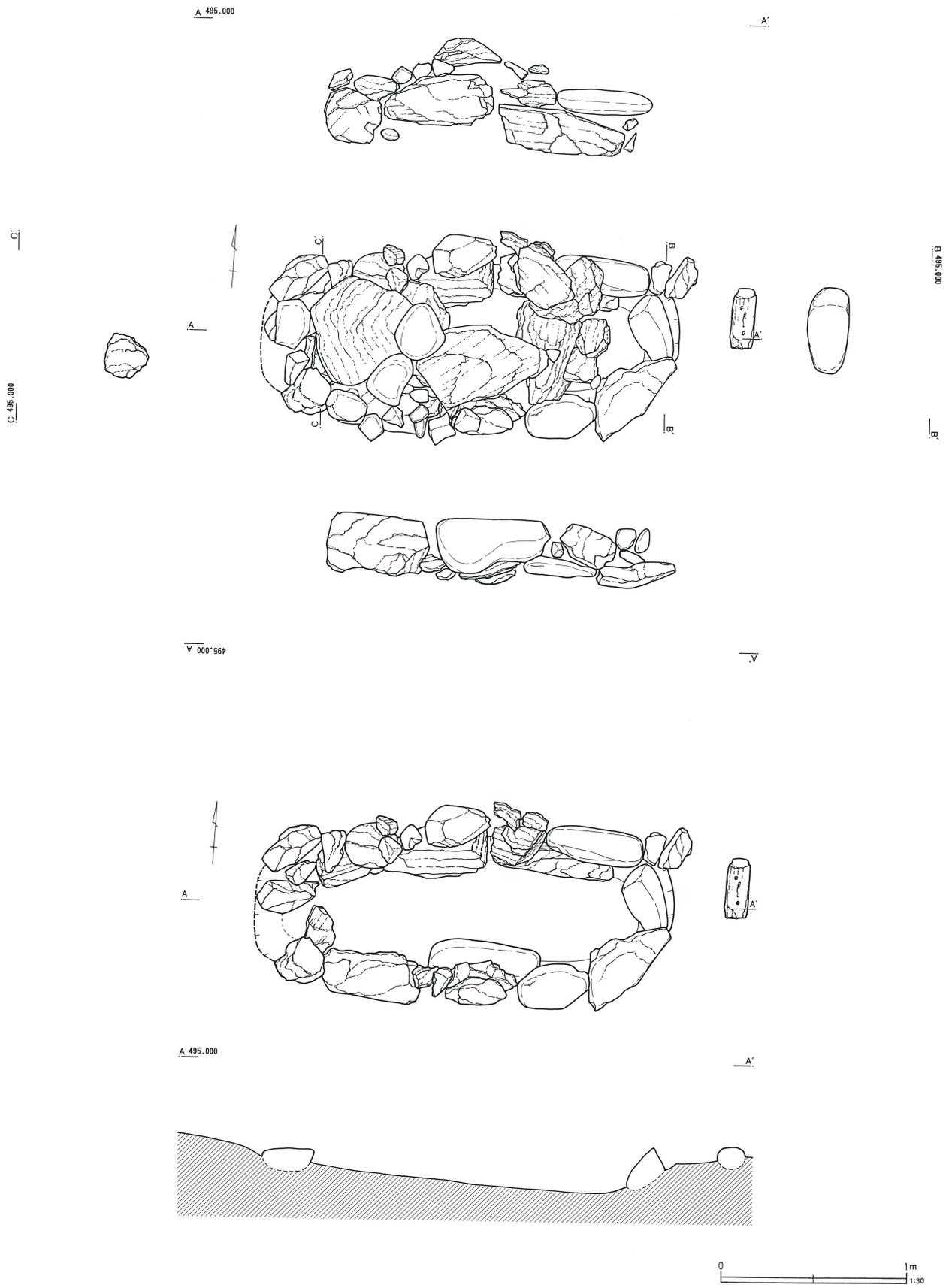
長方形プランの両側縁に大型の角礫や川原石を置き並べ、上端に板状の石材を平置きにする。短軸側の側石は板状の川原石を小口立てにし、上端に板状の石材を平置きにしている。

蓋石は板状の準片岩や川原石でモザイク状に閉塞される。底石は存在しない。

第54図 第5号石棺墓



第55图 第6号石棺墓

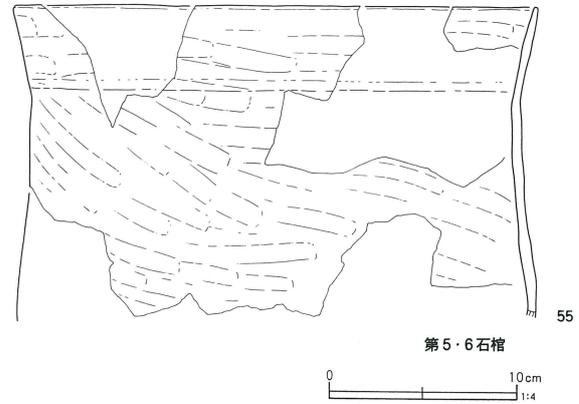
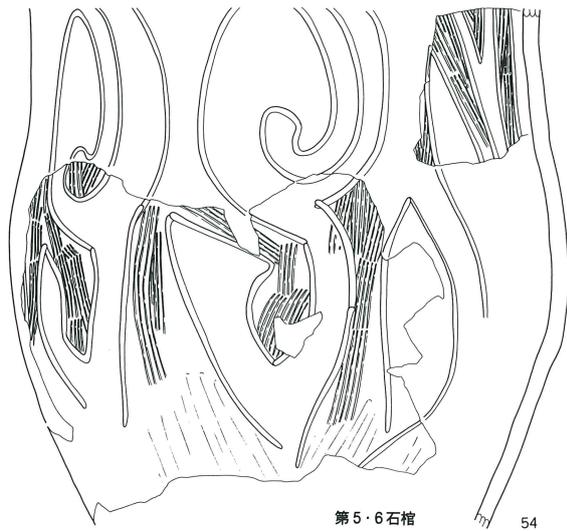


第56图 石棺墓群出土土器(I)



0 10cm 1:3

第57図 石棺墓群出土土器(2)



出土遺物 (第56図・第57図)

第1・2号石棺墓

すべて掘り方中から出土した遺物である。1～3は堀之内1式、4～6は堀之内2式である。7は無文の胴部で、やはり堀之内2式と思われる。8は信州系の鉢の底部であろう。

第3号石棺墓

やはり掘り方中からの出土した遺物である。9が堀之内1式とみられる無文の口縁部である他は、いずれも無文の胴部である。

第4号石棺墓

22・25・28～31・35～37・39が郭内埋土からの出土、他は掘り方中からの出土である。

13～23は堀之内1式、24～33は堀之内2式、34～37は加曾利B1式、38・39は無文の底部である。

埋土中の土器はほとんどが堀之内2～加曾利B1式で占められており、これが石棺墓群の構築時期を反映するものと見ていだろう。

おそらくは短時間で閉塞されたと思われる石棺墓の埋土中に少なからぬ加曾利B1式土器が含まれていた点は、住居跡と石棺墓群の時間的關係を判断する上で重要な意味を持つものと考えられる。

第5・6号石棺墓 (第2石棺墓群)

43が第6号石棺墓の埋土から出土した他は、すべて蓋石周辺に散布していたものである。

称名寺式から加曾利B式までの各時期の土器が混在するが、埋土中から出土の43は明らかに加曾利B1式の粗製土器である。器面が甚だしく風化しているが、上下を沈線で区画した中に格子目文が描かれるものであろう。

54・55の復元個体は、いずれも第2石棺墓群の上面から出土した。

54は称名寺式の大型深鉢である。胴部中段のほぼ8割程度が残存する。

一筆書きの手法で上下2段のJ字文が描かれ、モチーフ下端が開放する。地文は櫛歯状工具による条線が充填施文される。

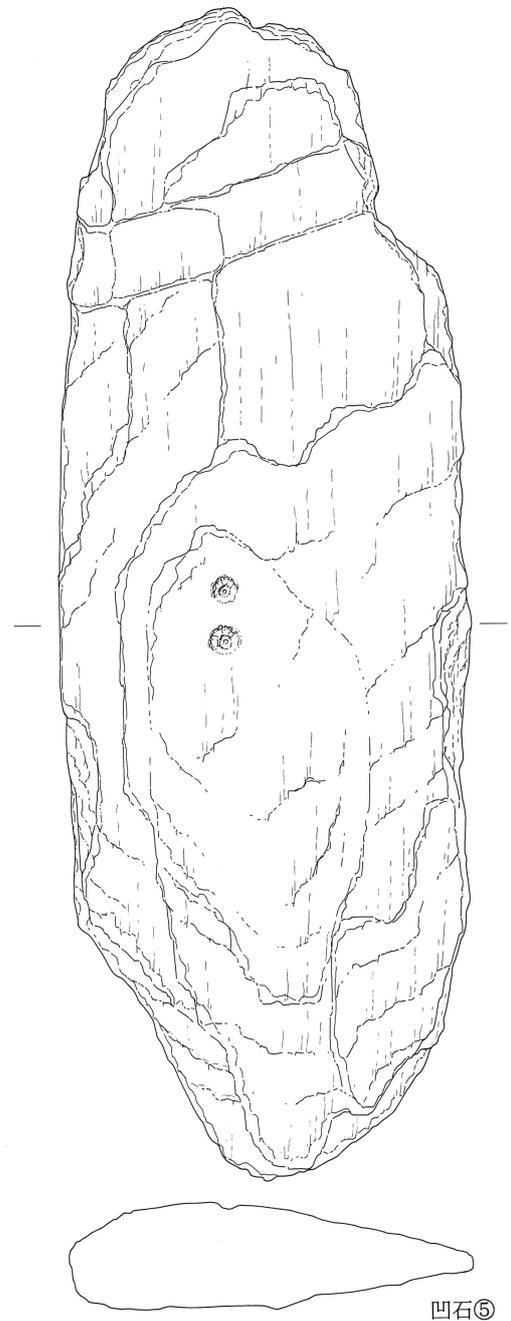
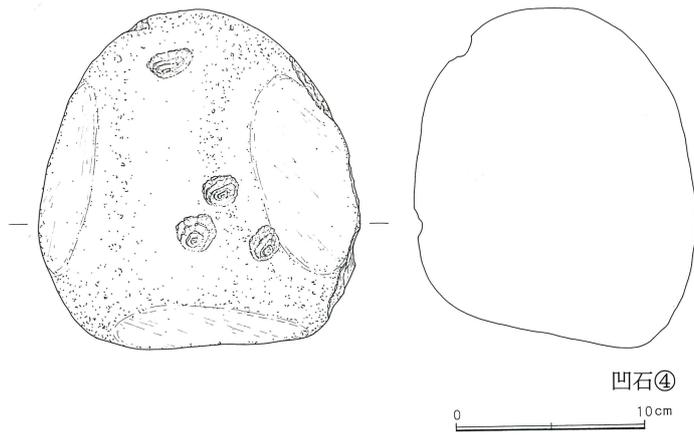
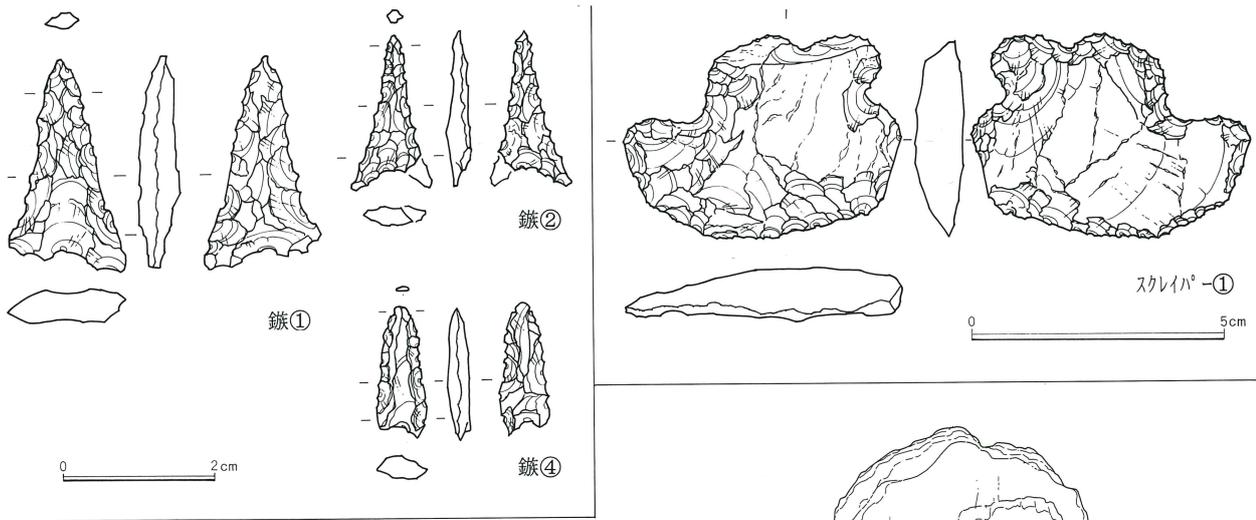
最大径29.7cm、現存高27.5cmを測る。

55は無文の深鉢で、堀之内1式に伴うものであろう。胴部中段に最大径を持つ樽形の器形で、頸部で「く」の字に外反し、ほぼ直線的に開く。

器厚5～8mmと、非常に薄手の器壁である。外面にはへら状工具による粗い器面調整の痕跡がみとめられる。内面は横方向の研磨が徹底する。

器面灰黄褐色で、小礫が目立つ。焼成は良好である。最大径27.4cm、口径26.5cm、現存高16.4cmを測る。

第58図 石棺墓群出土石器



第14表 石棺墓群石器一覧表

石 鏃

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形 態	(長さ/幅)比	残存度
1	S X10一括	28.0	(15.0)	4.8	1.52	チャート	A-1		④
2	S X10一括	20.5	(9.0)	3.0	0.33	チャート	A-1		④
3	S X10一括	18.5	16.0	4.9	1.40	チャート	A-1	1.1	⑧
4	S X10一括	17.5	6.0	2.7	0.32	チャート	A-1	2.9	④
5	S X10一括	17.5	(11.0)	3.4	0.44	黒曜石	A-1		④
6	S X10一括	(11.0)	(8.5)	2.4	0.17	黒曜石	E		③
7	S X10一括	(10.5)	(7.0)	2.5	0.14	チャート	E		⑦
8	S X10一括	(8.5)	(8.0)	2.1	0.10	黒曜石	E		⑤
9	S X10一括	(6.5)	(5.5)	2.5	0.06	チャート	E		⑦
10	S X10一括	(8.0)	(7.0)	3.2	0.15	チャート	E		⑦

石 錐

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形 態	残存度
1	S X10一括	22.0	7.5	5.3	0.86	チャート	B	①

スクレイパー

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形態I	形態II	残存度
1	S X10掘り方	40.0	54.5	9.7	23.17	チャート	A-2		①

石 錘

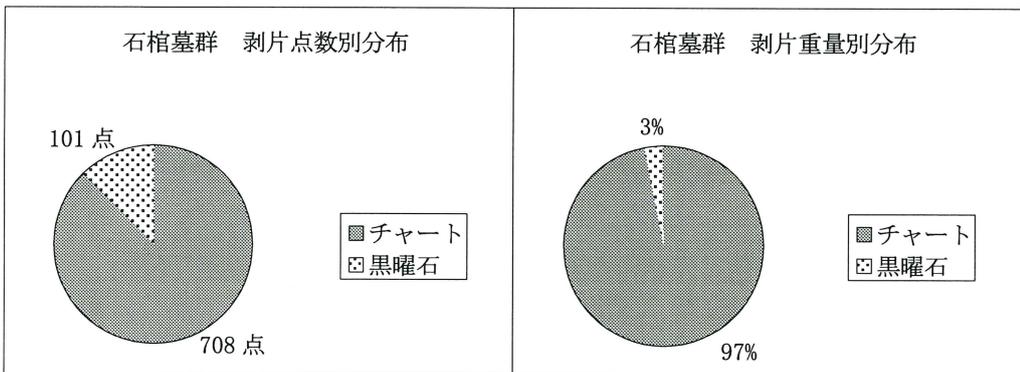
番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形態I	形態II	残存度
1	S X10一括	57.0	40.5	12.5	43.63	安山岩	A	b	①
2	S X10掘り方	55.5	34.5	11.5	35.10	片岩	A	b	①

磨 石

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形 態	残存度
1	S X 9	174.0	72.0	50.5	979.04	花崗岩	C	①

凹 石

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形態I	形態II	残存度	転用元
1	S X7,8	134.0	107.0	62.0	1267.15	花崗岩	A-2	a	①	磨石
2	S X7,8	121.0	99.5	57.5	934.47	花崗岩	A-2	a	①	-
3	S X10掘り方	105.5	97.0	44.0	698.48	砂岩	A-2	a	①	磨石
4	S X10 No.1	165.5	176.0	155.0	6540.00	花崗岩	A-2	b	③	-
5	S X10 No.2	628.0	221.0	71.5	10200.00	片岩	B-1	b	①	-



第59図 第1号列石遺構



(3) 列石遺構

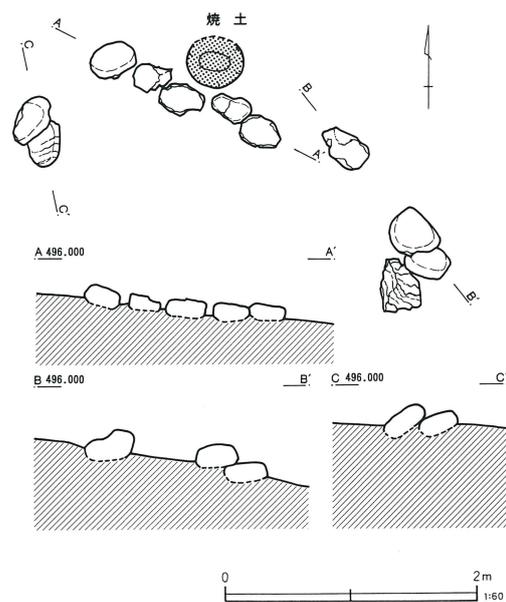
第1号列石遺構 (第59図)

C-2・D-2グリッドに所在する。第1・2・3号住居跡を切っている。総延長8m、走行方向はN-48°-Eを指す。

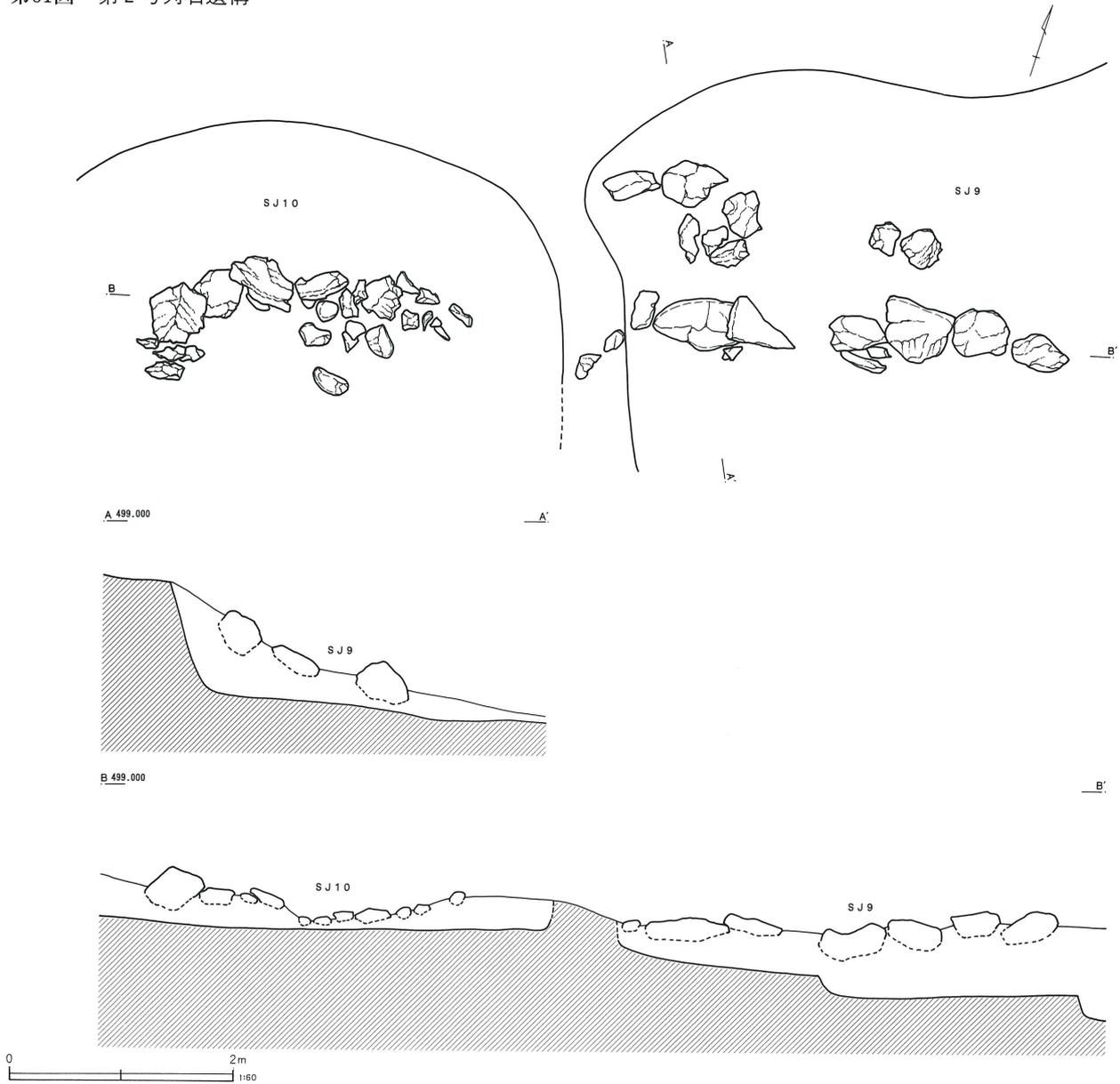
第2号住居跡を東西に横切り、第1号住居跡の東壁を越えて覆土中に入ります。同住居跡のプラン中央部までは石材が分布するものの、急速に数を減らし、西壁には達していない。

こぶし大から人頭大までの礫によって構成されている。技法のうえでは、小口立ての部分、乱積状の部分、土砂もろとも積み重ねた部分等まちまちで、地山中の自然礫層にかかる部分では、これを一部利用しているものと思われる。

第60図 第3号列石遺構



第61図 第2号列石遺構



第2号列石遺構 (第61図)

E-3グリッドに所在する。第9・10号住居跡を切っている。2軒の住居跡を東西に横切って、両者の覆土中に構築されている。総延長8.2m、走行方向はN-78°-Eを指す。

こぶし大から長径1mまでの、比較的大型の礫によって構成されている。技法のうえではほとんど平置き状態で、レベル的にも起伏がみられた。

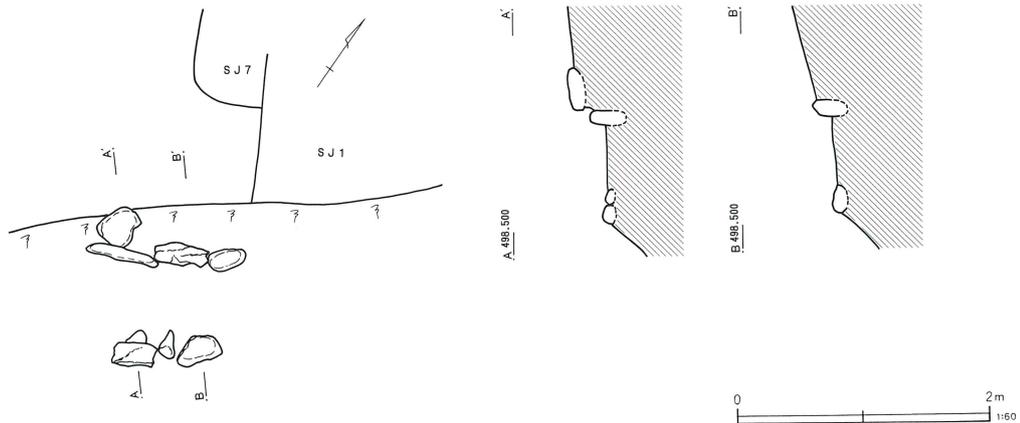
第3号列石遺構 (第60図)

F-5グリッド、第1遺物包含層中に所在する。総延長3.28m、走行方向はN-63°-Wを指す。

扁平な川原石を平置きにしたもので、地形に沿って南東に緩やかに傾斜している。石材上端のレベルは比較的良く揃っている。

列石の北にわずかな焼土だまりがみられたが、周辺にこれに伴う施設は発見できなかった。

第62図 第4号配石遺構



(4) 配石遺構

ここでは、敷石住居・石棺墓・列石等、機能が明らかであったり、ある程度の類型化が可能なものを除いた、「狭義の配石遺構」を一括する。

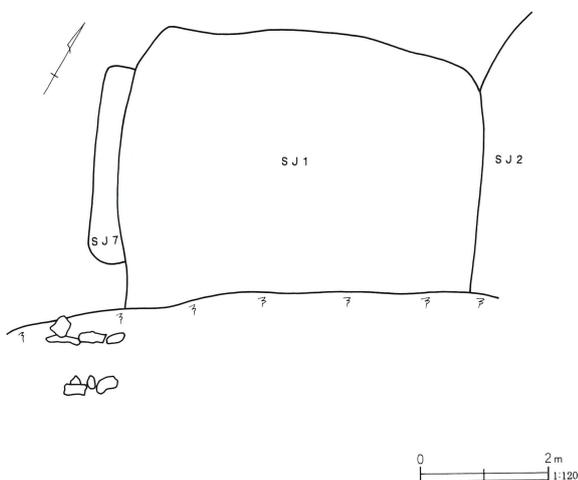
第4号配石遺構 (第62図・第63図)

D-3グリッドに所在する。

調査時点でこの遺構を、傾斜地の集落を左右に連絡していた道路の残骸と考え、道路状遺構と呼称した。

斜面を等高線に沿って、幅1.5mあまりにわたって平坦に造成し、東西方向に2条の列石を敷設する。現存する列石の総延長1.32m。整地面と原斜面との段差は、北壁部分で24cmを測る。

第63図 第4号配石遺構の位置



第5号配石遺構 (第64図)

E-4グリッドに所在する。第10号住居跡の直下の斜面に位置している。

直径80cm程度の川原石2点を中心に、こぶし大から直径50cmまでの礫を円形に集積したもので、長径0.92m、短径0.87mを測る。

石材は川原石と準片岩・粘板岩の角礫が半々程度用いられている。配石面は中央がわずかに落ち窪んだ状態であった。

下面に土壙その他の施設は検出されなかった。また、確実に相伴する遺物は存在しない。

第6号配石遺構 (第64図)

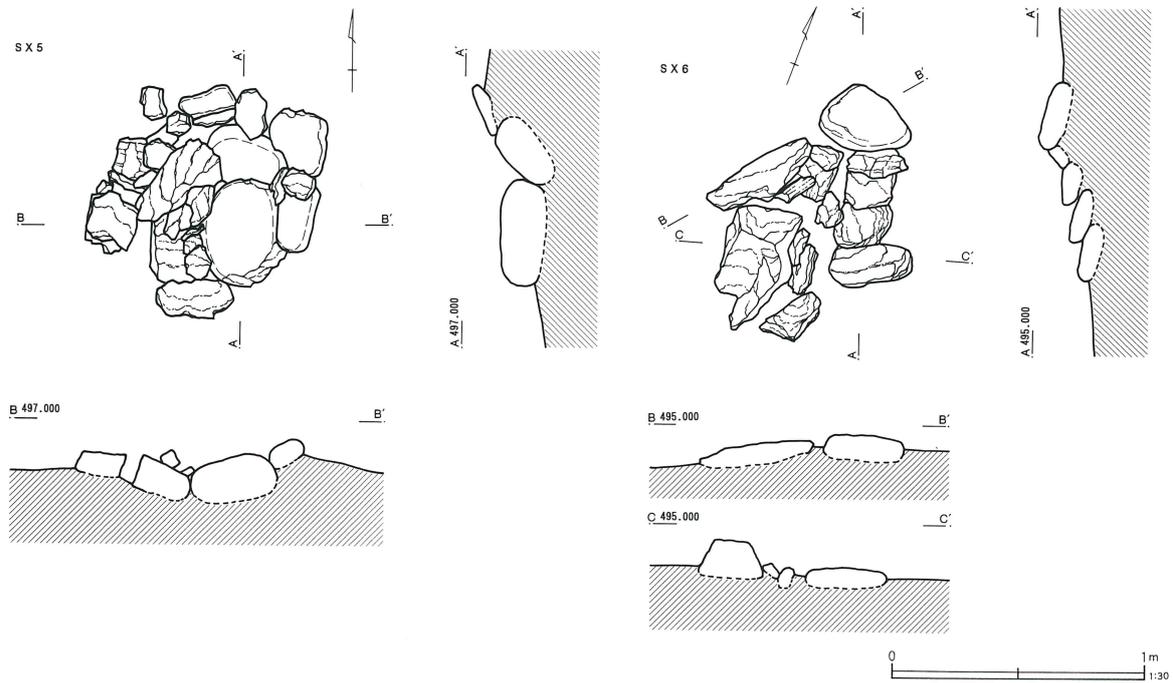
G-5グリッド、第1遺物包含層の上面に所在する。現地表下十数cmのレベルで検出した。

板状の礫を斜面に沿って階段状に置きならべ、これに隣接して人頭大の礫を集積したもので、長径1.1m、短径0.82mを測る。

石材は主として準片岩・粘板岩の角礫が用いられている。

周辺から縄文土器以外の遺物が出土しなかったため、縄文時代の遺構と考えたが、確実に相伴とされる遺物が存在せず、より後代のものである可能性もある。

第64図 第5・6号配石遺構



(5) 土壙

第1号土壙 (第65図)

F-4グリッドに所在する。第2号土壙と切り合い関係にあるが、新旧関係は不明である。

第1遺物包含層の北端に位置する。包含層完掘後に、地山黄褐色砂質シルト層の上面で検出したが、より上面から掘り込まれたものである可能性が高い。

楕円形の土壙で、長径1.23m、短径0.9m、深さ17cmを測る。長軸方向N-46°-Eを指す。

北西の壁近くで完形の注口土器が出土した。

出土遺物 (第65図)

無文の注口土器で、口縁の先端と、突起の一部を欠失するほかはほぼ完形で底部から胴部下半にかけて外反しつつ立ち上がり、胴部中段で屈曲してドーム状の胴上半部へと接続する。頸部はごく短く、垂直に立ち上がり、口端肥厚して外反し、外面稜をなす。

注口部は胴上半部から垂直に近い角度で突出する。口縁には一対の環状把手が付され、上端に球状の突起が付される。注口と把手は連結しない。

文様は一切施文されず、前面に研磨が徹底される。

焼成は良好ながら、胎土にきわめて多量の砂を含み、器面の風化が顕著である。

口径7.5cm、最大径15.7cm、現存高18.6cmを測る。

第2号土壙 (第65図)

F-4グリッドに所在する。第1号土壙と切り合い関係にあり、これとほぼ同時期のものとみられるが、新旧関係は不明である。

不整楕円形の土壙で、長径0.8m、短径0.62m、深さ20cmを測る。長軸方向N-65°-Wを指す。遺物は出土していない。

(6) 埋設土器

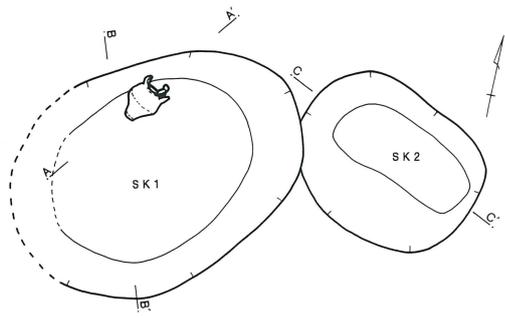
第1号埋甕 (第66図)

F-3グリッドに所在する。土層確認用のトレンチ内で、深鉢の胴部のみが正位置で出土した。周辺にこれと関連する遺構や遺物は発見できなかった。

出土遺物 (第66図)

円筒形の深鉢で、胴部の約2/3が残存する。2種類の単節縄文を多段に施文することにより、横位の羽状縄文が構成される。胎土に多量の繊維と砂粒を混入する。焼成は悪く、器面は脆弱である。

第65図 第1・2号土壇および出土土器

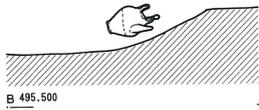


A 495.500

A'

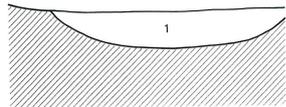
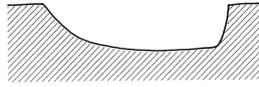
C 495.500

C'



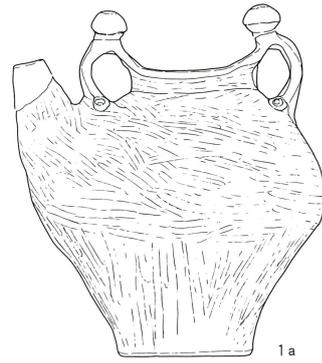
B 495.500

B'

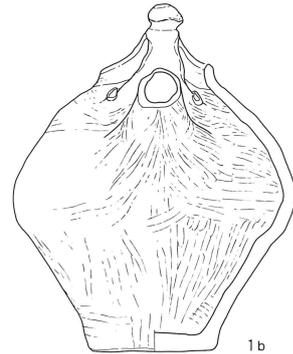


1 暗灰褐色混雑土層：焼土ブロック少量、炭化物ごく少量含む 粘性有り 締まり良し

0 1m 1:30



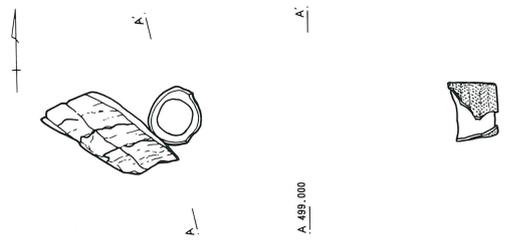
1a



1b

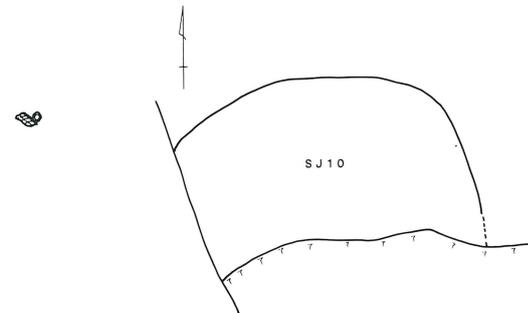
0 10cm 1:4

第66図 第1号埋甕および出土土器



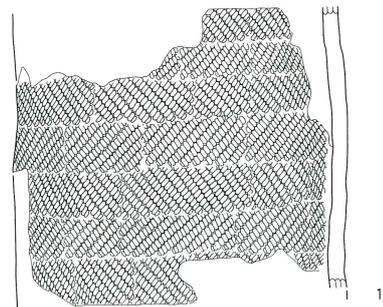
A 495.000

0 1m 1:30



SJ10

0 2m 1:120



1

0 10cm 1:4

(7) 土器捨て場

今回調査した範囲で、二つの地点に遺物包含層の存在が確認された。

第1遺物包含層 (第67図～第69図)

F-4・5、G-4・5グリッドで検出された。南端は県文化財保護課による試掘の際、遺物が採集された崖面で、いわば入波沢西遺跡の発見のきっかけとなった遺物包含層である。

遺物の散布範囲は約80㎡、層厚最大90cm。地山の状態は、火山灰起源と思われる黄褐色の砂質シルト層が、F-5→G-5ライン付近で急激に落ち込んでいる。この部分が段丘崖に相当するものとみられ、土器捨て場は、この段丘崖に沿って形成されている。

調査開始とともに復元個体を含む多量の土器類が出土し始め、当初、第11号住居跡と命名された。遺物は地点を記録したものだけでも3000点を数えたが、結局最後まで床面の検出に至らず、無遺物層である河成の黑色砂が露出した。

掘削の途上で数カ所の焼土溜まりが観察されたが、それ以外に生活面を思わせるものは検出されず、また、テーブル大の転石が出土するなど、堆積物の内容がいわゆる遺構の覆土とかけはなれていたため、最終的に遺構を伴わない遺物包含層と判断した。

出土土器の時期は、早期から後期中葉まで広範囲にわたるが、中心となるのは後期前葉堀之内1式期の資料である。

問題はこの包含層から出土する遺物の由来であるが、西に接し、遺物の散布する段丘斜面を見下ろす位置関係にある第12A・B号住居跡が、出土遺物の時期からみて最も適当であるように思われる。

第2遺物包含層

B-2・3、C-2・3グリッドで検出され、当初第4・5号住居跡として調査されたが、やはり床面の検出に至らなかった。中世の陶器や、鉄片なども出土しており、最終的に斜面上方の遺構群に由来する土器溜まりと考えた。

(遺物については後段に、グリッド出土遺物として一

括掲載する。)

出土遺物 (第70図～第80図)

すべて、第1遺物包含層から出土した土器である。

1・2は称名寺系の深鉢である。

1は胴部中段～上段にかけて残存する。平行沈線により大柄のV字状モチーフが描かれ、左右に三角形の充填文が描かれる。沈線間にはLR単節の縄文が充填施文される。最大径19.8cm、現存高9.4cmを測る。

2は胴部中段～底部付近にかけて残存する。単沈線によりわらび手や逆U字のモチーフが描かれる。胴部中段のくびれをはさんでモチーフが上下に対向するあり方は、称名寺式というより加曾利E以来の流れというべきかもしれない。縄文は施文されない。

3～13は、口縁部(口唇部)の文様帯が分離する一群である。多くは沈線文のみで縄文が施文されず、しばしば、幅広の頸部無文帯を持つ。

3は広口の小型深鉢である。ボウル状の胴部に、内反して「く」の字に内屈する、貧弱な頸部～口縁部が付される。胴部と頸部の境は平行沈線により区画され、ボタン状の貼付文が付される。

胴部には、J字モチーフをたすき状の平行沈線で連結した入り組み文が描かれる。下方の余白には、弧状の充填文が充填される。

最大径21.8cm、現存高13.0cmを測る。

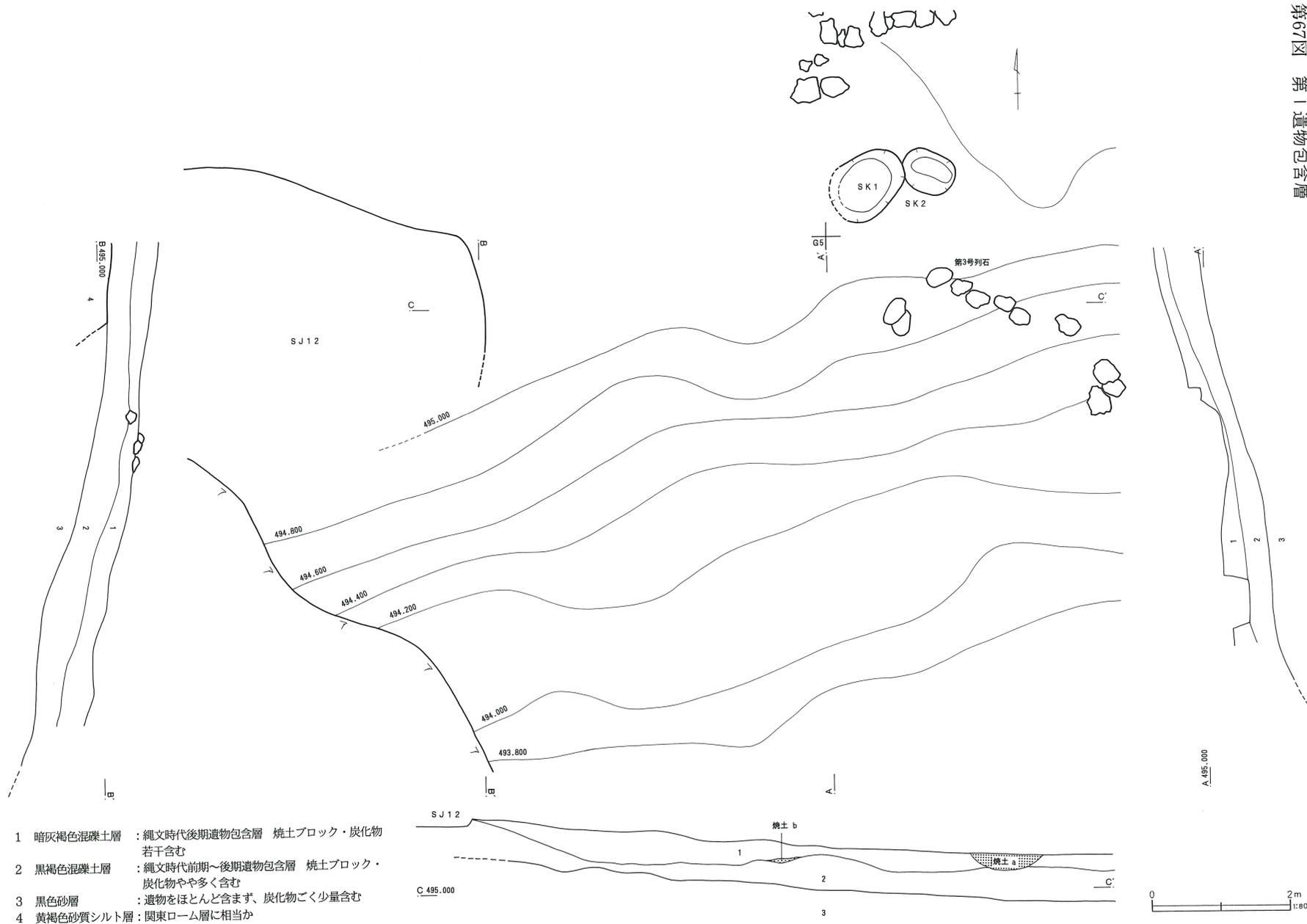
4は頸部と胴部の境界部分の破片である。上下の文様帯を平行沈線で区画し、8の字の貼付文を付す。胴部文様は3と類似の入り組み文である。最大径13.8cm、現存高7.5cmを測る。

5も境界部分の破片で、モチーフ・サイズとも4に類似するが、より薄手の器壁である。最大径11.3cm、現存高6.3cmを測る。

6は鉢の胴下半部である。J字文の下端を弧状の沈線によって連結する。最大径24.4cm、現存高9.1cmを測る。

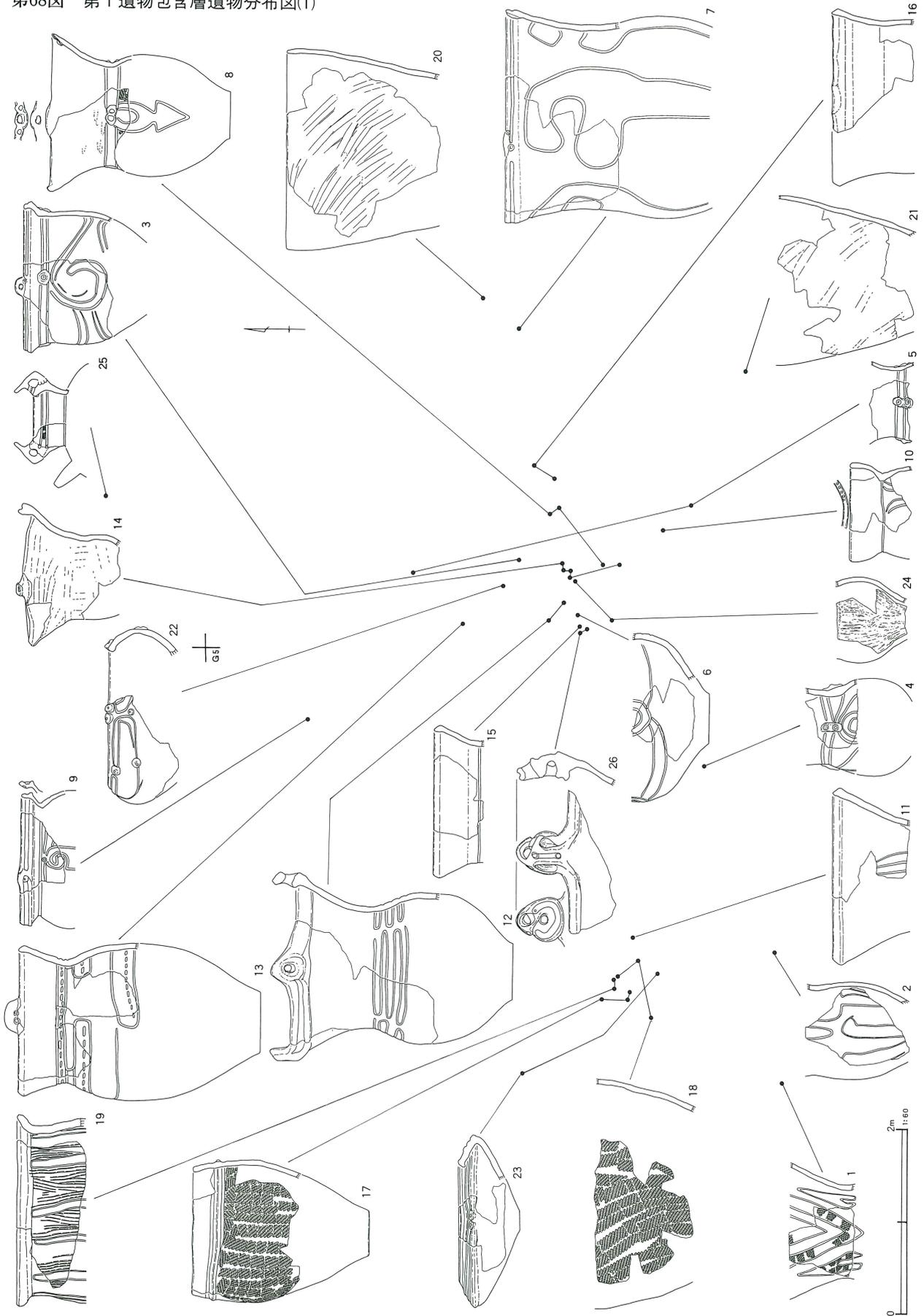
7は深鉢胴部から口縁部にかけての破片である。胴部中段に緩いくびれを持ち、口唇肥厚して、内面に稜を形成する。口唇外面には1条の沈線を巡らせる。

第67図 第1遺物包含層

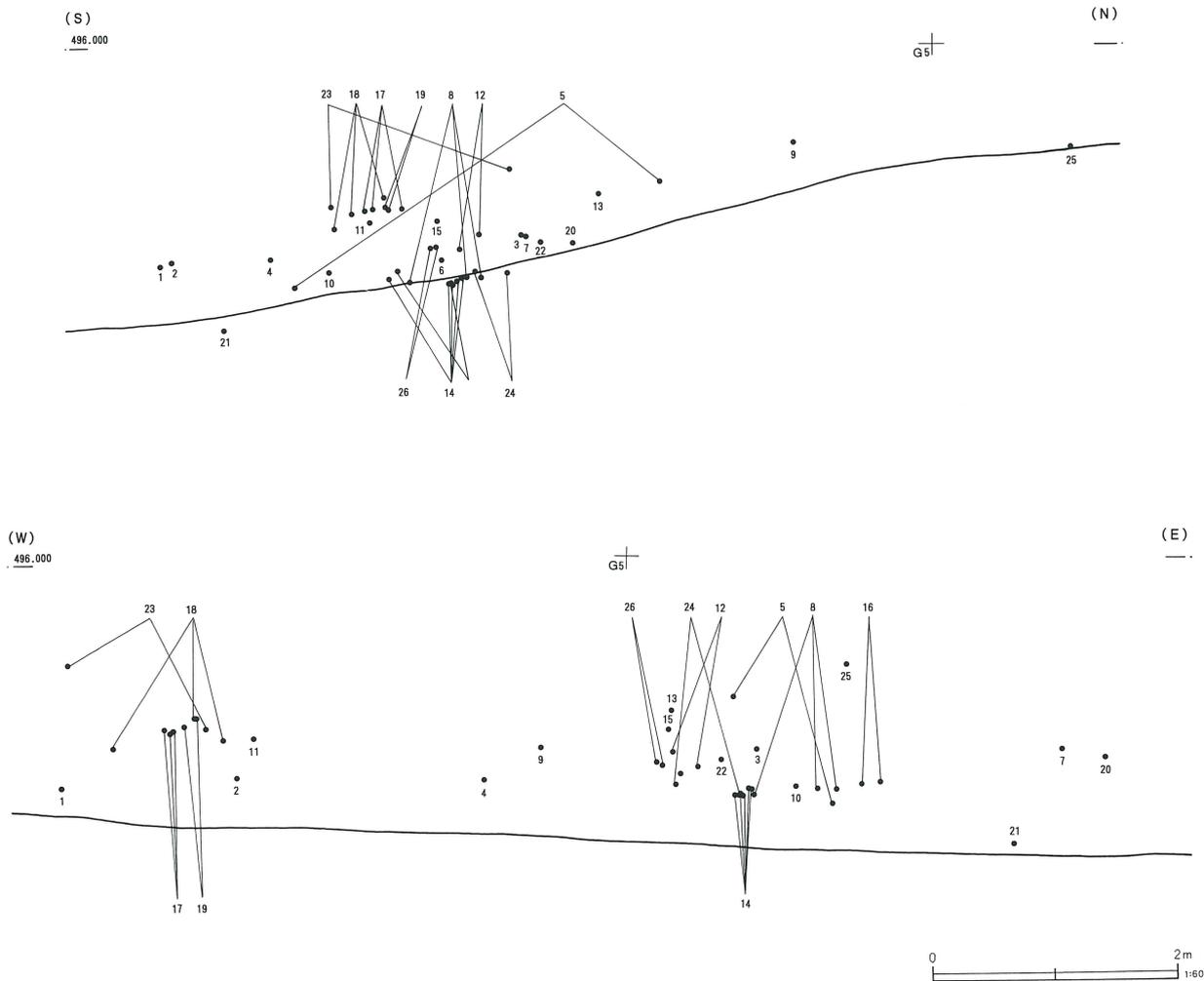


- 1 暗灰褐色混礫土層 : 縄文時代後期遺物包含層 焼土ブロック・炭化物若干含む
- 2 黒褐色混礫土層 : 縄文時代前期～後期遺物包含層 焼土ブロック・炭化物や多く含む
- 3 黒色砂層 : 遺物をほとんど含まず、炭化物ごく少量含む
- 4 黄褐色砂質シルト層 : 関東ローム層に相当か

第68图 第I遺物包含層遺物分布图(1)



第69図 第I遺物含有層遺物分布図(2)



胴部文様は単沈線による逆C字のモチーフで、アルファベット文か、わらび手文の一部を構成するものであろう。口径推定30.8cm、現存高16.4cmを測る。

8は縄文の施文される深鉢で、胴上半部から頸部～口縁部にかけて残存する。幅広の頸部無文帯を持ち、4単位の小波状口縁で、内文を持つ。胴部との境は平行沈線で区画され、横位の8の字状貼付文が付される。

胴部には紡錘状の磨り消しモチーフが描かれる。地文はLR単節の縄文で、横位回転で施文される。

口径推定22.2cm、現存高11.6cmを測る。

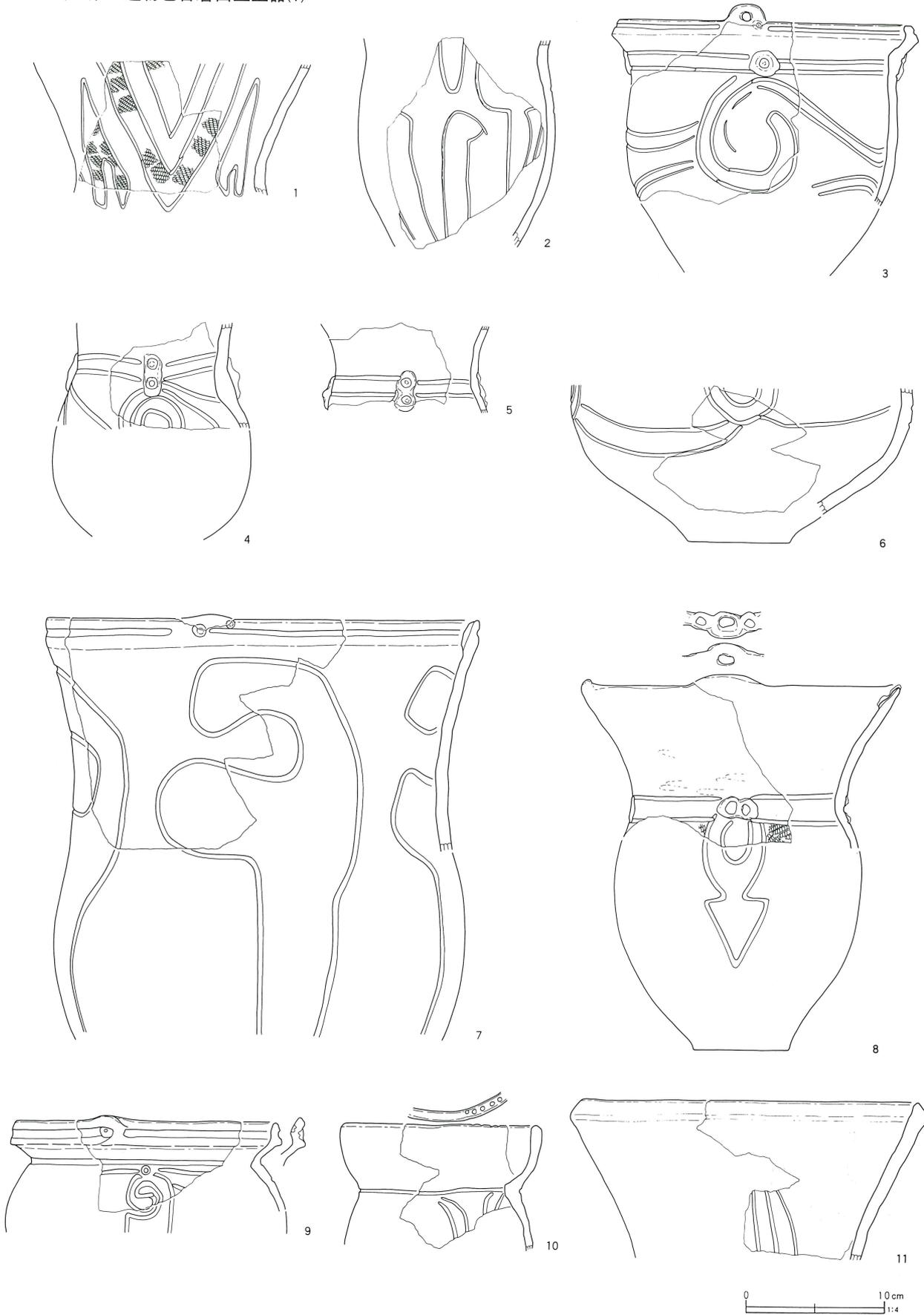
9は広口の深鉢で、3に類似する。胴部にはわらび手状の懸垂文が描かれ、たすき状の平行沈線で横位に連結される。

10は小型の深鉢である。頸部にくびれを持ち、口縁内湾するキャリパー形の器形は、伴出した他の土器と比べ異質である。

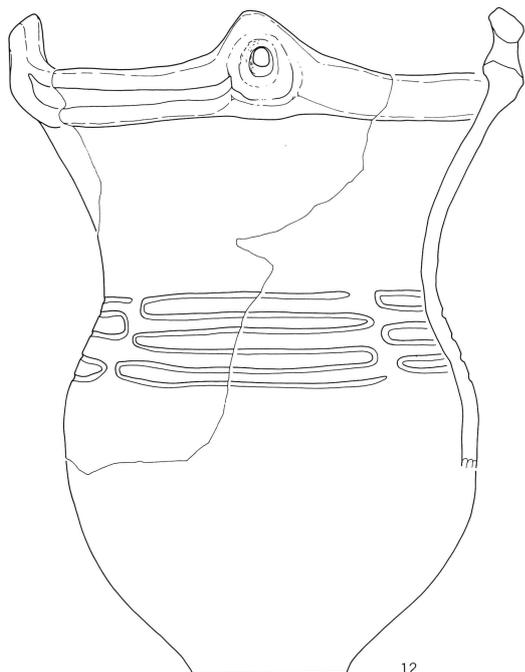
胴部には平行沈線による片流れの懸垂文が垂下する。口端上には円形の刺突文が並ぶ。口径推定13.6cm、現存高9.6cmを測る。

11は深鉢で、口縁から胴部中段まで残存する。ほぼ

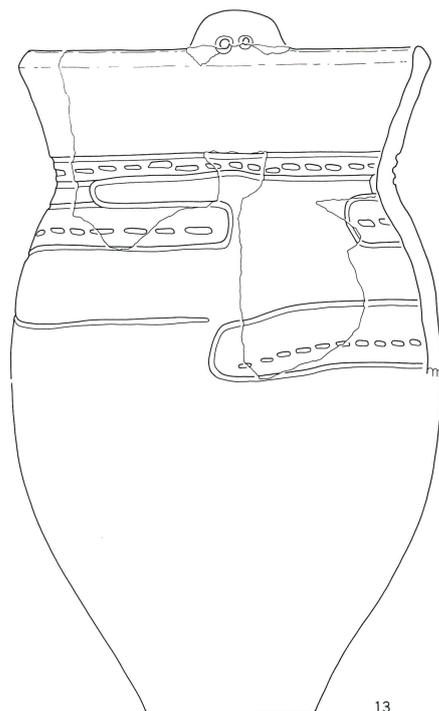
第70図 第I遺物包含層出土土器(I)



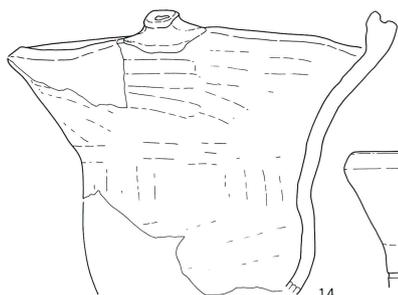
第71図 第I遺物包含層出土土器(2)



12



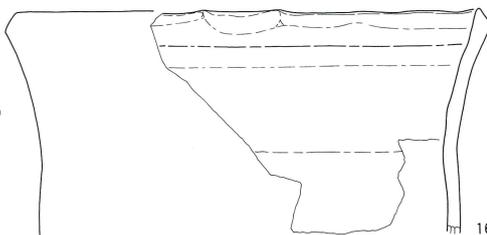
13



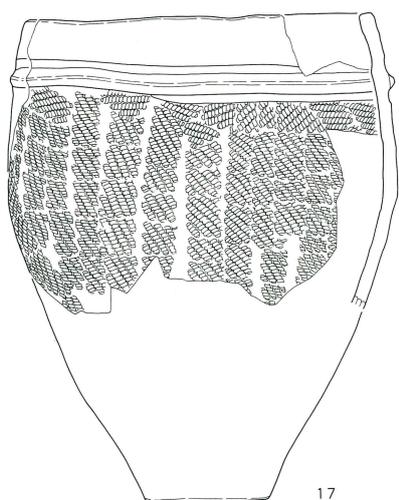
14



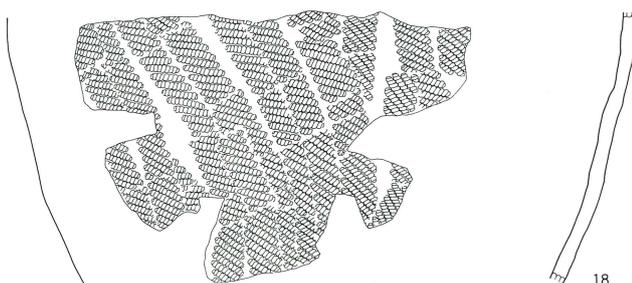
15



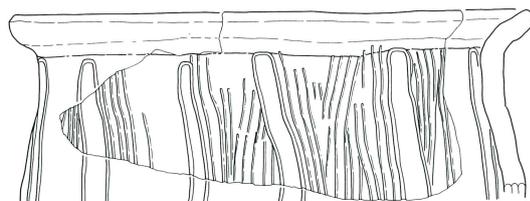
16



17



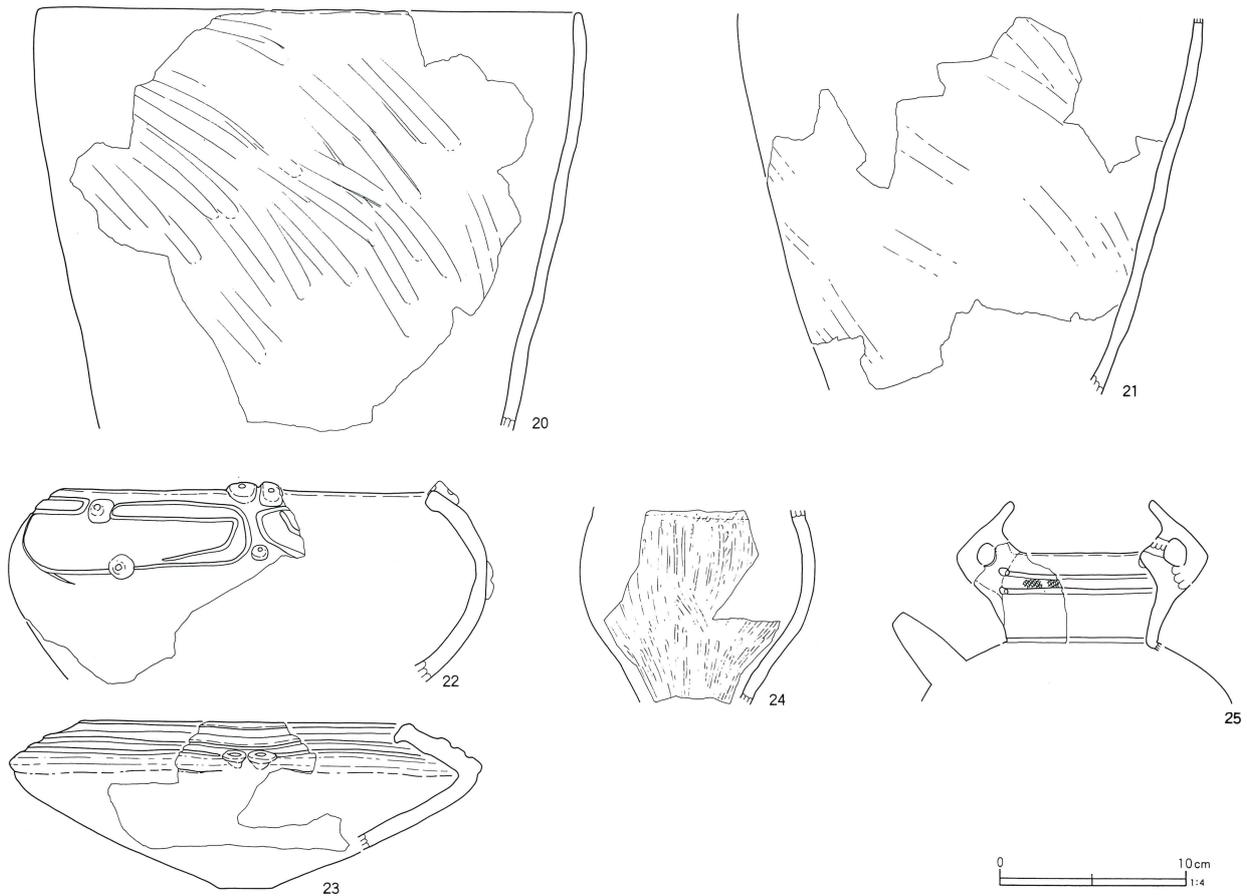
18



19



第72図 第I遺物含有層出土土器(3)



直線的に開く朝顔形の器形で、胴部中段にくびれを持つかもしれない。口唇は肥厚して、外面に稜を形成する。

文様はほぼ一段で構成される。平行沈線を用いた懸垂文である。口径推定23.8cm、現存高11.4cmを測る。

12は深鉢で、口縁から胴下半部までが残存する。

胴部中段にくびれを持つ。頸部は無文で、直線的に開く。口縁は折り返し口縁で外面に段を形成し、口唇に文様帯を持つ。

4単位の波状口縁をなすものとみられ、波頂部に貫通口が配される。胴部中段に幅広の蛇行沈線が描かれる。

口径推定24.5cm、現存高24.2cmを測る。

13は胴部中段に最大径を持つ樽形の深鉢である。頸部が「く」の字にくびれ、口縁に向かって直線的に開く。口唇肥厚して、外面に稜を形成する。口端上に貫

通孔をとまなう突起が存在する。

頸部のくびれ部分に平行沈線が巡り、内部に列点文が描かれる。胴部には幅広の蛇行沈線が描かれ、やはり列点文が充填される。頸部の区画との間がノの字の単沈線で連結されている。

口径推定20.4cm、最大径22.8cm、現存高17.4cmを測る。

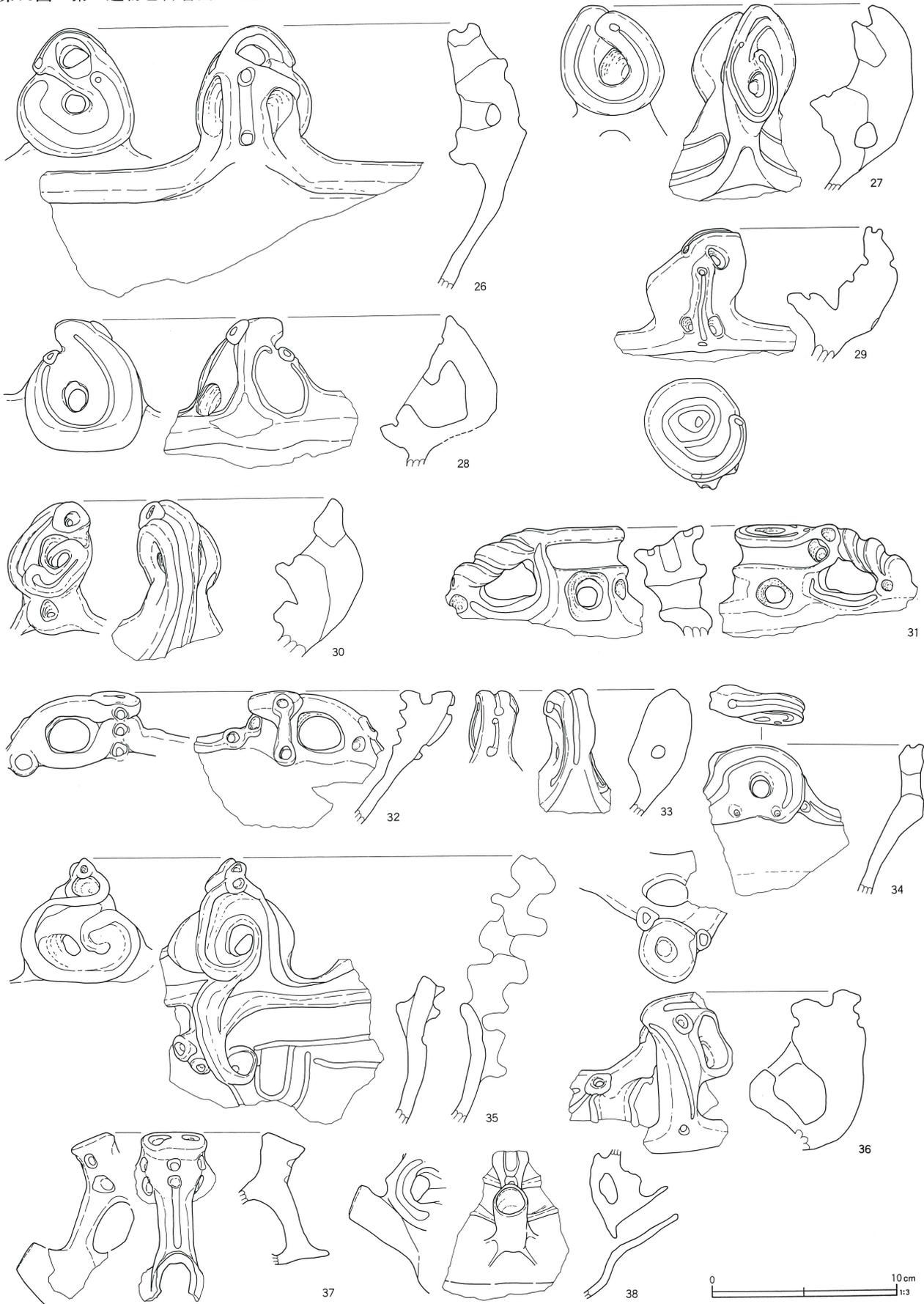
14は無文の深鉢である。胴部中段にくびれを持ち、口縁はほぼ直線的に開く。口唇肥厚して、外面に稜をなす。口唇上に柱状の突起が存在し、頂部には円形の刺突が付される。

口径推定19.0cm、現存高15.0cmを測る。

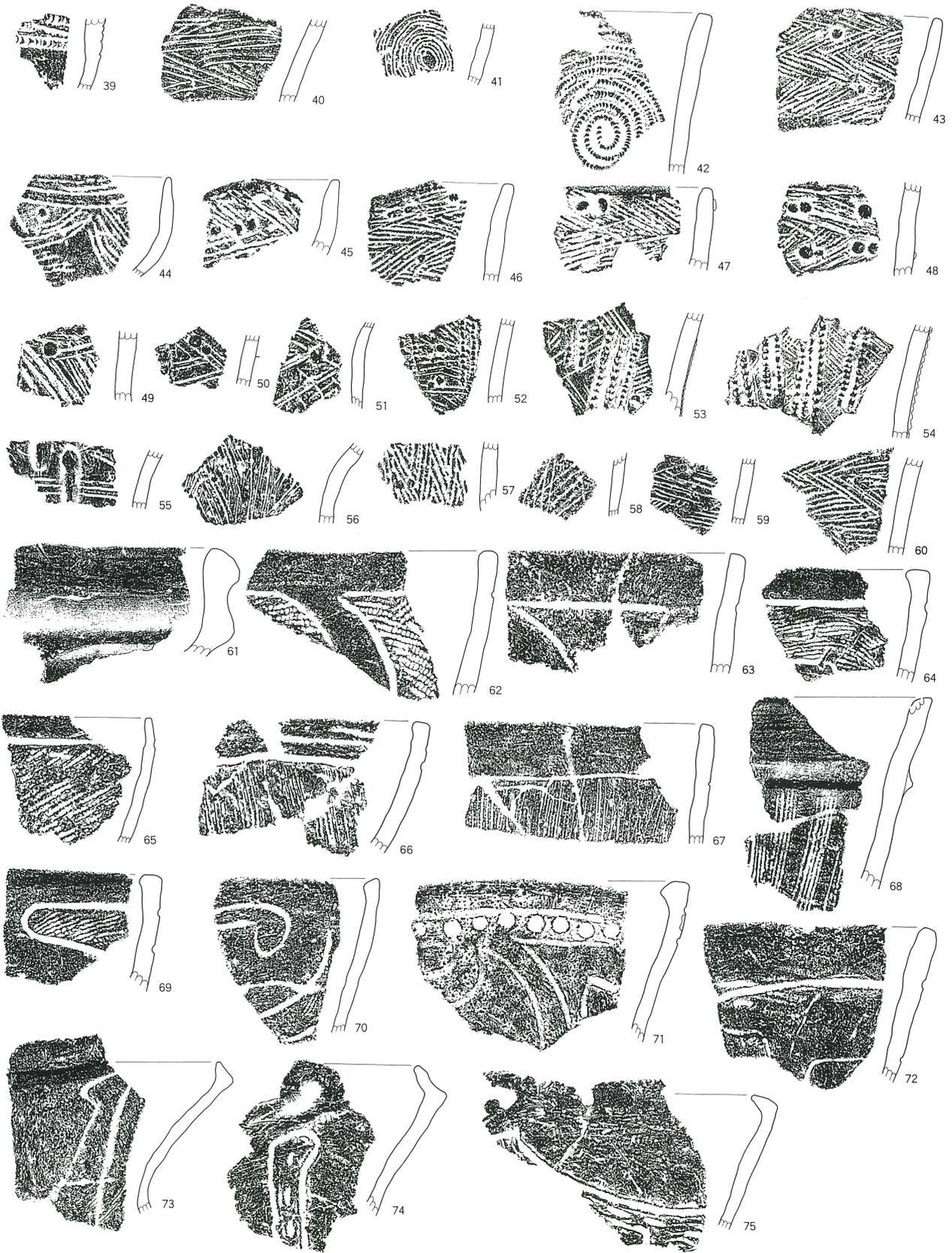
15は深鉢の頸部～口縁部である。胴部との境に1条の沈線が巡るほかは、文様は見られない。

口唇肥厚し、外面に稜を形成する。口径推定20.8cm、現存高7.8cmを測る。

第73図 第I遺物包含層出土土器(4)



第74图 第I遺物包含層出土土器(5)



0 10 cm
1:3

16は無文の深鉢で、胴部中段から口縁までが残存する。胴上半部からゆるやかに外反する器形で、口唇肥厚して外面に稜をなす。口唇上には2個1単位の小突起が配される。

口径推定24.3cm、現存高11.9cmを測る。

17・18は口縁部に無文帯を持ち、胴部に縄文が施文される個体で、金子直行氏のいわゆる「戸崎前タイプ」である。

17は、胴部中段に最大径を持つ樽形の深鉢である。口縁から胴部中段までの、ほぼ1/2が残存する。

頸部に幅広の隆帯が巡り、胴部にはLR単節縦位回転の縄文が施文される。口径18.4cm、最大径20.6cm、現存高15.6cmを測る。

18は胴部中段のみが残存する。LR単節縦位回転の縄文が施文される。最大径33.0cm、現存高14.3cmを測る。

19は条線文の粗製深鉢である。東～北関東、新潟方面に類例がみられる。

胴部中段が若干張り出す単調な器形で、頸部が強く外屈し、口端がわずかに内湾する。口唇は肥厚して、外面に段を形成する。

口縁部は無文、胴部は逆U字の懸垂文が垂下し、間隙に櫛歯状工具による条線文が施文される。

口径推定27.0cm、現存高10.0cmを測る。

20・21は無文の深鉢である。底部から胴上半部にかけて直線的に開き、口縁直下でわずかに内湾する。器面にはへら状工具による粗い調整の痕がみられる。

20は口径推定28.2cm、現存高22.1cm。21は最大径24.4cm、現存高19.9cmを測る。

22・23は浅鉢である。いずれも胴上半部に文様が集約されている。

22は胴部中段が丸く張り出す。口唇は肥厚して内屈し、内面に段を形成する。

胴上半部には平行沈線により横楕円形の区画が描かれ、区画文の左右および中間点に、円形刺突を伴うボタン状の突起が配される。

口径推定17.2cm、最大径25.2cm、現存高6.7cmを測

る。

23は胴部中段がソロバン玉形に鋭角に張り出すソロバン玉形の浅鉢である。口唇は肥厚して、内側に段を形成する。口端は平らに整形されている。

胴上半部に幅広の隆帯が巡り、横一对の貼付文が付される。隆帯間には沈線によるなぞりが加えられる。

口径推定17.2cm、最大径25.0cm、現存高6.7cmを測る。

24は無文の深鉢胴下半部である。へら状工具による縦位の研磨調整が徹底される。焼成は良好で、薄手かつ堅緻な器壁である。最大径12.2cm、現存高10.3cmを測る。

25は注口土器の口縁部で、後期中葉の土器である。口端上に前後一对の橋梁状把手が配されるものと思われる。口縁下に平行沈線が巡り、間にLR単節横位回転の縄文が施文される。

口径推定7.6cm、最大径13.2cm、現存高5.8cmを測る。

39～41は諸磯b式である。39は爪形文、40・41は半裁竹管による集合沈線で文様が描かれる。

42～50は諸磯c式である。集合沈線の上にボタン状の貼付文が付される。42・44は古相を示す。

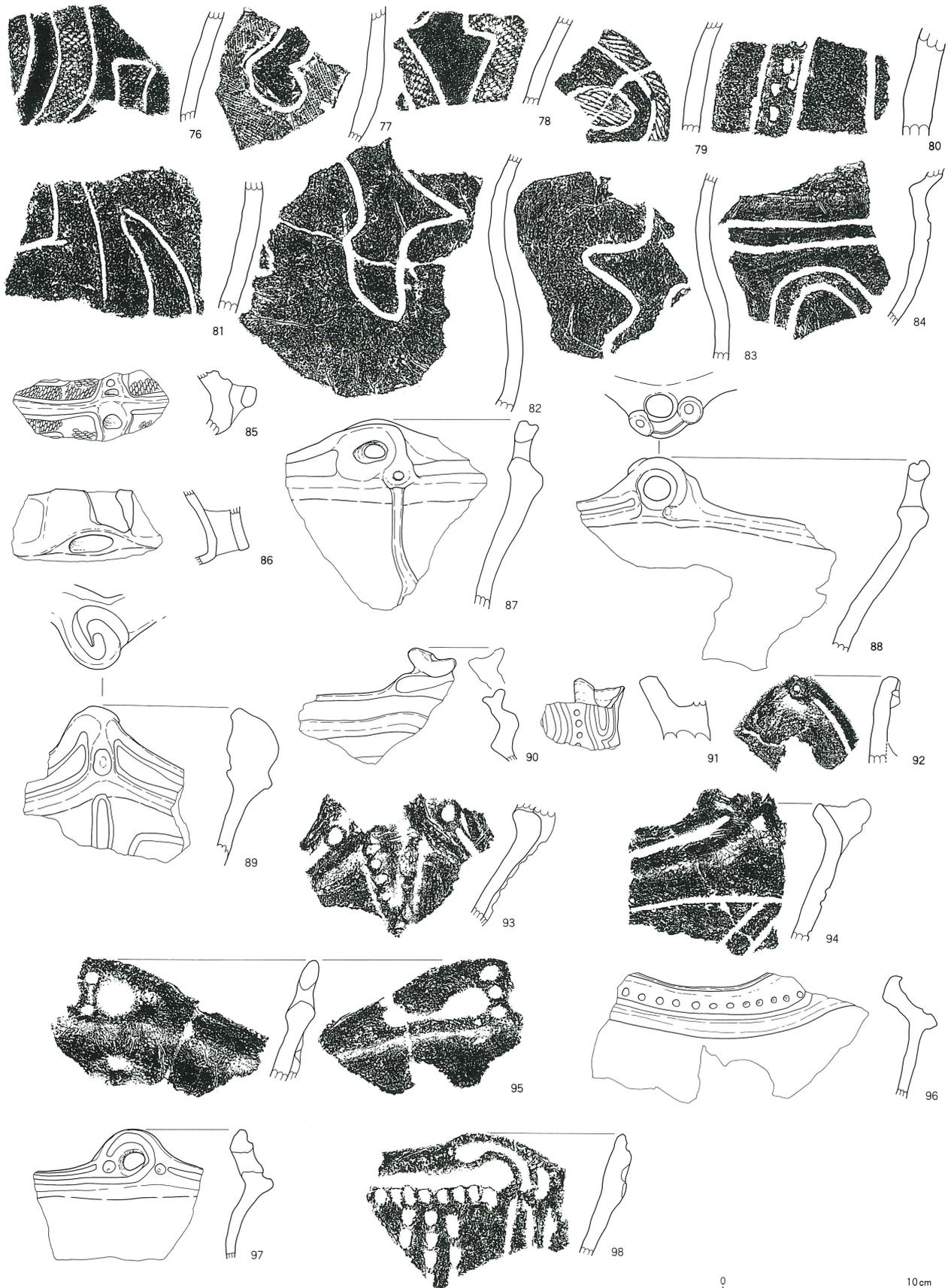
61は加曾利EⅢ式である。キャリパー類の口縁部で、隆沈線による区画文の一部である。

62～68は後期初頭における加曾利E系の土器群である。62・63は口縁部無文帯から大柄のJ字文が垂下する。66以下は条線地文の土器群である。

26～30・33・69～86は称名寺式である。26～30は終末期に特有の朝顔形の突起である。28は中空突起である。33は中部高地系の土器で、縦位の円盤突起である。

69～71・76～79は地文縄文である。71は円形刺突列による口縁部文様帯が発生している。74・75・80は列点施文のいわゆる称名寺Ⅱ式である。72・73・81～84は素文の土器で、堀之内Ⅰ式に下るものも含まれるであろう。84は横位の平行沈線を挟んで胴部文様帯が二段構成をとる。

第75図 第I遺物包含層出土土器(6)

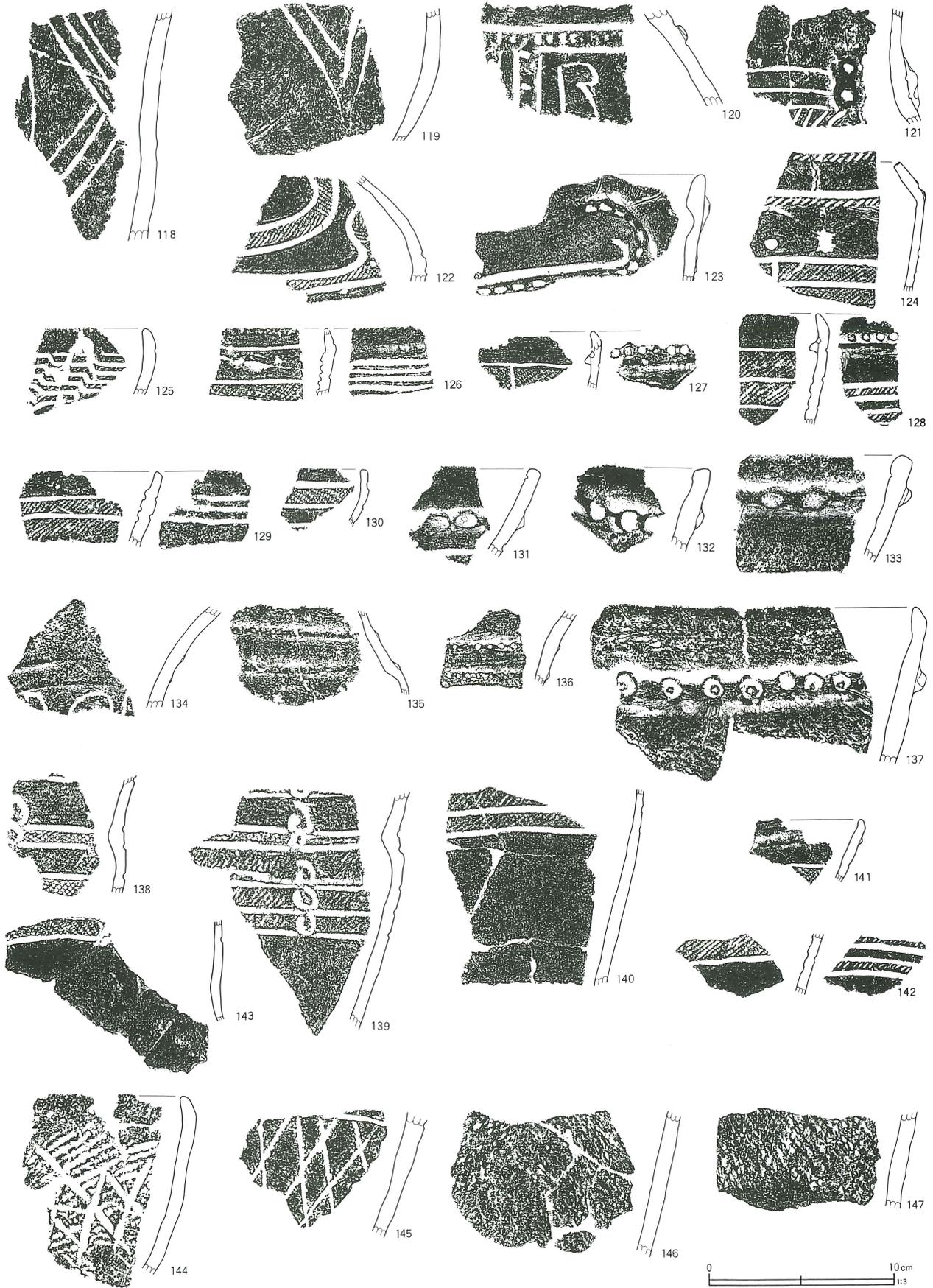


第76図 第I遺物包含層出土土器(7)

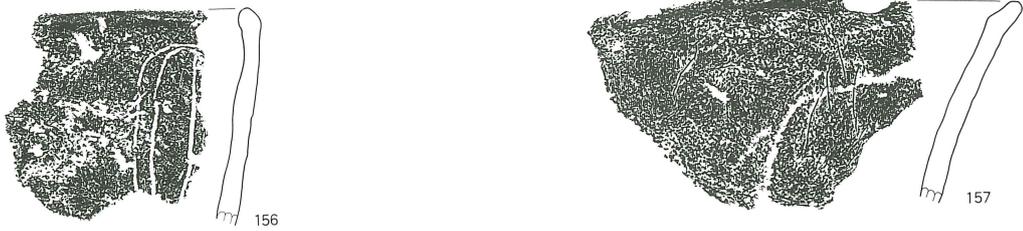
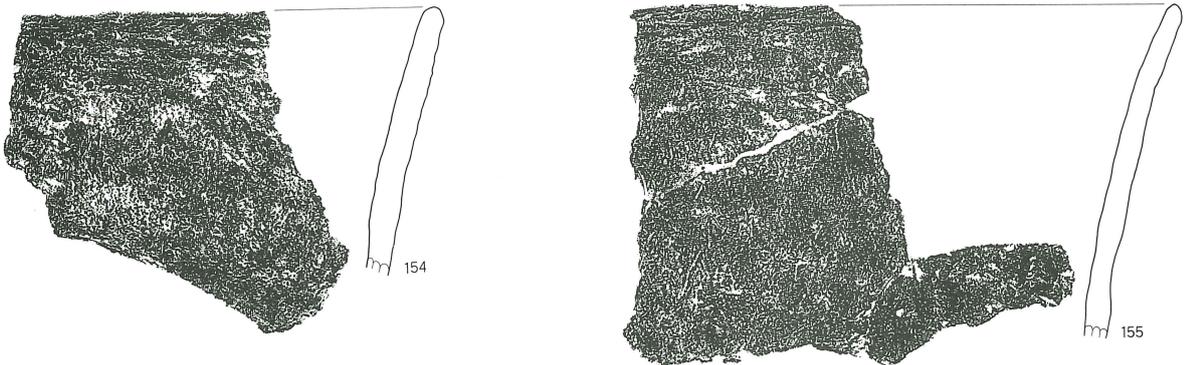
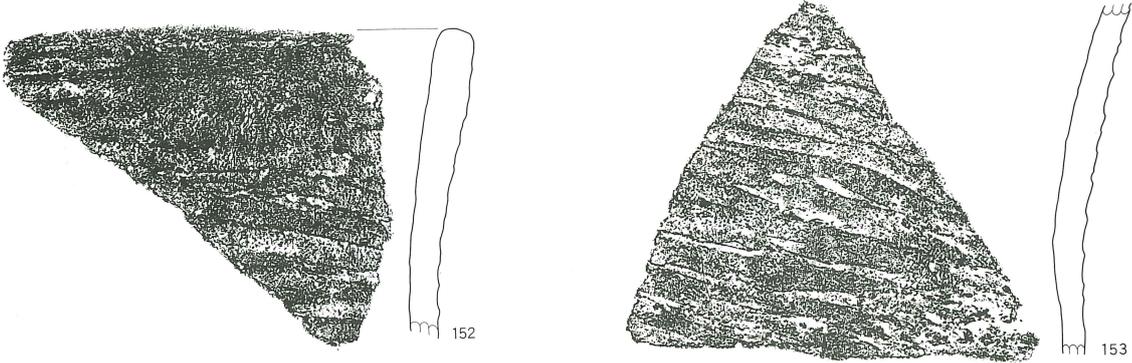
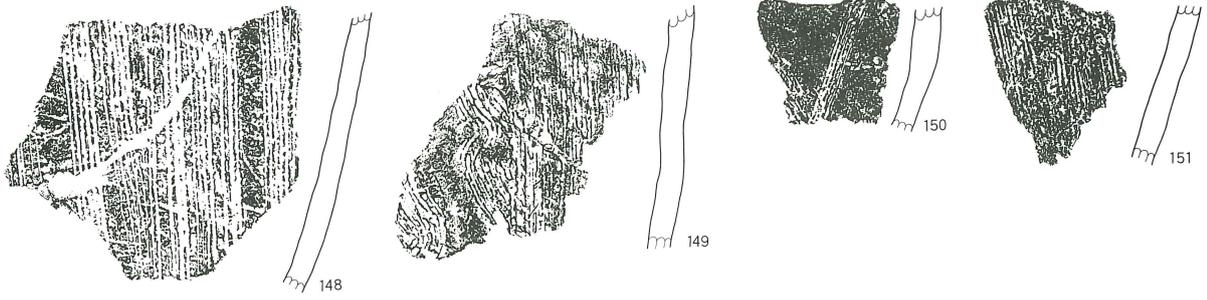


0 10cm 1:3

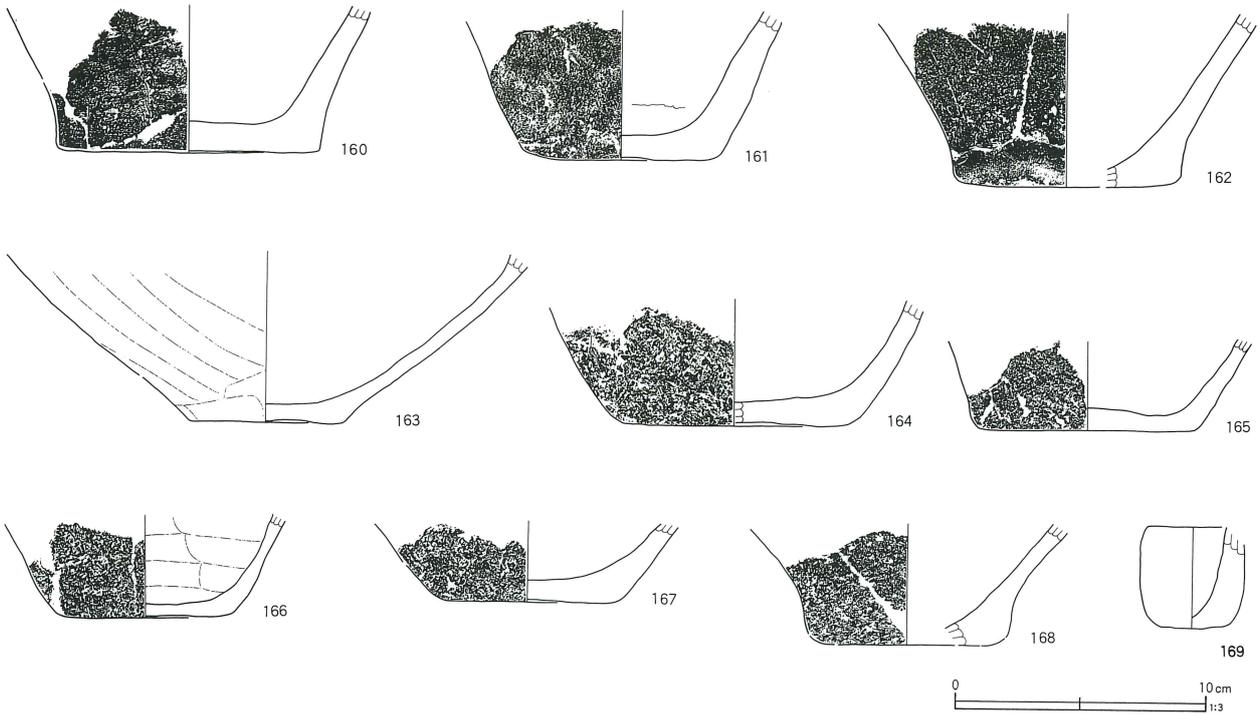
第77図 第I遺物包含層出土土器(8)



第78図 第I遺物包含層出土土器(9)



第79図 第I遺物包含層出土土器(10)



85・86はひさご形の四つ手壺で、口縁に注口が付されるものであろう。

31・32・34～38・87～121は堀之内1式である。突起類には、盲孔と弧状の短沈線、貫通孔等が共通してみられる。

27は口縁下に段を持ち、ここに楕円形の区画文が配されている。31の把手には、土偶や注口土器の把手にみられる「ねじり棒」状のモチーフが用いられている。35の突起に使用されるS字モチーフは、新潟方面の三十稲葉式の系譜を引くものであろうか。

36は浅鉢ないし注口土器の把手であろう。37・38は注口土器である。いずれも、注口・把手・口縁上の突起の三者が融合している点に特徴がある。

87～90・94・97等は初期の堀之内式に特徴的な素文の土器群である。

87は貫通孔を持つ突起を基点として、頸部に蛇行する隆帯が垂下する。89は波状口縁で、口縁下に段を持ち、ここに楕円形の区画文が配される。

90は口縁下に幅広の凹線が巡る。91は柱状の突起である。92は山形の突起中央に貫通孔を有する。

96の強く内屈する口縁は、浅鉢に属するものであろ

うか。口縁下に隆帯+沈線による区画文が配され、内部に列点文が施文される。102も内屈する浅鉢口縁で、口縁直下に1条の沈線が巡る。

98～101は胴部に三本沈線の懸垂文が垂下する。98では、この懸垂文に平行して三単位の列点文が垂下する。99は口縁下に斜位の刻みが巡る。

103は多条沈線文の深鉢胴部である。地文として、L無節の縄文が縦位回転で施文される。

121は頸部無文帯と胴部の文様帯の区画部分で、横位の平行沈線上に8の字状の貼付文が付される。胴部には集合沈線が垂下する。

104～108等は信州・北関東系の丸胴の鉢であろう。太い沈線により渦巻き文が描かれ、たすき状の平行沈線で左右が連結される。104・106では、渦巻き文を基点として蛇行沈線文が垂下する。沈線の交点には円形の刺突が配される。

地文は全てLR単節の縄文で、モチーフに沿って充填手法で施文される。

109～112は深鉢胴部と思われ、2本～4本の平行沈線により磨り消し文様が描かれる。

109・111は前段の鉢に類似の入り組み文であろうか。

第15表 第I遺物包含層石器一覧表(I)

石 鏃

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形 態	(長さ/幅)比	残存度
1	No. 294	16.0	12.5	3.3	0.58	チャート	A-2	1.2	①
2	一括	11.0	12.9	2.3	0.27	チャート	A-1	0.8	①
3	No. 457	25.5	18.5	6.8	2.74	チャート	D	1.3	⑧
4	No. 462	19.0	16.0	4.9	1.30	チャート	A-2	1.1	①
5	No. 673	17.5	13.5	4.3	0.81	黒曜石	D	1.2	⑧
6	No. 718	(15.5)	(17.0)	3.4	78.00	チャート	A-1		⑧
7	No. 726	(17.9)	13.5	4.8	1.20	チャート	D		②
8	No. 965	(12.5)	13.5	2.5	0.32	チャート	A-1		②
9	No.1206	(23.0)	20.5	5.1	2.05	チャート	A-1	1.1	①
10	No.1216	(23.0)	(13.5)	4.7	1.12	チャート	B-2		②+④
11	No.1221	(15.5)	(19.0)	3.4	0.68	チャート	A-1		②+④
12	No.1281	14.5	14.0	3.7	0.52	チャート	A-1	1.0	①
13	No.1962	13.5	14.0	2.4	0.33	チャート	A-1	0.9	①
14	一括	18.5	17.0	4.6	1.41	チャート	D	1.0	①
15	一括	20.5	(13.5)	1.9	0.57	黒曜石	A-1		⑥
16	一括	18.5	18.0	3.7	1.17	チャート	A-1	1.0	⑧
17	一括	16.0	14.0	2.4	0.40	黒曜石	A-1	1.1	①
18	一括	(17.0)	15.5	3.7	1.10	チャート	A-1		②
19		19.0	(16.0)	3.2	0.79	チャート	A-1		④

スクレイパー

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形態I	形態II	残存度
1	No. 70	49.0	64.0	15.5	35.16	チャート	B-2	a-1	③
2	No. 96	45.0	48.5	14.0	33.17	チャート	B-2	c	①
3	No. 388	34.5	36.0	9.6	14.69	チャート	B-2	c	①
4	No. 461	30.0	37.5	10.5	13.04	チャート	B-2	c	①
5	No.1653	27.0	(27.0)	10.0	4.93	チャート	A-2		③
6	一括	30.5	39.0	16.2	19.42	チャート	B-1	b-3	①
7		43.5	39.5	6.0	8.54	チャート	A-2	b-2	①

石 錐

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形 態	残存度
1		21.5	9.5	4.6	1.11	チャート	B	②

石 錘

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形態I	形態II	残存度
1	No. 37	46.0	39.0	15.0	37.51	安山岩	A	b	①
2	No.947	56.0	44.0	15.1	56.02	砂岩	A	a	①

磨 石

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形 態	残存度
1	No. 119	97.0	83.5	42.0	504.66	花崗岩	A-2	②
2	No. 62	131.0	85.0	45.0	644.02	安山岩	B-2	④
3	No. 831	93.5	87.5	40.5	442.18	花崗岩	B-2	②
4	No.1409	(82.0)	84.0	38.5	492.40	花崗岩	B-2	②
5	一括	64.3	61.5	44.5	252.36	砂岩	A-3	①
6	一括	55.5	49.5	44.0	161.38	安山岩	A-3	③
7	一括	(80.5)	(43.5)	(51.0)	233.26	花崗岩	A-2	②
8	一括	89.0	52.5	44.0	308.33	花崗岩	C	①
9	一括	95.0	60.0	44.5	381.54	砂岩	B-1	①
10	一括	108.0	82.5	45.5	650.93	花崗岩	B-2	④
11	一括	(89.0)	(91.5)	53.0	663.84	花崗岩	B-1	②
12	一括	123.0	94.0	41.0	654.88	安山岩	B-1	③
13	一括	151.0	105.5	71.5	1433.35	花崗岩	B-1	④

第16表 第I遺物包含層石器一覧表(2)

凹石

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石材	形態I	形態II	残存度	転用元
1	No. 89	125.0	87.0	54.5	651.30	花崗岩	B-2	a	④	磨石
2	No. 739	(97.0)	78.5	67.5	673.12	花崗岩	A-2	a	②	-
3	No. 984	105.5	(43.5)	38.0	245.26	花崗岩	B-2	b	②	磨石
4	No.1443	110.5	(30.0)	27.0	124.98	砂岩	C	a	③	-
5	No.1521	(130.0)	(99.0)	10.5	161.48	片岩			④	
6	No.1701	88.5	77.5	39.3	365.88	砂岩	A-2	a	①	磨石
7	No.1816	110.0	59.0	53.7	475.56	砂岩	B-1	a	①	-
8	No.1941	106.5	100.5	50.0	766.70	花崗岩	A-2	a	①	磨石
9	一括	80.5	55.5	54.0	358.53	花崗岩	A-3	a	①	-
10	一括	133.5	66.0	38.0	476.71	花崗岩	B-2	b	①	-
11	一括	114.0	89.0	59.5	949.84	花崗岩	A-2	a	①	-

石皿

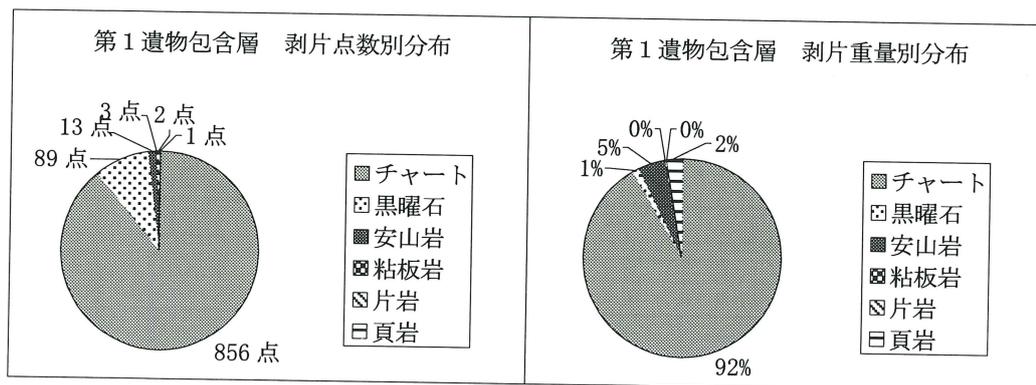
番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石材	形態I	形態II	残存度
1	No. 72	142.5	94.0	61.0	608.80	安山岩		b	②+③
2	No.160	(159.0)	(132.5)	(76.5)	1884.48	花崗岩	A	a	②+③

敲石

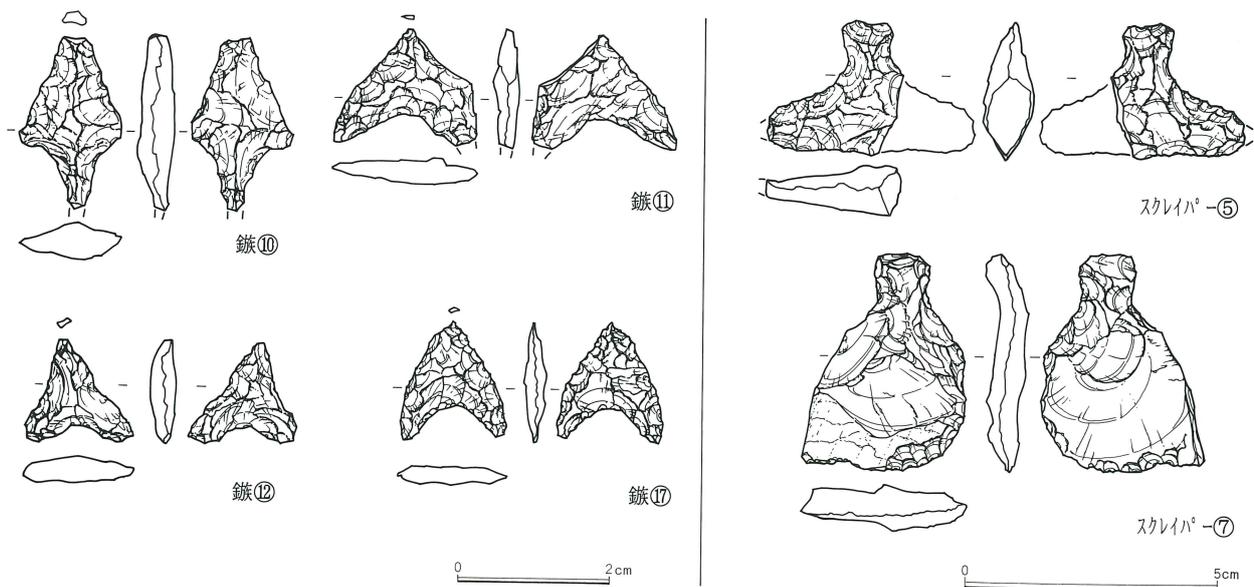
番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石材	形態	残存度
1	No.627	(84.0)	(67.0)	46.0	334.13	花崗岩	B	②

砥石

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石材	形態	残存度
1	No.1655	144.0	65.0	45.5	425.57			



第80図 第I遺物包含層出土石器



113は平行沈線の懸垂文に沿って縦位の入り組み文が描かれる。

114は壺の胴部～肩部とみられる。胴上半部文様帯を持ち、下端を平行沈線で区画する。

115・116は同心円文で、115は中央にボタン状の貼付文が配される。117は貼付文を基点として、3本沈線による綾繰り状のモチーフが垂下する。

120は壺形土器の肩部である。刻みを伴う隆帯で器面をパネル状に区画し、内部に沈線文が描かれる。第2号住居跡に復元個体が存在する。

122は堀之内2式である。注口土器の胴上半部であろう。磨り消し縄文による入り組み文が描かれる。地文はLR単節の縄文で、充填手法により施文される。

123～145は加曾利B1式である。

123の突起は、第10号住居跡に復元個体が存在する。内面中央に凹孔がみられる。

124～131には平行沈線文が描かれる。124・127は沈線間を縦位の短沈線で連結する。125は上下の沈線がかぎの手状に幾重にも連結される。

126～129は内文を持つ口縁である。多くは外文に類似の平行沈線文であるが、127・128は口縁下に隆帯が巡り、平行沈線内部に刺突列が並ぶ。

138・139は沈線間に対弧状のモチーフが挿入され、また、平行沈線帯そのものがいくつかに分帯する。第10号住居跡に復元個体が存在する。143も、その器形から同類の土器と考えられる。

144は格子目文の施文される粗製土器である。

146以下は時期特定困難な粗製土器群である。148・149は櫛歯状工具による条線が描かれる。152・153のような、へら状工具の粗い調整がみられる無文土器は、堀之内式に並行するものであろう。

169はミニチュア土器である。

(8) グリッド出土遺物

土器 (第81図～第88図)

1は縄文時代中期初頭の深鉢で、胴部から底部にかけて残存する。縄文は施文されず、半裁竹管による平行沈線によって文様が描かれる。

頸部との境および胴部下端に平行沈線を巡らせ、文様帯上下を区画する。胴部には平行沈線が垂下し、これに沿って同一工具の蛇行沈線文が描かれる。

胎土には多量の石英と金雲母が混入される。最大径16.0cm、現存高15.8cm、底径11.2cmを測る。

2～5は後期前葉の堀之内1式で、いずれも深鉢である。

2は、口縁から胴部中段までの部分が残存する。4単位の波状口縁で、波頂部から隆帯が垂下し、上下に指頭圧痕を伴う楕円形の貼付文が付される。胴部は半裁竹管状工具による集合沈線文を地文とし、平行沈線による三角形のモチーフが連続して描かれる。

文様に東北地方の、いわゆる宮戸Ib式の影響が垣間見える。口径推定19.6cm、現存高7.5cmを測る。

3は頸部無文帯を持つ深鉢胴部である。中段に刻みを伴う平行沈線を巡らせ、胴下半部に対弧状の集合沈線が垂下する。縄文は施文されない。

最大径18.2cm、現存高7.5cmを測る。

4は円筒形の小型深鉢である。4単位の小波状口縁をなし、波頂部にボタン状の貼付文が付され、ここから刻みを伴う隆帯が垂下、器面を4分割している。

文様帯の下端は刻みを伴う隆帯で波状に区画される。縦位の隆帯の左右には、平行沈線による対弧状のモチーフが幾重にも描かれる。

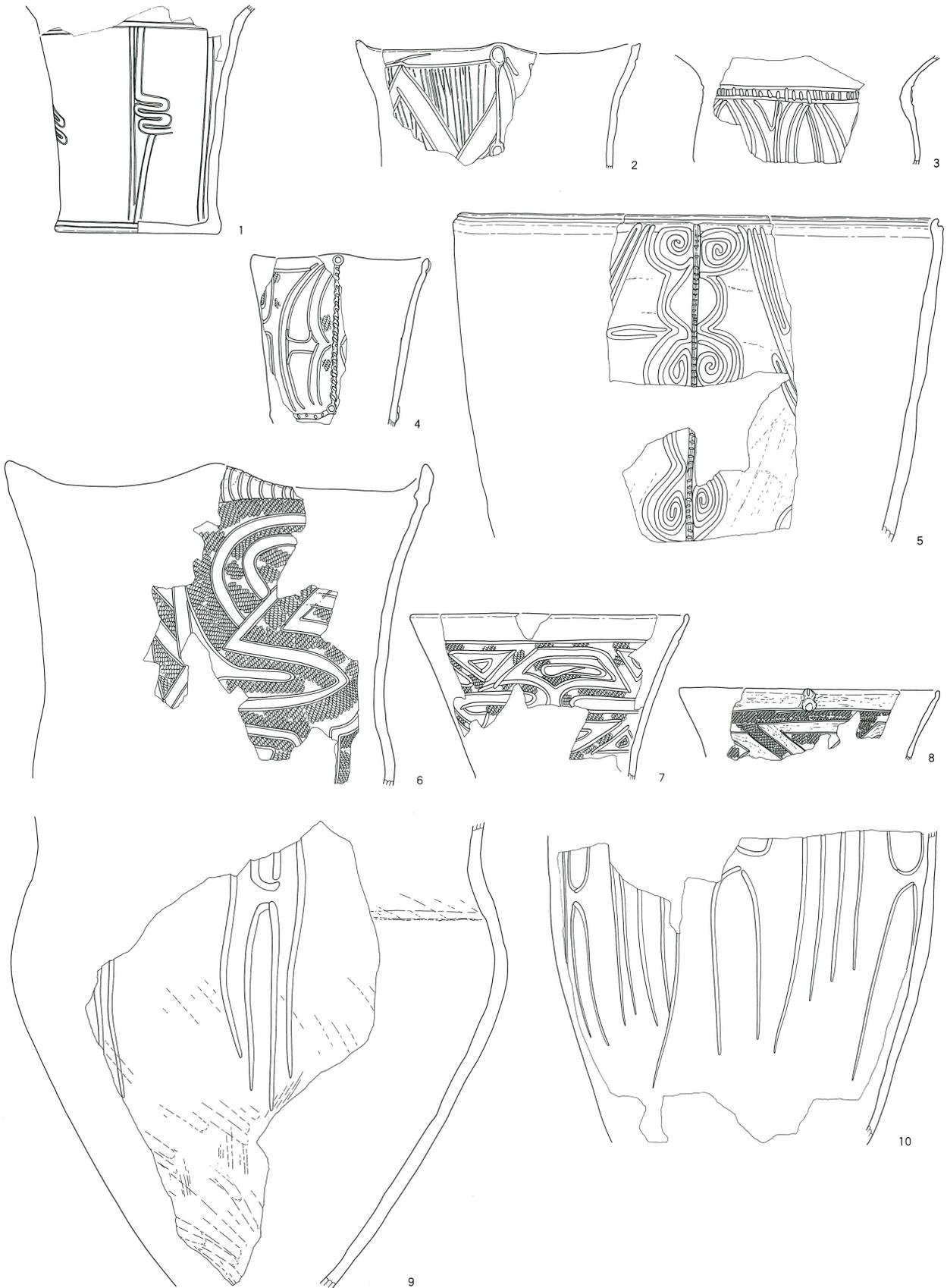
口径推定12.4cm、現存高11.7cmを測る。

5も円筒形の深鉢である。口縁から胴部中段にかけて残存する。水平口縁で、口唇肥厚し、外面に1条の沈線が巡る。

器面は縦位の隆帯で分割され、左右に渦巻き文と、平行沈線によるたすき状のモチーフが描かれる。

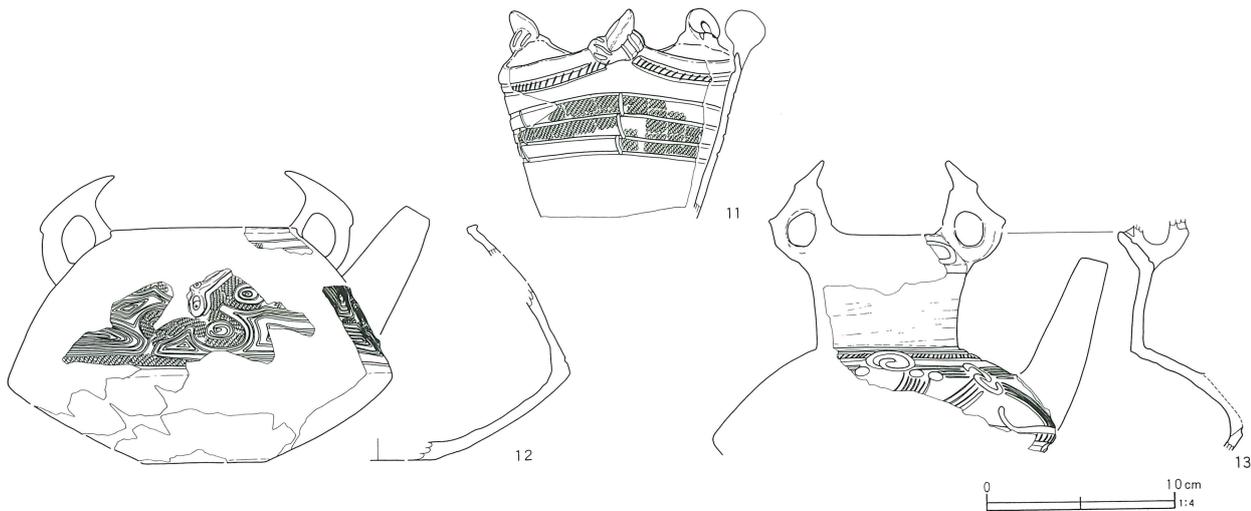
縄文は施文されず、へら状工具による粗い調整痕が残される。口径推定33.0cm、現存高22.4cmを測る。

第81図 グリッド出土土器(I)



0 10cm
1:4

第82図 グリッド出土土器(2)



6～8は堀之内2式の深鉢である。

6は4単位波状口縁の深鉢である。胴部中段に緩いくびれを持ち、口縁はわずかに内屈する。口唇は肥厚して、内面に段を形成する。外面には集合沈線が描かれる。

胴部上半に幅広の文様帯を持つ。波状沈線の波頂部から平行沈線が垂下し、文様帯を縦位に分割するものと思われる。同心円や鉤形の平行沈線文が複雑に入り組んだ、一見直弧文風のモチーフが描かれる。

地文はLR単節の縄文で、充填施文される。口径推定28.6cm、現存高22.4cmを測る。

7は朝顔形の深鉢である。口縁部から胴下半部まで残存する。

口縁下に無文帯を持つが、隆帯や貼付文による装飾はみられない。胴上半部に、上下を沈線で区画された文様帯を有する。主たるモチーフは多段構成の三角形区画文であるが、中段に横楕円形の区画が介在する点が目を引く。

地文はLR単節の縄文で、充填施文される。口径推定18.8cm、現存高11.5cmを測る。

8も朝顔形深鉢である。口縁下に8の字状の貼付文が付されるが、横位の隆帯はみられない。

胴上半部に文様帯が位置し、平行沈線による三角形

の区画が描かれる。地文はLR単節の縄文で、充填施文される。口径推定17.8cm、現存高4.9cmを測る。

9・10はいわゆる下北原式である。いずれも胴部中段～下半にかけて残存する。

9は小さな底部から急角度で開き、胴下半部で強く張り出すもので、下北原式にありがちなダイナミックな器形である。太い沈線によりH字状の懸垂文が描かれ、縄文は施文されない。

最大径34.6cm、現存高32.3cmを測る。

10は内湾しつつ緩やかに立ち上がる器形で、そのプロポーションに在地の堀之内1式からの系譜がうかがわれる。

胴部には、やはりH字状の懸垂文が描かれ、間隙に数条の沈線が垂下する。

最大径27.0cm、現存高21.9cmを測る。

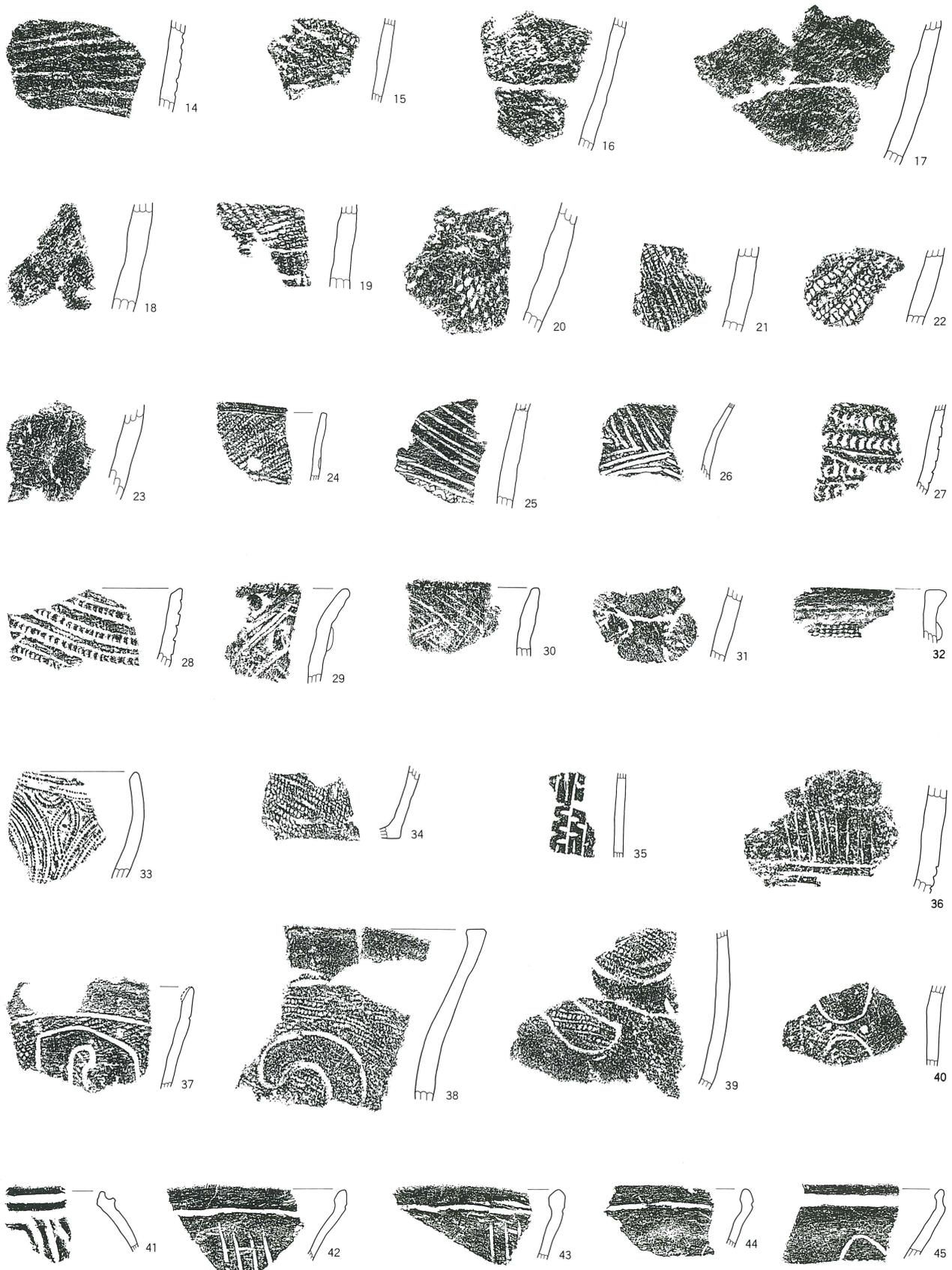
11は加曾利B1式の深鉢である。口縁～胴部中段までが残存する。

三単位の波状口縁をなし、波頂部に円盤状の小突起が付される。口縁直下には斜位の刻みを伴う隆帯が巡る。

胴上半部に平行沈線が巡り、沈線間は縦位の短沈線で連結される。地文はLR単節横位回転の縄文である。

口径推定12.5cm、現存高11.0cmを測る。

第83図 グリッド出土土器(3)



0 10 cm
1:3

12・13は注口土器である。

12は堀之内2式である。胴部中段がソロバン玉形に張り出し、上半が文様帯、下半は無文となる。

磨り消し縄文による同心円文が、縄文帯により相互に連結される。間隙には集合沈線による幾何学モチーフが充填される。

口縁部は無文で、文様帯との境を1条の沈線で区画する。口端は平坦に整形され、肥厚して外側に段を形成する。

文様帯の中段よりやや下方に、注口部の剥落した痕跡がみられる。

口径推定11.6cm、最大径20.3cm、現存高12.4cmを測る。

13は加曾利B1式である。円盤状の体部から、塔状の頸部～口縁部がほぼ垂直に立ち上がっている。

頸部は無文、口縁は内屈し、ここに縦位の環状把手が一对配される。また、内屈する口唇外面には横楕円形の区画文が描かれる。

胴上半部が文様帯となり、斜位の刻みを伴う隆帯により上下を区画する。内部には集合沈線による弧状・たすき状のモチーフが交錯し、交点にS字・「の」の字のモチーフや、指頭による円形の刺突が配される。

胴部中段の張り出しの直上に、注口部が剥落した痕跡がみられる。

口径推定6.0cm、最大径18.2cm、現存高11.9cmを測る。

14は早期の沈線文土器である。横位の浅い集合沈線文が描かれる。器面の風化が甚だしい。

15～22は前期の羽状縄文系群である。胎土に繊維が混入され、一部を除いて器面の風化が著しい。23は同時期の所産と考えられる無文土器である。

24～26は諸磯a式である。24は口縁部で、地文縄文上に円形の刺突文がみられる。25・26は半裁竹管による集合沈線文が施文される。25の地文はRL単節横位回転の縄文である。

27・28は諸磯b式の古段階で、爪形文がみられる。

29・30は諸磯c式である。半裁竹管による矢羽根状の沈線を地文として、ボタン状の貼付文が付される。

30の貼付文はわずかな痕跡を残して剥落している。

31は浮島式で、貝殻の腹縁圧痕が観察される。

32にも貝殻腹縁圧痕がみられるが、こちらは北陸地方の串田新I式で、中期後葉とされる土器である。カマボコ状の隆帯上に貝殻文が施文される。

33は前期末葉の十三菩提式である。35・36は中期初頭の五領ヶ台式であろう。

37～40は後期初頭における加曾利E系の土器で、磨り消し縄文によるアルファベット文が描かれる。

42～98は堀之内1式である。50の突起は、入波沢東遺跡第1号配石遺構出土の鉢に類似する。94は北関東～北信系の土器で、丸胴に短い口縁の付く、金魚鉢形の鉢であろう。

99～115・125は堀之内2式である。112・113は上下を沈線に区画された幅広の胴部文様帯で、地文縄文上に曲線文が展開する。114・115は時期が下る可能性もあるが、第33図の組成をもとに、堀之内2式の一部と考えた。

87～89は南関東系のいわゆる下北原式である。

116～138は加曾利B1式である。119は口縁直下に綾杉状の条線が施文され、胴部には平行沈線文が描かれる。両者の境は棒状工具の圧痕を伴う隆帯によって区画されている。

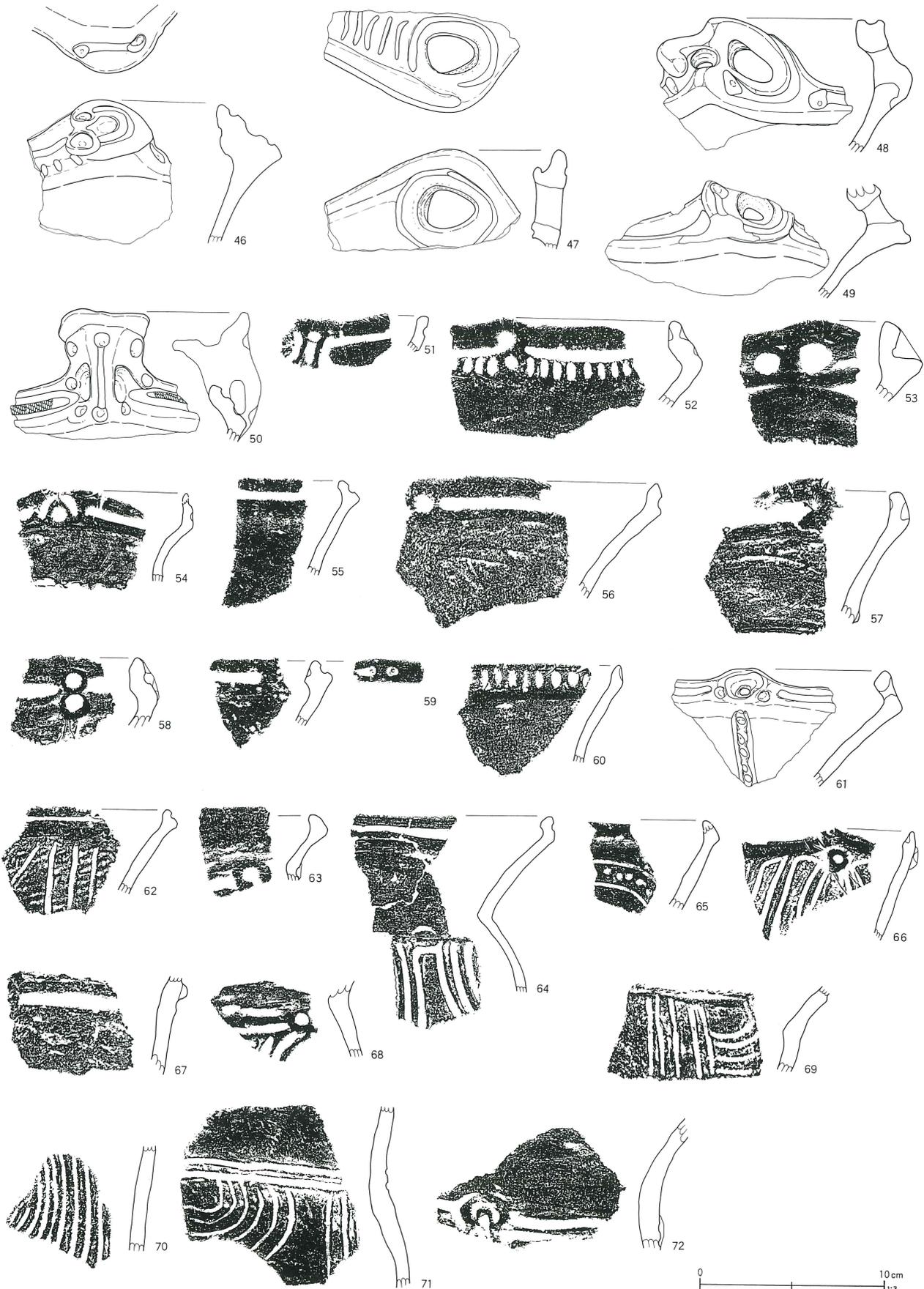
120～124・126は紐線文の口縁である。127の突起は第10号住居跡出土土器に類似する。

130～134は平行沈線文の胴部破片である。132は沈線間に縦位の短沈線が刻まれる。130・131・133は沈線末端が屈曲して、上下の沈線を連結する。

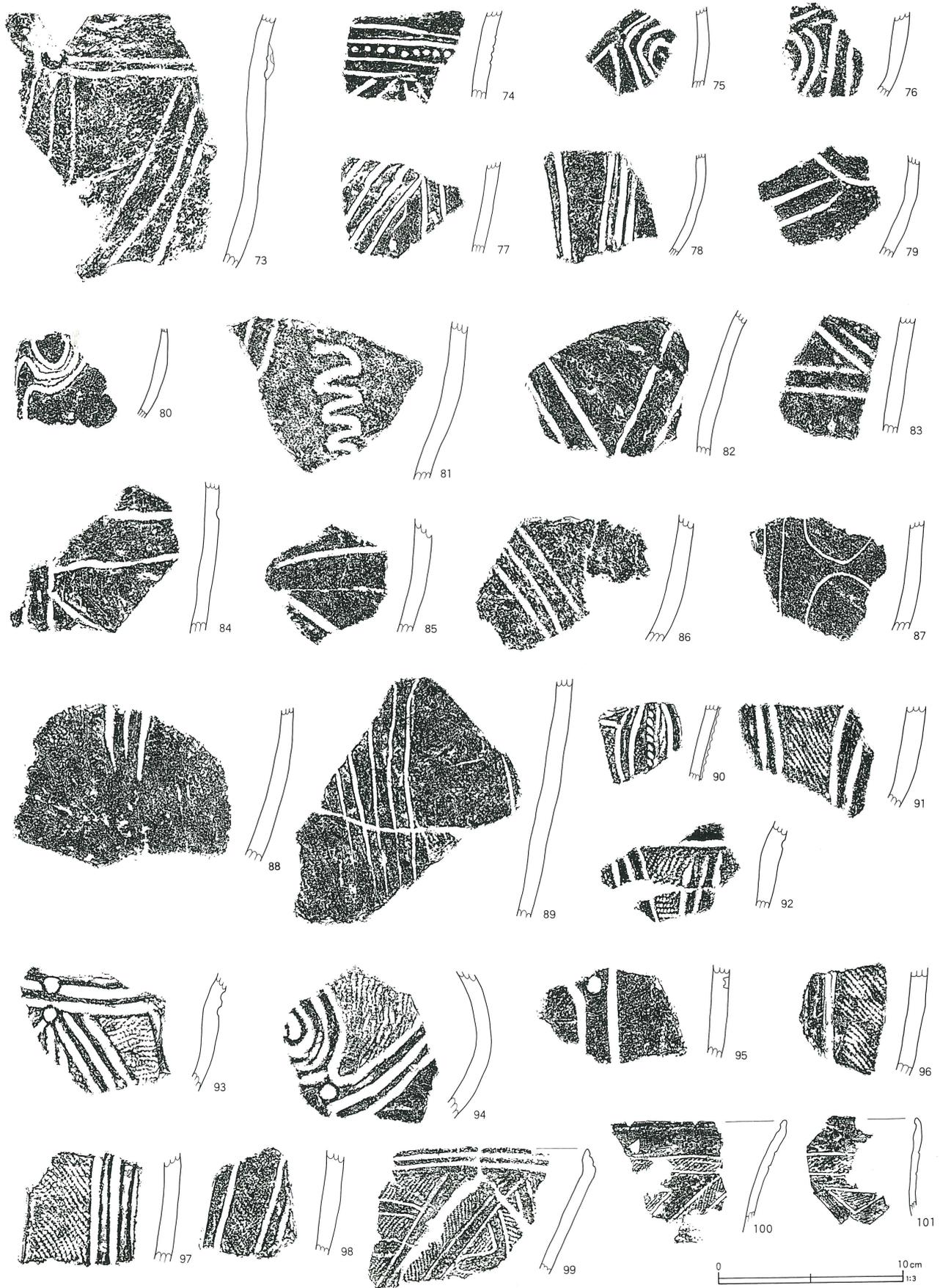
135は内文のある口縁部である。136は注口土器の胴部である。138は格子目文の土器である。

144は注口土器の把手で、堀之内1式であろう。149・150は土器の釣り手である。

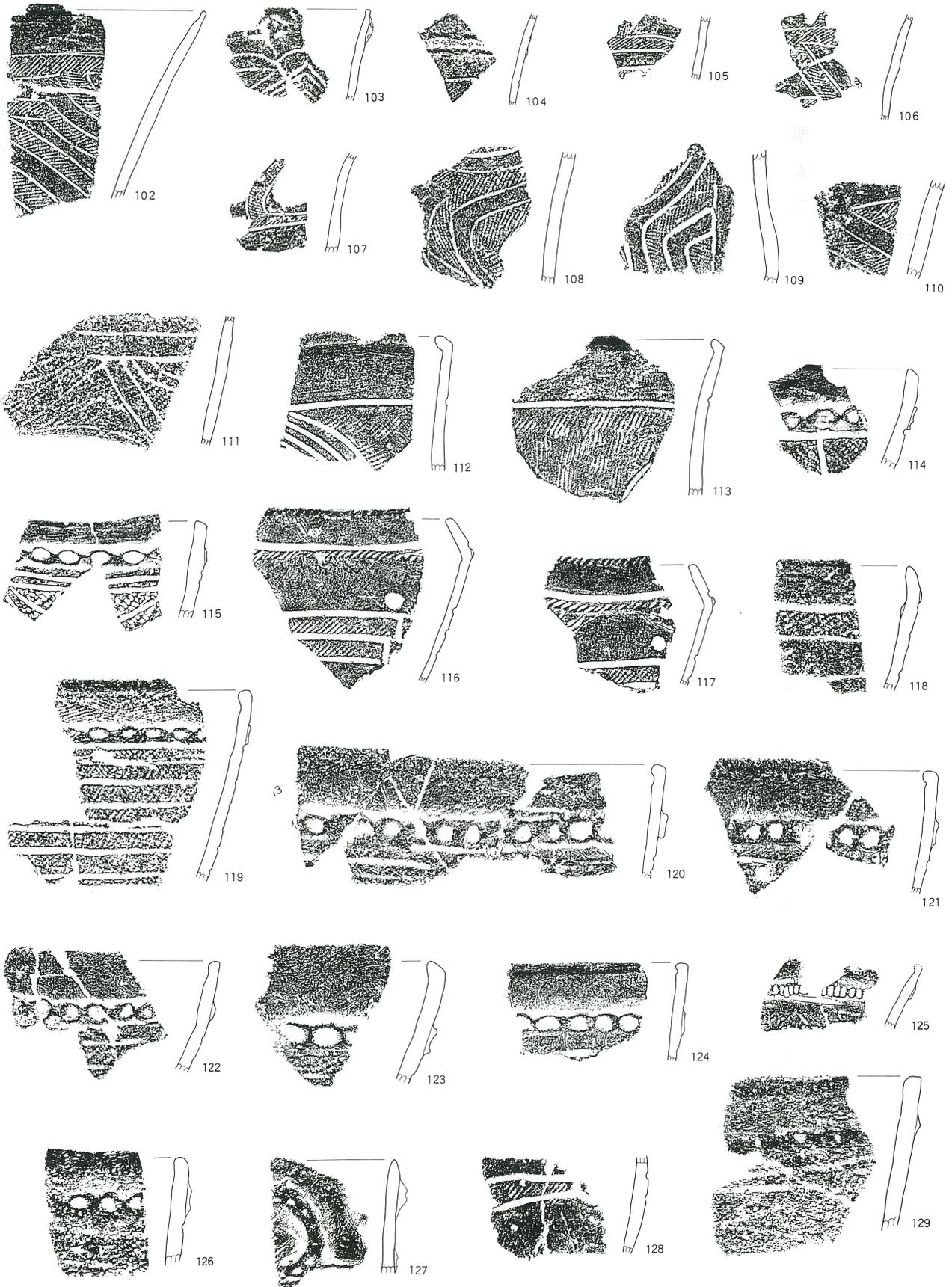
第84図 グリッド出土土器(4)



第85図 グリッド出土土器(5)

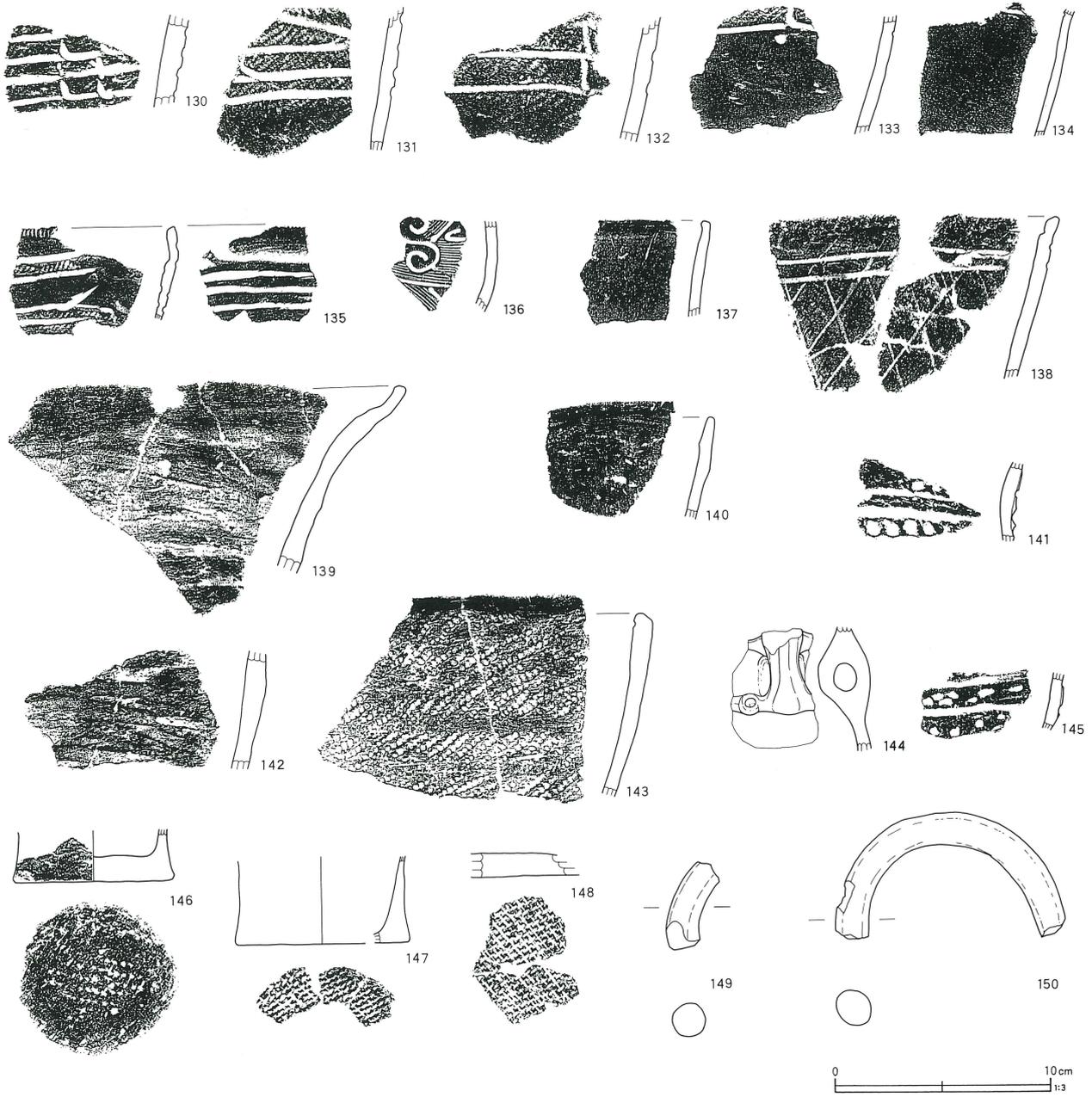


第86図 グリッド出土土器(6)



0 10cm 1:3

第87図 グリッド出土土器(7)



第17表 グリッド石器一覧表(I)

石 鍬

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形 態	(長さ/幅)比	残存度
1	E-3	12.5	(12.5)	3.4	0.32	黒 曜 石	A-1		④
2	E-3	20.0	(10.0)	5.2	0.85	チ ャ ー ト	D		⑥
3	E-4	24.0	(13.5)	3.1	0.97	チ ャ ー ト	A-2		⑧
4	F-3	20.0	(13.5)	3.8	0.65	ホルンフェルス	A-1		④
5	F-3	11.5	12.5	2.8	0.24	黒 曜 石	A-1	0.9	①
6	F-3	19.0	12.5	5.6	1.10	チ ャ ー ト	A-1	1.5	⑧
7	F-3	17.0	17.0	2.3	0.39	チ ャ ー ト	A-1	1.0	①
8	F-3	16.5	11.0	2.9	0.40	チ ャ ー ト	A-1	1.5	①
9	F-3	(27.0)	(19.5)	5.7	1.81	チ ャ ー ト	A-1		④
10	F-3	28.5	(18.0)	6.1	2.38	チ ャ ー ト	A-1		④
11	F-3	(18.5)	(15.0)	3.1	0.72	黒 曜 石	B-2		④
12	表 採	18.8	12.4	3.6	0.65	チ ャ ー ト	A-1	1.5	⑧
13	表 採	16.5	12.3	2.6	0.39	チ ャ ー ト	A-1		⑥
14	表土一括	14.0	15.0	2.8	0.60	チ ャ ー ト	A-2	0.9	①
15	表 採	(18.6)	11.5	5.2	1.00	チ ャ ー ト	A-2		②

スクレイパー

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形態 I	形態 II	残存度
1	F-3	55.0	45.5	13.7	34.1	チ ャ ー ト	B-1	a-1	①
2	表土一括	22.5	33.0	5.7	5.00	チ ャ ー ト	B-2	a-1	③
3	表 採	61.3	37.1	11.0	18.03	チ ャ ー ト	A-2	a-1	①

石 錘

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形態 I	形態 II	残存度
1	表土一括	51.5	41.0	12.75	39.85	片 岩	A	b	③

磨 石

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形 態	残存度
1	B-2	63.0	60.5	40.5	206.02	花 崗 岩	C	①
2	B-2	107.0	101.0	30.0	401.14	安 山 岩	B-2	①
3	C-3	78.0	70.0	22.0	168.82	安 山 岩	A-2	①
4	F-3	(110.5)	(55.0)	39.0	295.34	花 崗 岩	B-2	②
5	F-3	(155.5)	(123.0)	65.5	1648.17	花 崗 岩	B-1	②
6	F-5	(75.5)	83.0	26.5	228.85	安 山 岩	B-2	②
7	表 採	66.5	62.0	23.5	139.80	砂 岩	A-2	①
8	表土一括	83.5	80.5	29.5	282.33	砂 岩	A-2	①
9	表土一括	95.5	(56.0)	24.5	186.54	安 山 岩	B-2	②
10	表土一括	76.5	59.0	49.5	306.41	砂 岩	A-1	①
11	表土一括	55.0	(44.5)	9.2	33.81	砂 岩	B-1	①
12	表土一括	124.5	39.0	18.5	127.04	安 山 岩	C	①
13	表土一括	102.5	79.5	33.0	442.92	硬 砂 岩	B-1	②
14	表土一括	120.5	72.0	30.0	449.39	花 崗 岩	B-2	①
15	表土一括	84.5	79.0	55.0	513.16	砂 岩	A-1	①
16	表土一括	(113.0)	(97.0)	52.0	699.99	花 崗 岩		②
17	表土一括	115.0	67.0	64.0	595.73	花 崗 岩	A-2	②
18	表土一括	148.5	80.5	44.3	733.98	花 崗 岩	B	④
19	表土一括	(180.5)	(115.0)	121.0	2243.82	花 崗 岩	B-2	②+③
20	表 採	(104.5)	(68.5)	56.0	450.72	花 崗 岩	B-2	②
21	表土一括	116.0	40.5	37.0	254.76	花 崗 岩	C	①

凹 石

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形態 I	形態 II	残存度	転用元
1	B-2	156.5	56.0	38.5	505.12	花 崗 岩	C	a	①	-
2	F-3	137.5	77.0	38.0	573.25	砂 岩	B-1	b	①	磨 石
3	表土一括	118.5	72.5	40.0	523.86	花 崗 岩	B-1	a	①	磨 石
4	表土一括	(94.5)	(51.5)	51.0	375.29	花 崗 岩	A-2	a	②	-
5	表土一括	103.0	84.0	56.3	640.57	花 崗 岩	A-2	a	④	-
6	表土一括	(89.0)	69.5	73.0	563.71	花 崗 岩	A-2	a	②	磨 石
7	表 採	139.0	71.0	40.0	514.37	砂 岩	B-2	b	①	磨 石

第18表 グリッド石器一覧表(2)

石皿

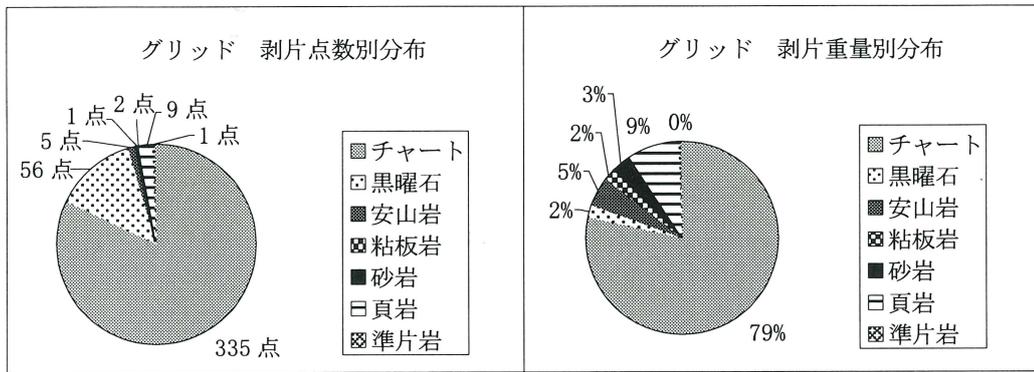
番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形態 I	形態 II	残存度
1	E-4	212.0	235.0	94.0	4660.00	安 山 岩	A	b	③
2	G-5	(65.5)	(57.0)	43.5	124.28	安 山 岩		b	②+③
3	表土一括	(94.0)	(103.5)	61.0	364.56	安 山 岩	B	b	②+③
4	表土一括	(123.0)	(165.0)	83.0	1284.37	安 山 岩	B	b	②+③

打製石斧

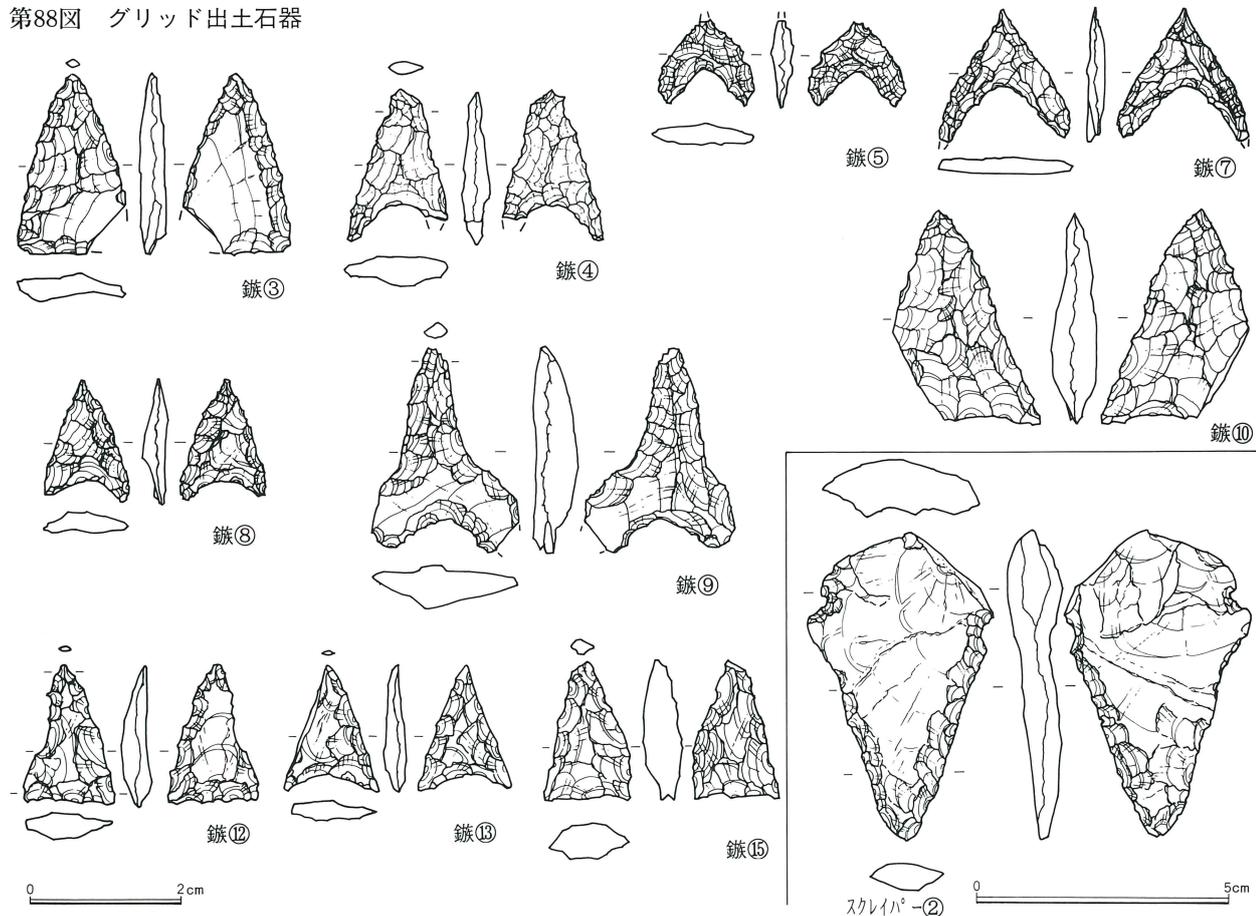
番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形 態	残存度
1	E-4	90.0	64.5	27.5	186.31	安 山 岩	分銅型	①
2	F-3	121.5	54.5	21.5	173.98	砂 岩	短冊型	①

磨製石斧

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形 態	残存度
1	F-3	116.0	50.5	10.3	75.60	準 片 岩	丸胴型	⑥



第88図 グリッド出土石器



2. 古代・中・近世

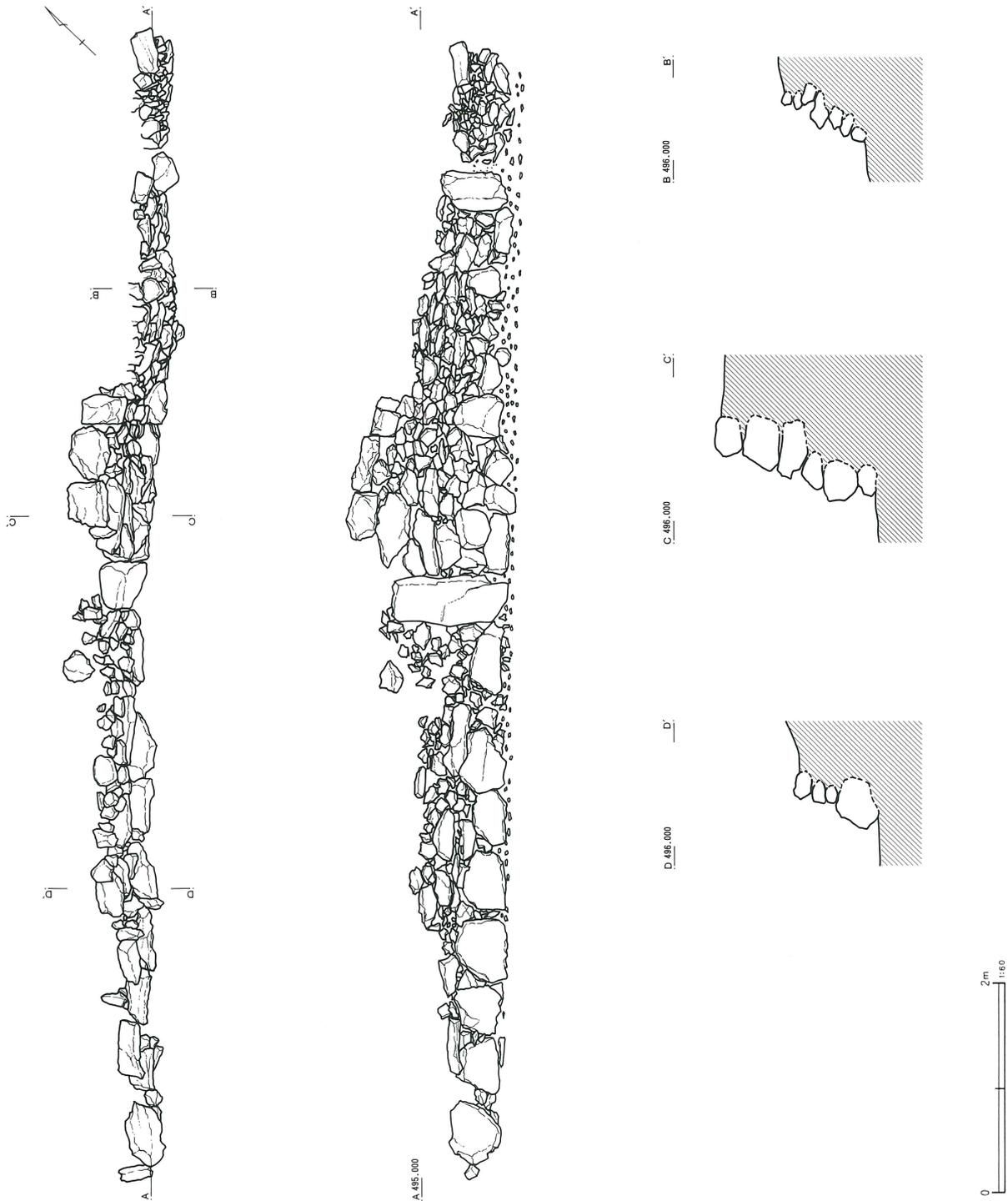
(1) 石垣

奥秩父の山間部の集落にあって、土砂の流失を防ぐ手立てとしての石垣は、その用途を建築・耕作に限らず、現在も頻繁に構築されている。こうした事情から

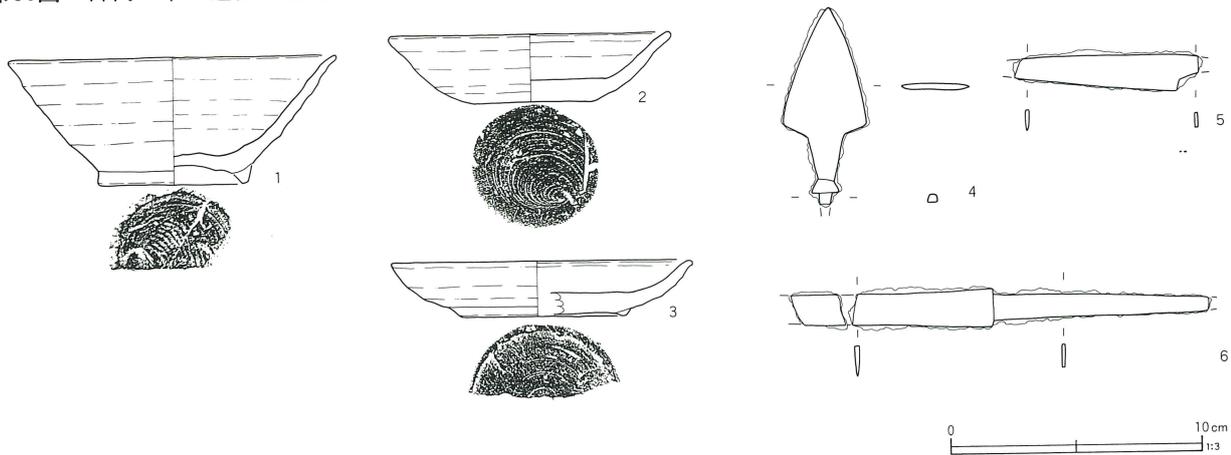
か、今回の調査範囲の中からも石垣の痕跡とみられるものは多数検出された。

これらの大半は、外観や技法のうえで、現存の家屋や耕地に見られる石垣とほとんど変わらないものであ

第89図 第1号石垣



第90図 古代・中・近世の遺物



り、時代的にも近～現代、近世を遡らないであろう。

唯一、技法や周辺の遺物出土状態から、時代が近世からより古くに遡ると考えられる一例について、以下に報告する。

第1号石垣 (第89図)

B-2、C-2・3グリッドに所在する。N-45.1°-Eの方向にほぼ一直線に延びており、総延長11m、最大高1.55mを測る。

段丘斜面が河成の砂礫面に落ち込む部分に築かれ、垂直方向に対し、約20°程度の傾斜をなして、崖面を覆っている。

崖線に沿って50~70cm大の岩塊をならべ、これを基礎として10~50cm大の板状の礫を布積みしている。部分的に柱状の岩塊を立てたり、大型の礫を積んだりして、横方向の重量を支えているものと思われる。

調査開始時点で段丘斜面の崩落土に深く埋もれており、また、周辺から第90図3の小皿や、同図4の鉄鏃等が出土しているため、中世のものと考えた。

周辺から関連する遺構は検出されず、本石垣の構築目的は不明である。

(2) グリッド出土遺物 (第90図)

1は土師器の碗で、第12号住居跡周辺から出土した

ものである。

口径13cm、現存高4.6cm、底径5.8cmを測る。全体の約40%が残存する。

器壁は暗橙色で多孔質、石英と黒雲母が混入する。底面回転糸切り痕を有し高台が剥落、内面にタール状の黒色付着物が観察される。

10世紀前半のものであろう。

2は瀬戸の灰釉小皿で、C-3グリッドからの出土である。

口径11cm、器高2.7cm、底径4.8cmを測る。全体の約60%が残存する。

硯として転用された形跡があり、内底面がいちじるしく摩滅し、また、内外に墨汁が付着する。

第1号石垣に伴うものであろうか。

時期は15世紀前半と考えられる。

3は志野の小皿で、F-3グリッドから出土した。

口径12.3cm、器高2.3cm、底径6.8cmを測る。全体の約40%が残存する。

17世紀末のものであろう。

4~6は鉄製品である。

4は鉄鏃で、第1号石垣直上の斜面から出土した。

5・6はいずれも刀子である。

V 入波沢東遺跡

1 遺跡の概要

入波沢東遺跡は中津川左岸に位置し、入波沢河口左岸にあって、同時期の集落である入波沢西遺跡と対峙している。

遺構の分布するのは、山裾に発達した南西向きに緩斜面の頂上付近で、小規模ながら段丘地形である。

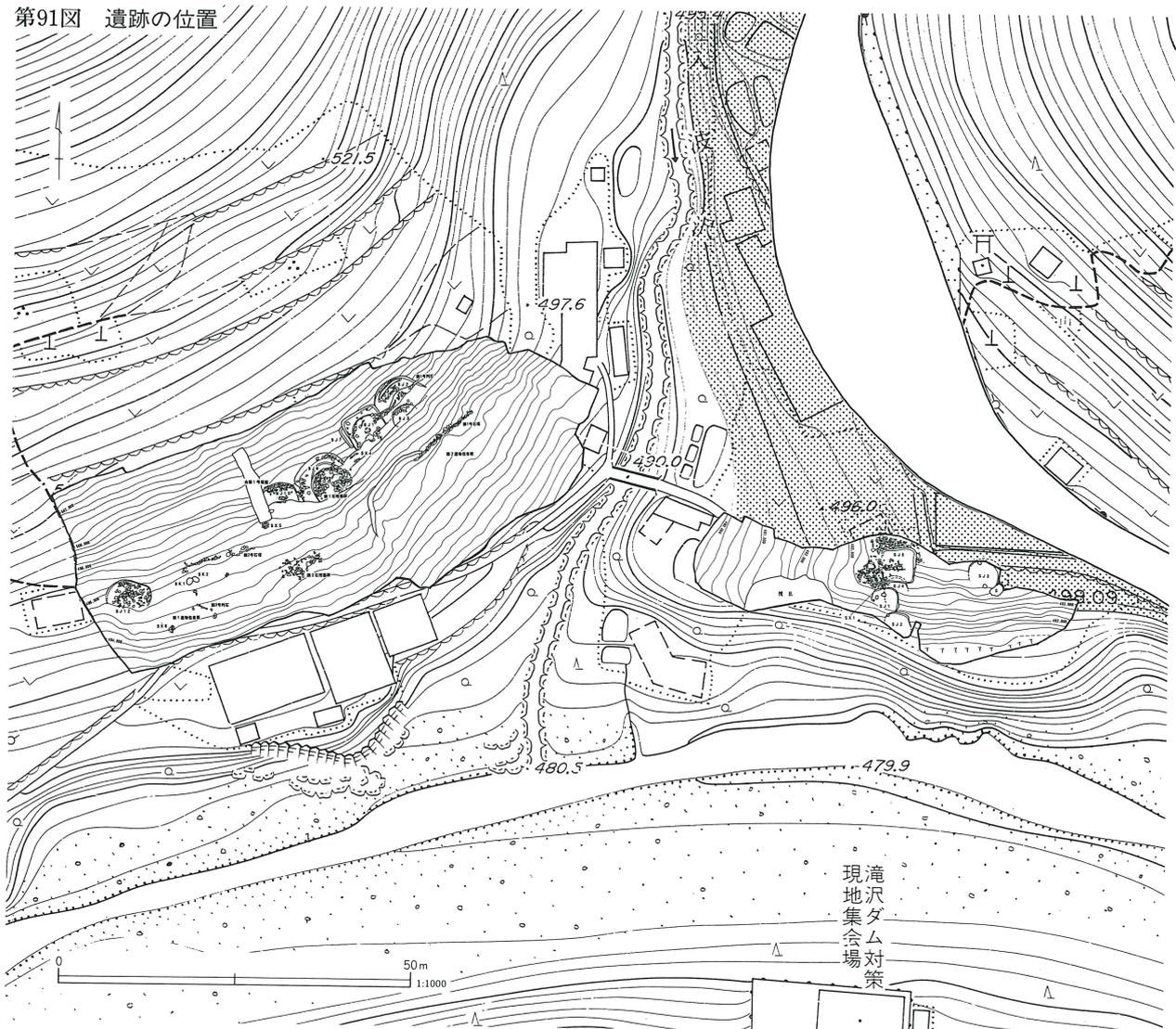
現河床面からの比高差は15~30mで、対岸の入波沢西遺跡における上位の段丘面に相当する。入波沢西遺跡が存在した対岸の斜面地に比べ、面積は小さいが、傾斜はさらに緩やかである。

南東方向の上空では谷がV字に開けており、日照は極めて良好である。

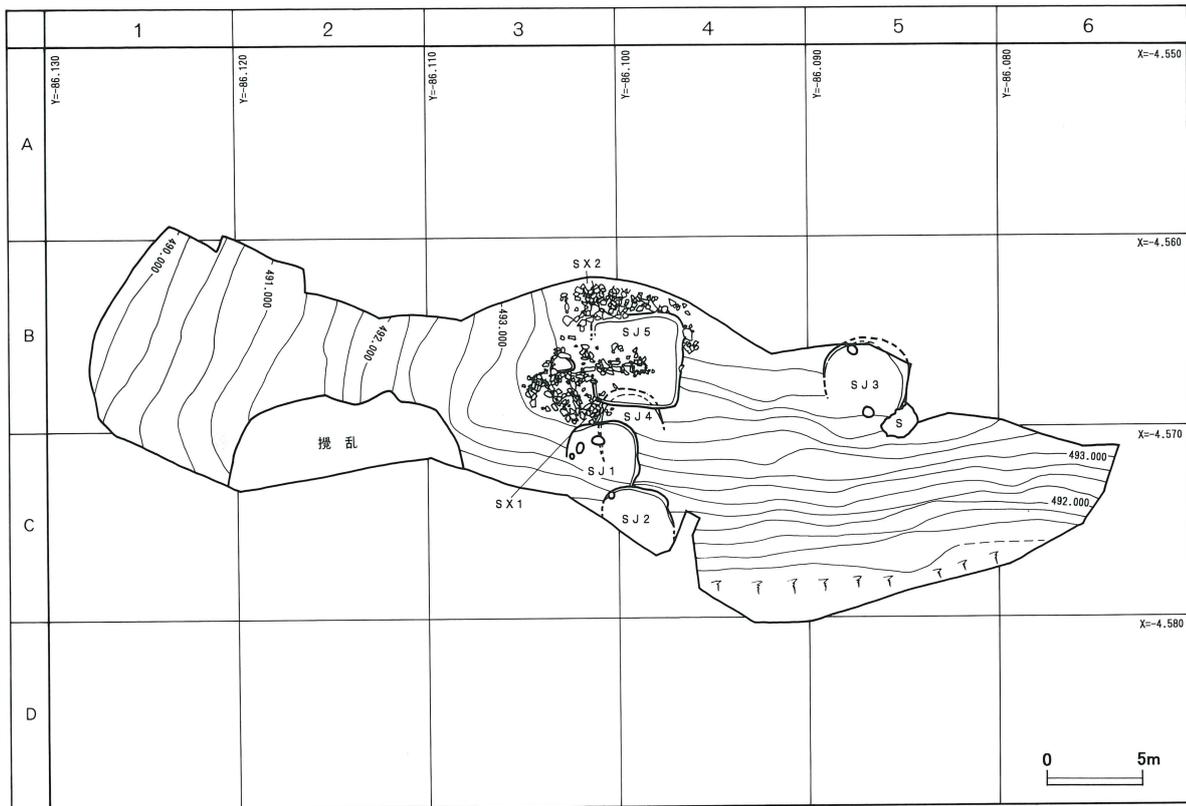
余談になるが、浜平集落の存在した低位の河岸段丘は、冬至の前後には1日数時間しか日光が差し込まず、その住人達は寒さを避けて、頻繁に入波沢兩岸の民家を訪れていたとのことである。

遺跡の西縁辺は段丘斜面を経て、河成の砂礫層に至っている。この砂礫層は中世以降に形成されたものとみられ、縄文時代の遺構・遺物は分布していない。

第91図 遺跡の位置



第92図 調査区全体図



南縁辺は急峻な崖となり、中津川河床に至る。東縁も崖で、岩盤が露出している。

かつて遺跡の北縁には、山裾を巻くようにして村道が走っており、中津川に沿って走る県道から分岐して入波沢上流へと延びていた。この村道は、ダム工事に先立って土盛り・拡幅され、幅10m以上の工事用道路へと改良された。

この結果、遺跡の所在する段丘面の大半が工事用道路およびそれに伴う土盛りの下になり、安全上の配慮から、この部分の調査を断念せざるを得なかった。今次調査の総面積は800㎡であるが、実質的な調査面積は500㎡強である。

発見された遺構はほとんどが縄文時代のものである。

内訳は住居跡5軒、配石墓1基である。

後段で述べるように、とくに後期初頭段階の遺構の残存状態が悪い点が指摘しうる。入波沢西遺跡に比べ、遺構の分布する面がダイレクトに河川に面しているぶん、崩壊などによる「被害」はより大きいようである。

入波沢西遺跡と入波沢東遺跡はいずれも縄文時代後期初頭～中葉にかけて営まれた集落遺跡であり、現代の地理的条件から別個に遺跡の認定がなされたが、そのありようは小河川を挟んで形成された馬蹄形集落である。共に堀之内2式に属する入波沢西9号住と同東5号住が、沢を挟んで対面する占地は、きわめて象徴的であるといえる。

2 発見された遺構と遺物

1 縄文時代

(1) 住居跡

第1号住居跡 (第93図)

B-3・4、C-3・4グリッドに所在する。

第4号住居跡を切っており、床面は同住居跡覆土中に存在する。第2号住居跡とも重複関係にあるが、これとの新旧関係は不明である。

遺跡南縁辺の段丘斜面に位置しているため、南半分を斜面の崩落によって失っている。

平面隅丸長方形を呈し、主軸はほぼ南北を指すものと思われる。

現存部分の長径は3.85m、短径3.7mを測る。壁はわれている。残りのよい北壁中央部で27cm、南壁および

西壁は失われている。

床面は起伏に富み、南に傾斜する。中央やや南寄りに台形の掘り込みをもつ。炉跡は発見できなかった。

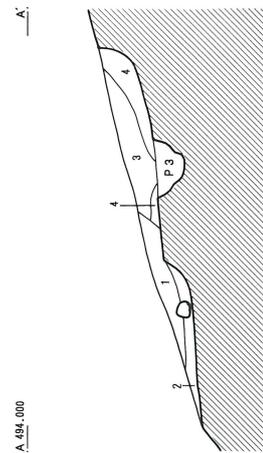
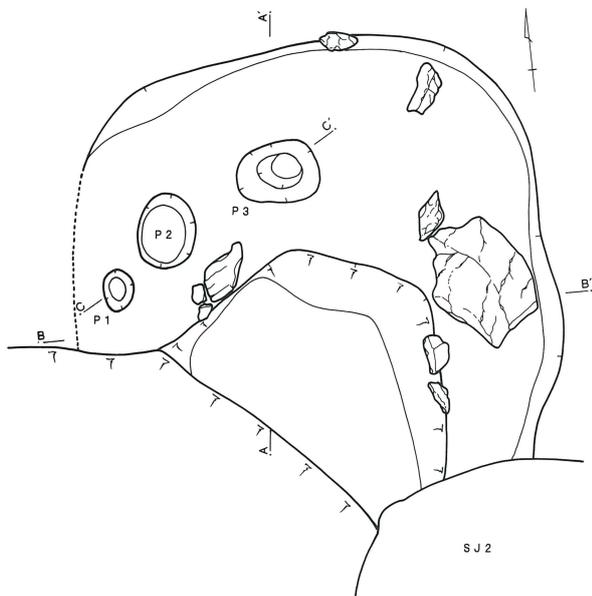
北西壁付近から3本のピットが検出された。個別の口径/深さ(cm)は、P1:32×7.6、P2:60×32.3、P3:65×12.9である。

覆土中から床面にかけて、大型のものを含む多量の礫が検出された。

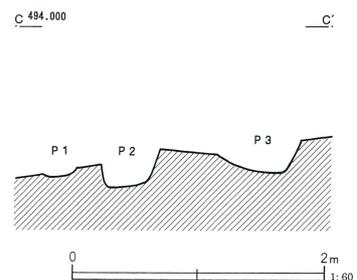
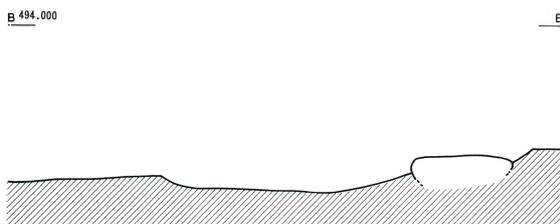
ただし、これらの中に、敷石のように明らかに人為的に敷設されたと思われるものは存在しなかった。

遺物は復元個体を含む多量の土器・石器が出土した。

第93図 第1号住居跡



- 1 暗褐色混礫土層 : 大型の礫を多量に含む 粘性欠く 締まりやや弱
- 2 暗褐色土層 : 礫を少量含む
- 3 暗茶褐色混礫土層 : 礫を多量に含む、粘性締まり共欠く
- 4 暗灰褐色混礫土層 : 礫を多量に含む 粘性欠く 締まりやや強



所属時期は縄文時代後期初頭～前葉のものが存在する。

出土遺物 (第94図～第96図)

1は称名寺式の深鉢で、胴部中段のみ残存する。

平行沈線によって上下二段に大柄の渦巻き文を描き、これに沿って多条の沈線が垂下する。

復元最大径26.1cm、現存高14.7cmを測る。

2は堀之内式の鉢形土器の口縁部である。無文で、朝顔形に外反し、口端は二重口縁となり、内面・外面ともに稜をなす。

口縁内面にボタン状の小突起を持ち、この部分を基点として外面に連鎖状の浮線文が垂下する。

黒色の堅緻な器壁で、へら状工具による幅広の研磨が観察される。

口径推定26.8cm、現存高8cmを測る。

3は、堀之内2式で、信州系の小型鉢であろう。口縁から胴上半部に掛けて残存する。

頸部に刻みを伴う隆帯を巡らせて、器面を上下に分帯する。胴部には平行沈線が巡らされ、LR単節の縄文が横位に施文される。

口縁は無文で、直線的に開いて、口端が鉤状に内屈する。

口径推定19.2cm、現存高4.7cm。暗茶褐色の堅緻な器壁で、外面は研磨され光沢を有する。

4は堀之内式の鉢の頸部である。無文の口縁に斜位の刻みを伴う隆帯が垂下し、末端にボタン状の貼付文が付される。この貼付文を基点として左右に平行沈線が巡らされ、胴部との境を区画するものとみられる。

最大径12.4cm、現存高4.3cmを測る。

5は深鉢底部である。数条の沈線が垂下し、縄文は施文されない。復元最大径17.9cm、現存高8.5cmを測る。

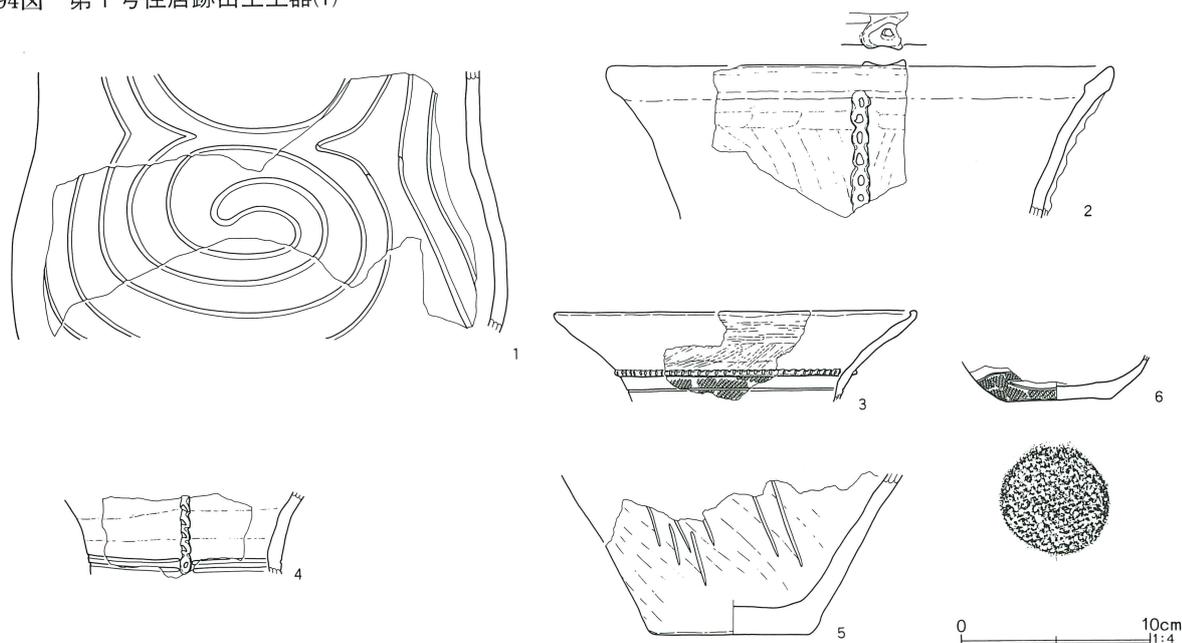
6は3と同様の、小型鉢で、底部から丸く張り出す胴部までが残存する。平行沈線による磨り消し文様が描かれる。地文はLR単節の縄文である。底面にはすだれ状編物の圧痕が観察される。

底径5.6cm、現存高2.3cmを測る。

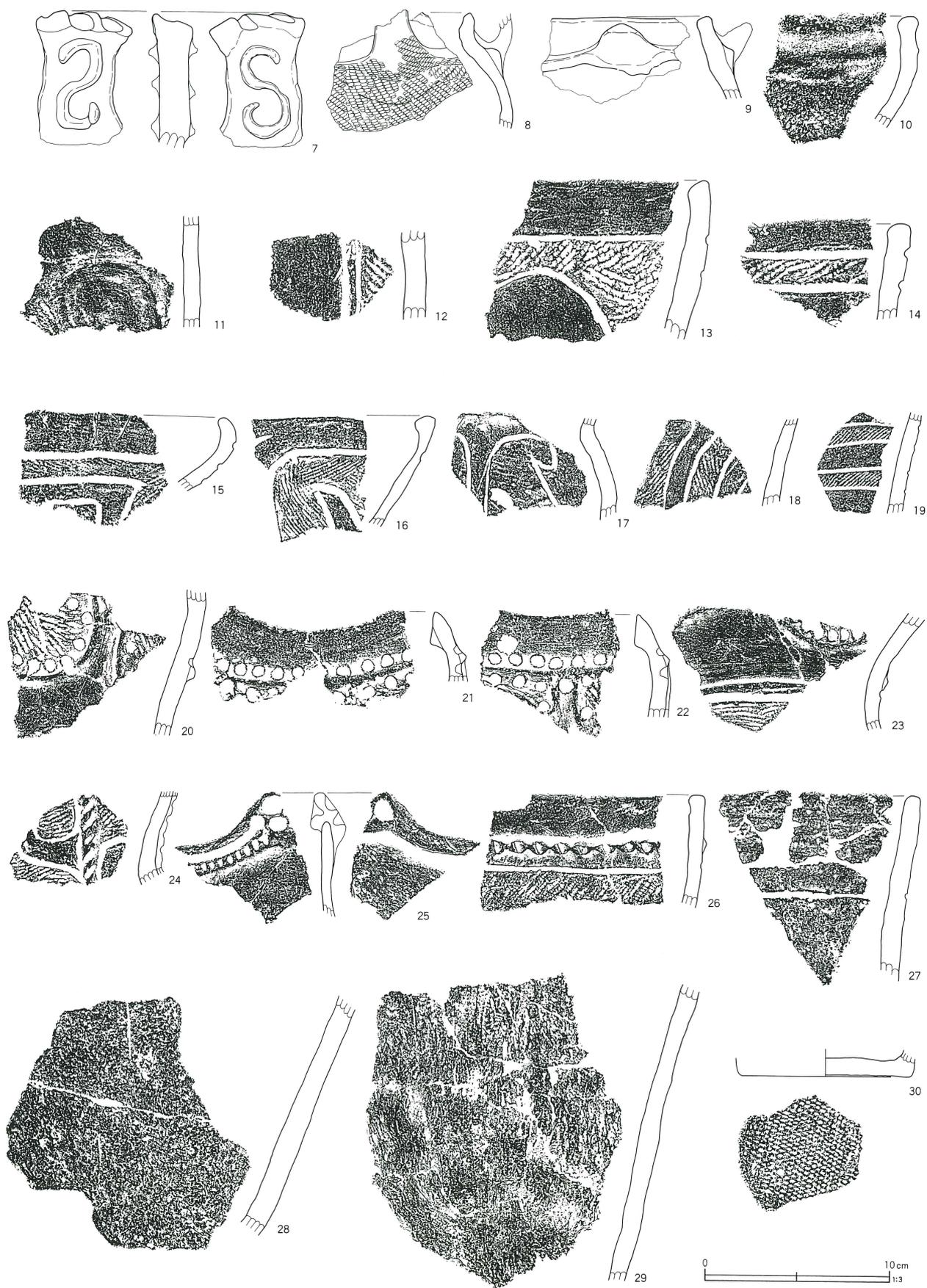
7は柱状の突起である。表裏にS字状の浮線文が描かれる。

8～14は加曾利E系の土器片で、いずれも後期初頭に属するものだろう。8は壺形土器で、橋梁状把手を有する。9は舌状突起を持つ南東北系の深鉢である。

第94図 第1号住居跡出土土器(1)



第95图 第1号住居跡出土土器(2)



第19表 第1号住居跡石器一覧表

石 鏃

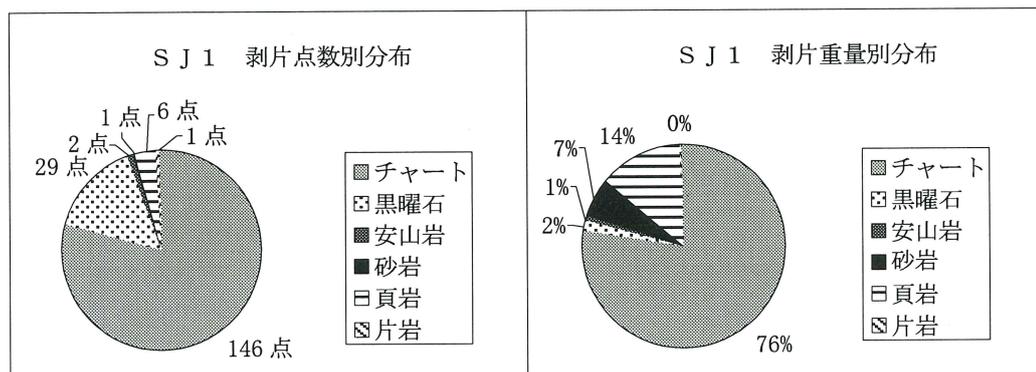
番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形 態	(長さ/幅)比	残存度
1	No. 52	(14.3)	15.7	3.4	0.79	チャート	A-1		②
2	No.228	13.7	14.8	3.4	0.48	チャート	A-1	0.9	①
3	No. 78	11.7	14.2	3.5	0.37	チャート	A-1	0.8	①
4	No.146	21.0	22.0	7.0	3.00	チャート	E		⑧
5	一括	27.0	25.0	7.7	5.37	チャート	A-2		⑧
6	一括	23.7	20.7	5.7	2.67	頁岩	E		⑧
7	一括	13.5	(9.7)	2.4	0.30	チャート	A-1		②+④
8	一括	(7.6)	(7.5)	1.7	0.08	チャート	A-1		⑦
9	一括	(15.9)	(24.9)	4.0	1.49	チャート	A-1		②
10	一括	(15.3)	(17.0)	2.9	0.79	チャート	A-1		②+④
11	一括	14.2	12.8	2.3	0.46	チャート	E		⑧

磨 石

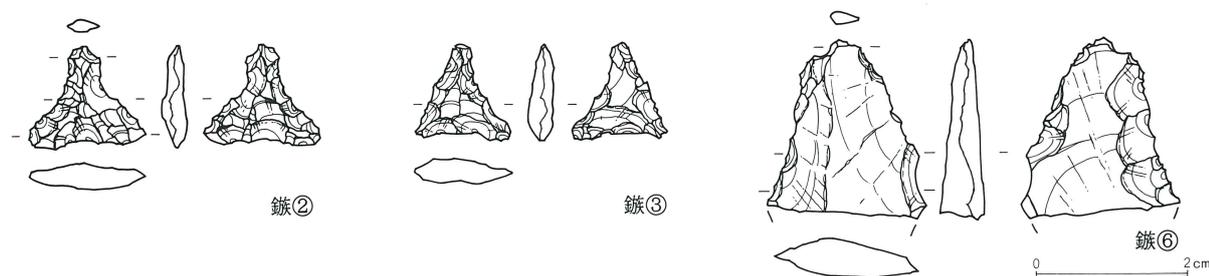
番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形 態	残存度
1	No. 47	130.0	82.5	43.0	750.90	花崗岩	B-2	①
2	確認面	130.5	68.5	44.0	537.39	花崗岩	B-2	④
3	No.210	(70.5)	(83.0)	33.0	311.30	花崗岩	B-1	②
4	確認面	(100.5)	(70.7)	(30.5)	203.90	花崗岩	不明	②

凹 石

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形態I	形態II	残存度	転用元
1	No.30	(99.5)	(71.5)	44.5	369.12	花崗岩	B-2	a	②	磨石
2	一括	(178.0)	(168.0)	67.5	2535.35	花崗岩	B-2	b	②	磨石



第96図 第1号住居跡出土石器



15～18は磨り消し縄文のみられる称名寺式である。地文は15がRL、他はLRの単節縄文で、充填施文される。

20～23は関沢類型である。断面三角形の隆帯にそって円形の刺突が巡る。23は頸部に無文帯が存在する。

24・25は堀之内1式で、24が円筒形の深鉢、25は素文の深鉢ないし浅鉢であろう。

19・26・27は堀之内2式である。26は口縁直下に刻みを伴う紐線文が巡る。

28・29は無文の深鉢胴部である。29は表面に粗い削り整形の痕が観察される。堀之内式期のものであろうか。

30は底部で、底面に網代圧痕が観察される。やはり堀之内式期のものだろう。

第2号住居跡 (第97図)

C-3・C-4グリッドに所在する。第1号住居跡と重複関係にあるが、新旧は不明である。

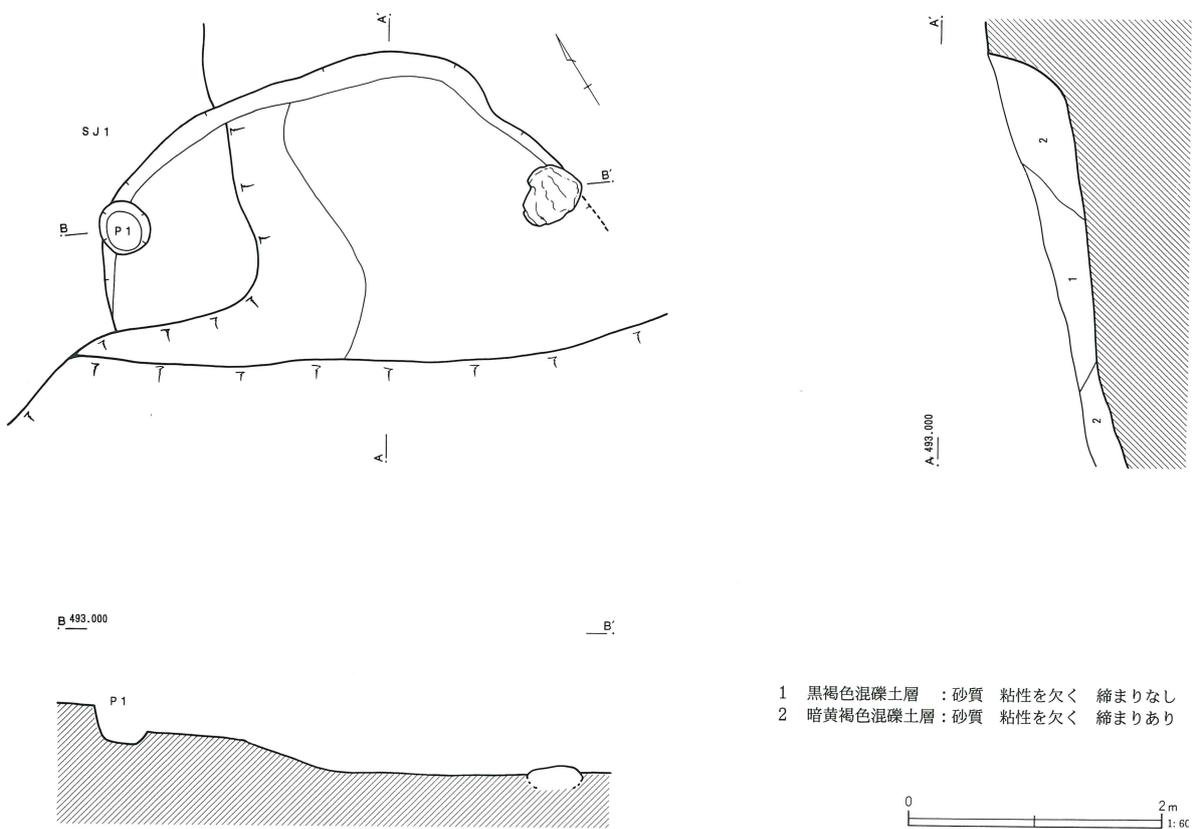
本遺跡の住居跡群中もっとも南に位置する。中津川に面した段丘崖に掛かっており、斜面下方が崩落により失われ、北壁部分のみがかりうじて残存している。

ほぼ円形の住居跡であったと思われる、現存部分の最大径は3.45mを測る。壁高は最大60cmを測る。

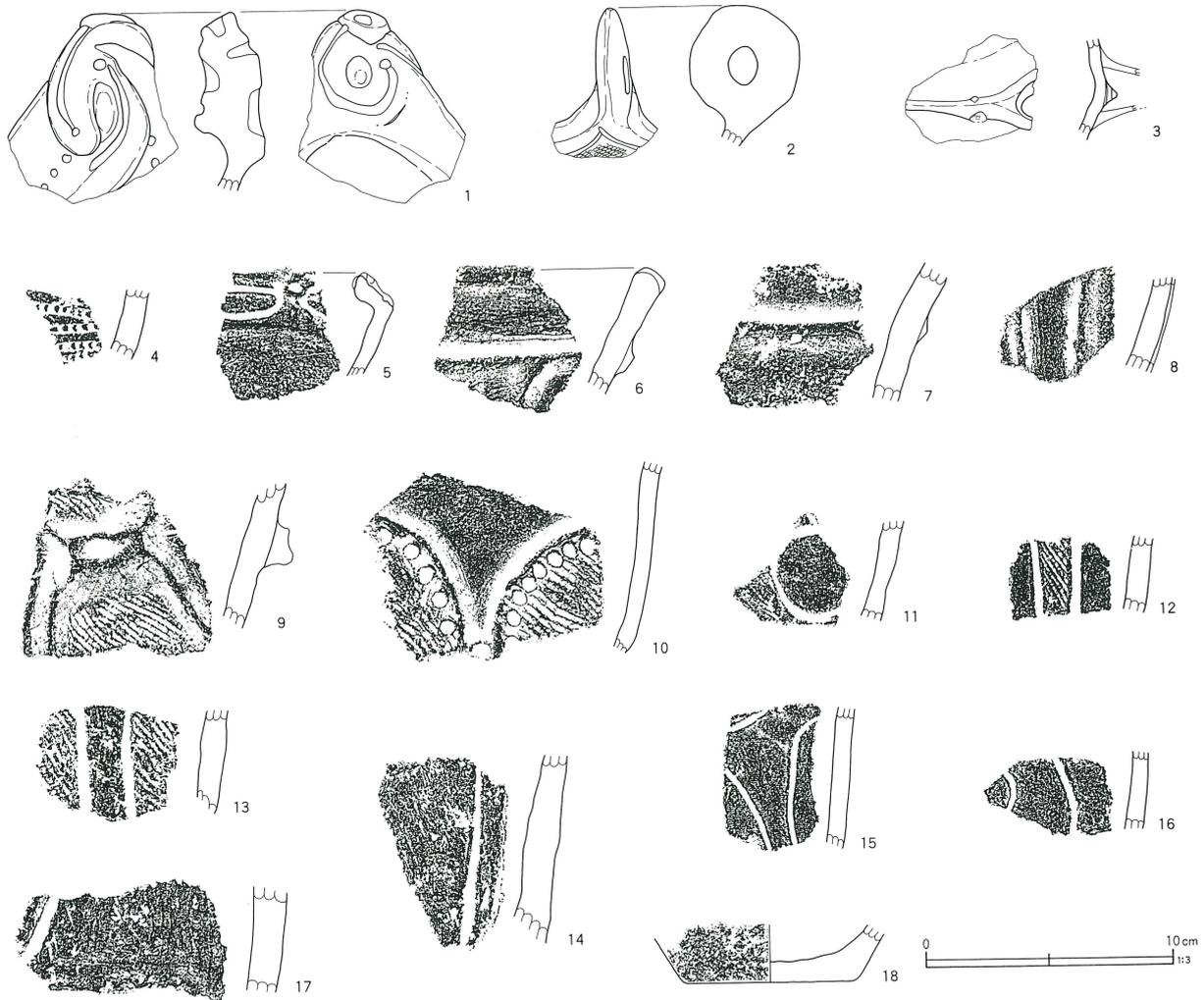
床面は起伏に富んでおり、また、東南方向に向かって傾斜している。床土は暗褐色の混礫砂層である。覆土中から多量の礫が出土したが、床面上に敷石らしきものは存在していない。

本住居跡の炉跡は検出されなかった。西壁に掛かって1基のピットが検出されたが、位置的に隣の第1号住居跡に属するものである可能性もある。ピットの規模は、口径43cm、深さ26.9cmを測る。

第97図 第2号住居跡



第98図 第2号住居跡出土土器



遺物は、土器・石器が少量出土している。主体をなすのは縄文時代後期初頭を中心とした土器の小破片である。

後期初頭に属する他の住居跡についても言えることだが、遺物のボリュームに比較して遺構の残存状態が極めて劣悪で、後期前葉以降の状況とはあきらかな落差が感じられる。

たとえば、入波沢西遺跡から出土した堀之内1式期の住居跡は、崩落により覆土の大半を失いつつも、柱穴や敷石の残存状態はけっして悪くなかった。

この落差を説明するために、ひとつの可能性として、後期初頭から前葉に移行する時期に、遺跡全体が何らかの自然現象の影響を受けて旧状を失っている可能性

を考慮すべきではなかろうか。

出土遺物 (第98図・第99図)

1は波状口縁の頂部に付される突起である。盲孔を施した沈線による文様が描かれる半月形の粘土版2枚を組み合わせて、紡錘形の意匠をつくりだす。突起の左右には、円形の刺突列が巡る。

内面には指頭圧痕を中心に、C字状の沈線が描かれる。

2は浅鉢の口縁部であろう。円盤状の突起が縦位に付される。円盤の中央には横方向の貫通孔を有する。

胴部には磨り消し文様が展開する。地文はLR単節の縄文である。

3は有孔罎付土器で、罎の部分に注口が付される。

4は縄文時代前期の諸磯式で、半裁竹管による爪形文が描かれる。

6～9は加曾利E系の土器で、断面三角形の隆帯で文様が描かれる。9はX字状のモチーフの交点に舌状の突起が配される。

10は関沢類型で、隆帯に沿って円形の刺突が巡る。

11～13は磨り消し縄文が描かれる破片である。11は

加曾利E系の固体でJ字文の先端部であろう。

14～17は沈線文で、称名寺II式～堀之内1式であろうか。

5はボタン状の貼付文の左右に楕円形の沈線区画が描かれる口縁部で、堀之内1式に属するものであろう。

18は無文の底部である。

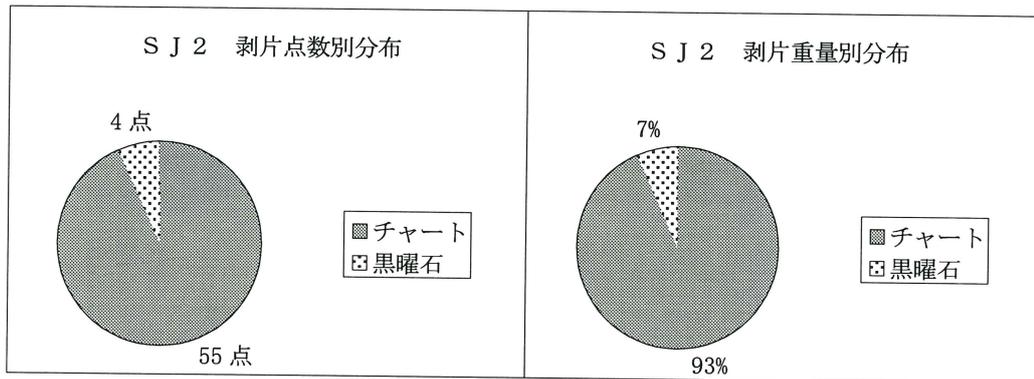
第20表 第2号住居跡石器一覧表

石 鏃

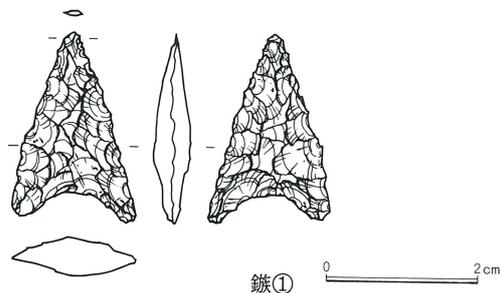
番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形 態	(長さ/幅)比	残存度
1	No.72	25.0	16.2	4.8	1.26	チャート	A-1	1.5	①
2	No.69	19.0	10.0	5.7	0.90	黒曜石	A-2	1.9	①
3	一括	19.5	(19.5)	5.8	2.20	チャート	A-2		④

スクレイパー

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形態 I	形態 II	残存度
1	No.56	29.5	45.5	9.5	11.98	チャート	B-1	a-1	①
2	一括	27.5	31.5	7.0	6.15	チャート	B-1		①



第99図 第2号住居跡出土石器



第3号住居跡 (第100図)

B-5グリッドに所在する。北壁が、工事用道路に伴う盛り土の下面に隠れている。また、南半は段丘斜面の崩落によって失われている。

楕円形の竪穴住居跡で、長軸はN-12°-Eを指すものと思われる。現存部分の最大径は4.5mを測る。壁高は最大63cmを測る。

床面は不整で、中央がやや下がっている。

床面は灰黄褐色の混礫土層である。床面上にいくつかの礫が検出されたが、明らかに人為的に敷設されたと思われるものは存在しなかった。東南の壁に乗っている岩塊は、後代になって飛来した転石であろう。

炉跡は検出されなかったが、床面中央付近にごくわずかな焼土の散布がみられた。

中央やや東寄りには、ごく浅いすり鉢状の掘り込みが検出された。長径1.55m、短径1.10m、深さ24cmを

測る。覆土中から若干の礫が出土した。焼土は存在せず、落ち込み性格は不明である。

北西と東南の隅にそれぞれ3基のピットが検出された。ピットの口径/深さ(cm)は、P1:70×15.4、P2:52×25.9、P3:20×16.5である。

遺物は縄文時代後期初頭～中葉の土器片および石器が少量出土した。

出土遺物 (第101図・第102図)

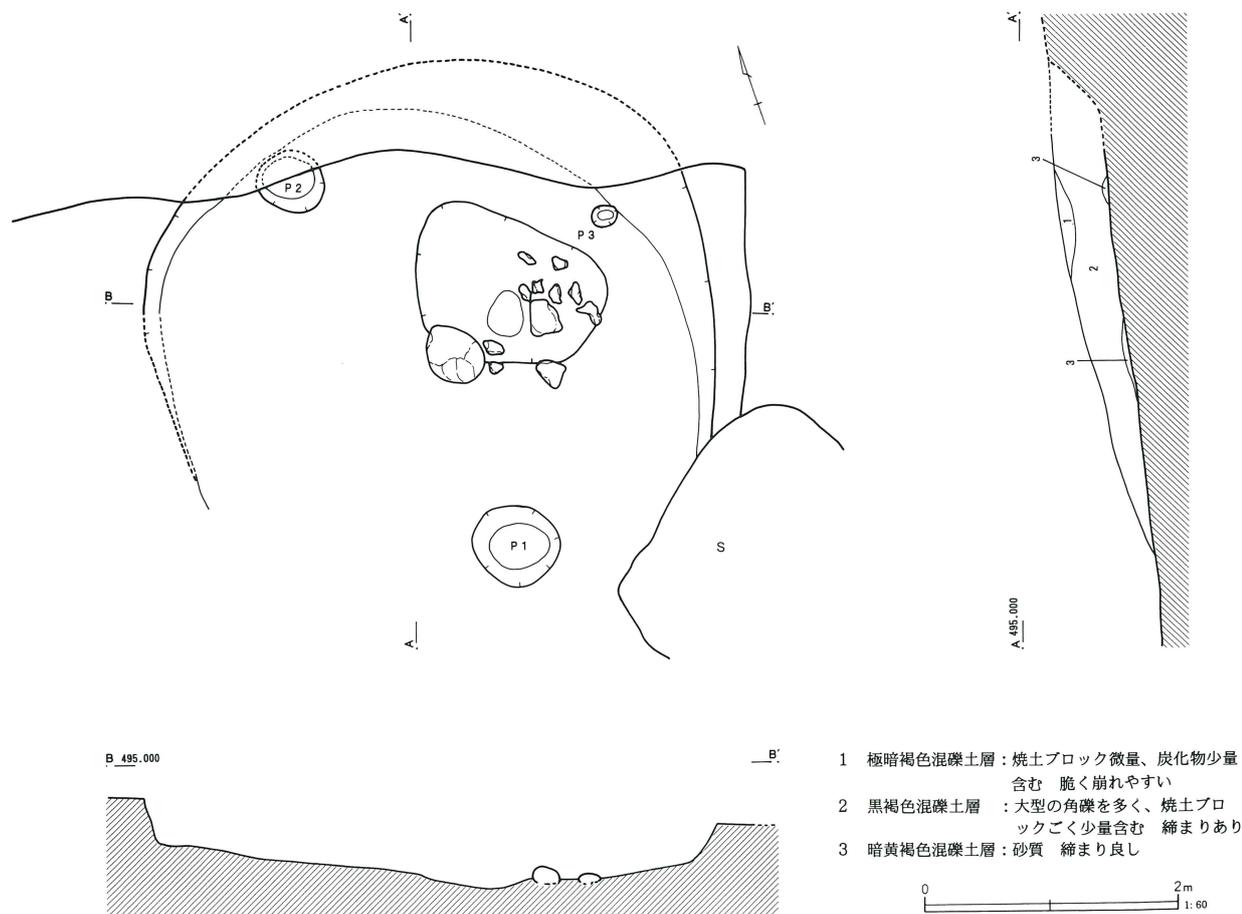
1・2は同一固体で、加曾利B式の把手である。水平口縁上に縦位の環状把手が付される。3は小環状の突起が付される口縁で、堀之内1式である。

5～8・23は加曾利E系の破片である。5は横位の隆帯上に舌状の突起をもつ口縁部である。

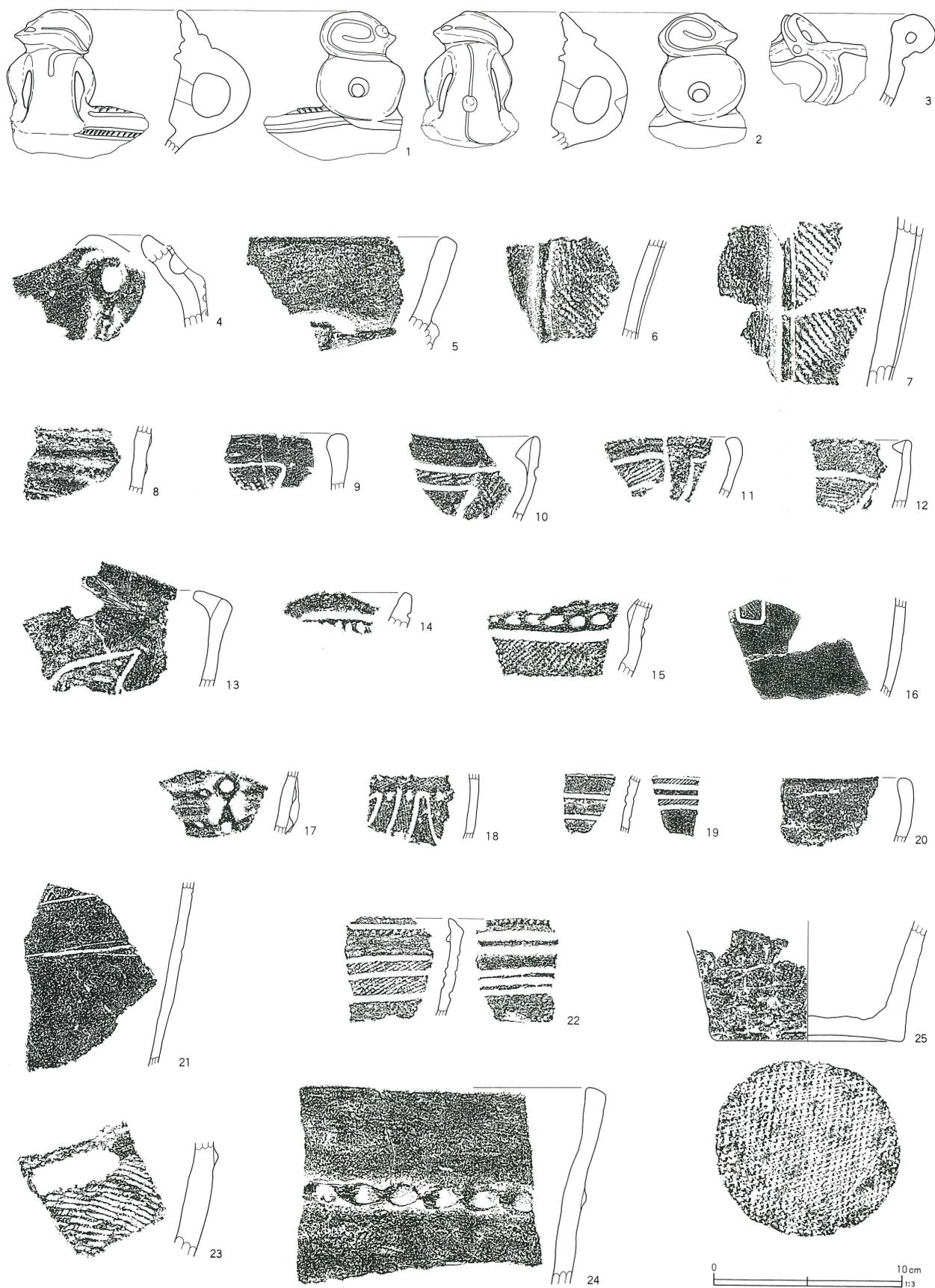
6・7は磨り消し懸垂文で、地文はLR単節の縄文である。

9～13は磨り消し縄文で、称名寺式である。10・12

第100図 第3号住居跡



第101图 第3号住居迹出土土器



の口縁は、内面に断面三角形の隆帯が付きされる。13は波状口縁で、口端が強く内屈する。波頂部には何らかの突起が存在したものとみられるが、剥落している。

14・15は刺突列を伴う隆帯がみられる破片である。14は波状口縁の波頂部である。15も口縁部付近の破片であるとみられ、内面に稜を持っている。

16は無文地に沈線で幾何学文様が描かれる。称名寺式であろうか。

17・18は堀之内2式である。17は2条の浮線が付き

れる。

19・21・22は、加曾利B1式である。19・22は内文を有し、22は口縁まで残存する。横位の平行沈線間にLR単節の縄文が施文される。

24は幅広扁平の紐線文が巡る口縁部で、加曾利B式の粗製土器であろう。縄文は施文されない。

25は深鉢底部である。胴部は無文、底面にすだれ状編物の圧痕が観察される。

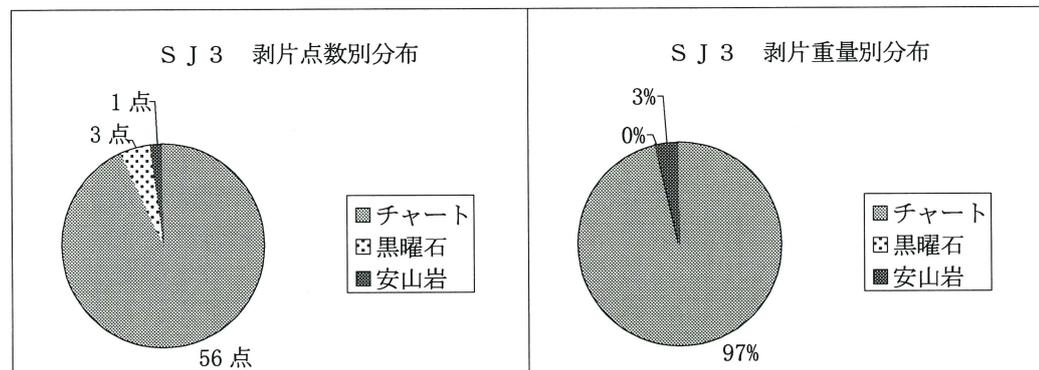
第21表 第3号住居跡石器一覧表

石 鏃

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形 態	(長さ/幅)比	残存度
1	No51	(17.0)	(12.1)	3.0	0.56	チャート	A-1		②+④
2	一括	(19.4)	(15.5)	2.3	0.70	チャート	A-1		②+④
3	一括	16.8	21.7	5.2	1.53	チャート	E		⑧

スクレイパー

番号	出土状況	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	形態I	形態II	残存度
1	No33	(40.0)	51.5	6.9	13.26	チャート	A-1	b-1	①
2	No67	25.0	28.0	11.4	8.26	チャート	B-2	c	①
3	一括	26.0	24.0	7.6	4.72	チャート	B-2		①



第102図 第3号住居跡出土石器



第4号住居跡 (第103図)

B-3・4、C-3・4グリッドに所在する。第1号・第5号住居跡、第1号配石墓に切られている。

楕円形の竪穴住居跡であったと思われるが、南半分を第1号住居跡との切り合いと、斜面の崩落によって失っている。主軸はN-8°-Wを指すものと思われる。現存部分の径は3.3mを測る。壁高は最大63cmを測る。

床土は暗褐色の混礫土層である。床面は起伏に富んでおり、全体に南に向かって緩やかに傾斜している。

覆土中から床面にかけて多量の礫が検出されたが、これらのうちに、人為的に敷設されたと思われるもの

は存在しなかった。床面から炉跡・柱穴等は検出されていない。

覆土中から復元個体を含む多量の土器片および石器を出土した。遺物の量は、地点を記録したものでだけで3000点を越える。

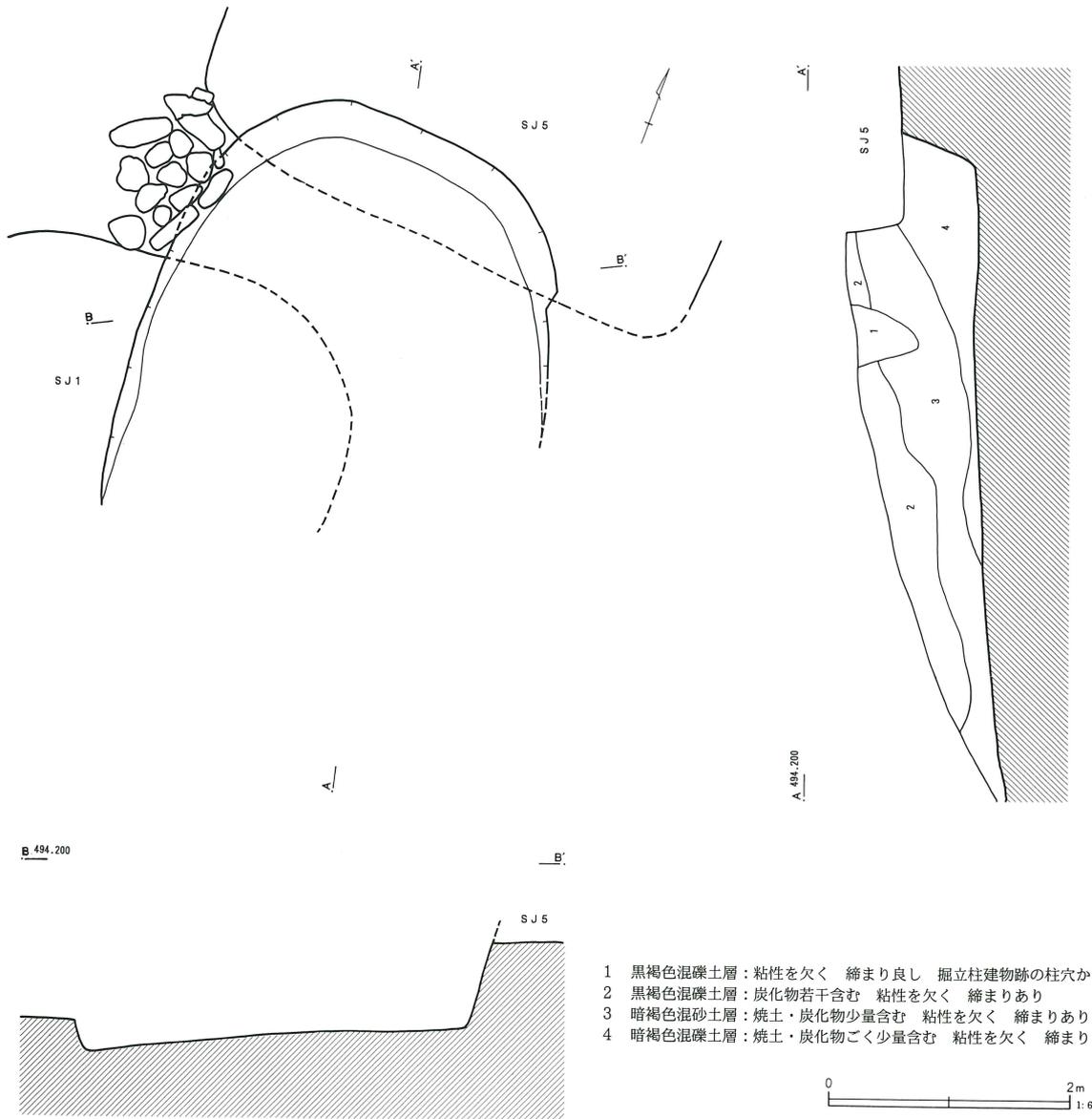
土器の時期は前期から後期中葉までさまざまだが、主体を成すのは後期初頭の称名寺式である。

出土遺物 (第104図～第110図)

1は深鉢胴上半部の大型破片で、前期末葉～中期初頭のものと考えられる。

円筒形の深鉢で、口縁部は4単位の山形波状口縁をなし、口端は肥厚する。

第103図 第4号住居跡



全面にRL横位回転の縄文が施文され、器面が2本1組の平行沈線によって多段に分帯される。

頸部の文様帯は長楕円形の区画が横位に連続するもので、区画内は縦位の平行沈線でさらに2分され、三角陰刻を伴う楕円文が描き込まれる。

口径推定21cm、復元最大径21.8cm、現存高10.5cmを測る。金雲母を混入する暗茶褐色の器壁で、焼成は比較的良好である。

2は称名寺式の深鉢口縁部である。器形はいわゆるキャリパー形で、口縁直下が強く張り出している。口端は肥厚して、内面に稜をなす。

口縁直下に若干の無文部が存在する。胴部には磨り消し文様が描かれる。地文はLR単節の縄文で、充填施文される。

口径推定17cm、最大径20.3cmを測り、現存高7.4cmを測る。

器面は灰黄褐色を呈し、胎土はややシルト質で、軽微な風化がみとめられる。

3は南東北系の深鉢で、主として阿武隈川水系を中心に分布が知られているものである。

円筒形で、口縁はわずかに内湾しつつほぼ垂直に立ち上がる。口端は肥厚して内面に稜をなす。口縁下に若干の無文帯をもち、頸部に断面三角形の隆帯を巡らせる。この隆帯区画内には舌状の突起が4単位配置されるが、突起の頂部は指頭による押圧で扁平になっている。

胴部には2本隆帯による磨り消し懸垂文が対向して描かれる。地文はLR単節の縄文が充填施文される。口縁部の無文帯には横位の研磨が徹底される。

胎土はややシルト質で、小礫と多量の砂が混入する。口径推定40.4cmを測り、現存高12.7cmを測る。

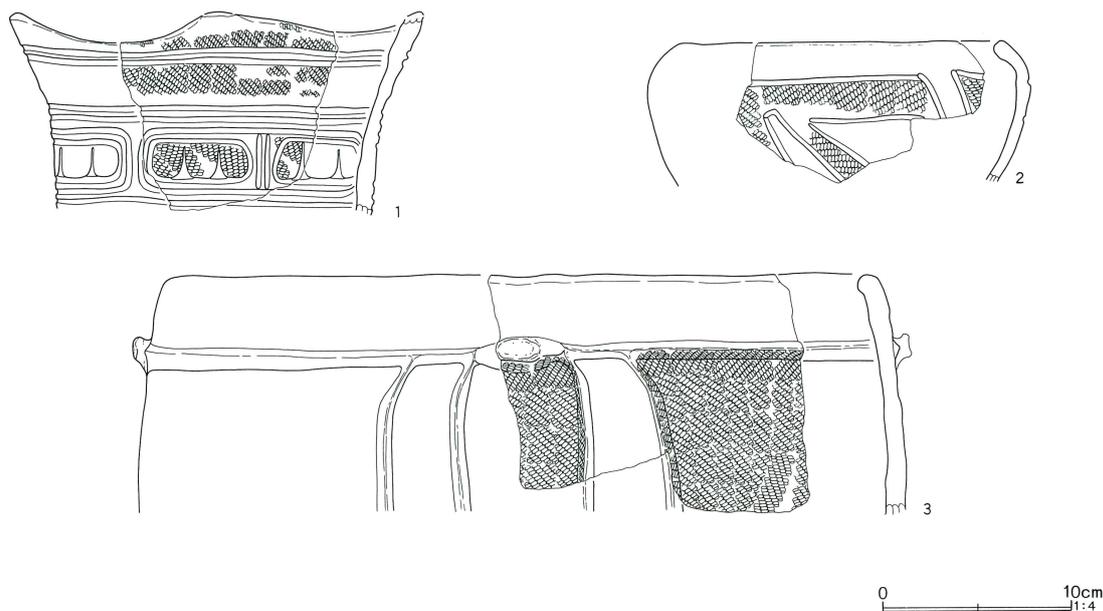
4は加曾利E系の深鉢口縁部である。波状口縁の波頂部に、単独ないし一対配される橋梁状把手である。胴部には鋸歯状の磨り消しモチーフが描かれ、把手背面にも縄文が施文される。

地文はLR単節の縄文である。

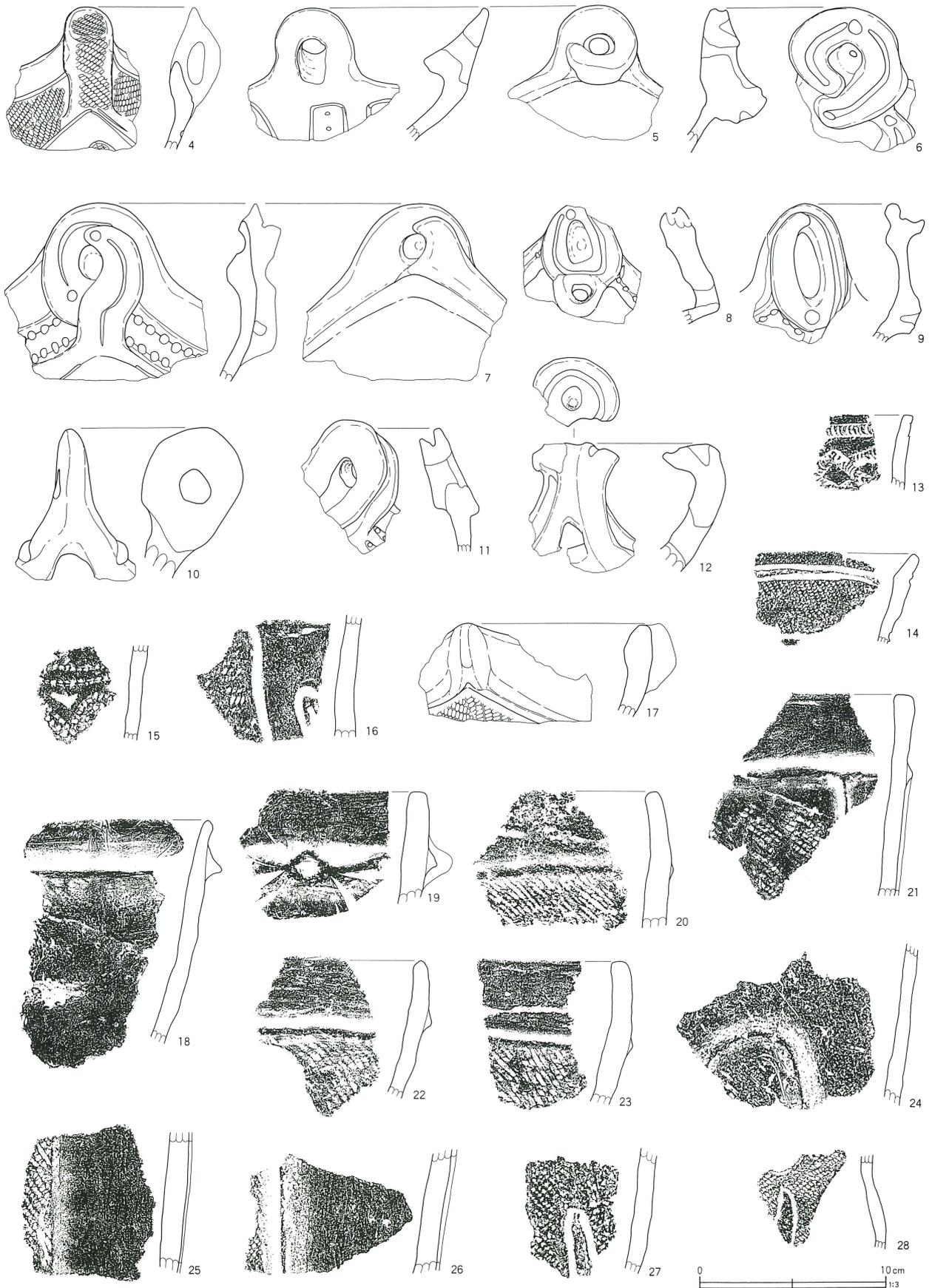
5～12は称名寺式の口縁突起である。

5の突起は半円形で、外面下方から内面上方に抜ける貫通孔を有し、内面にはこの貫通孔に沿ってひれ状の隆帯が付される。

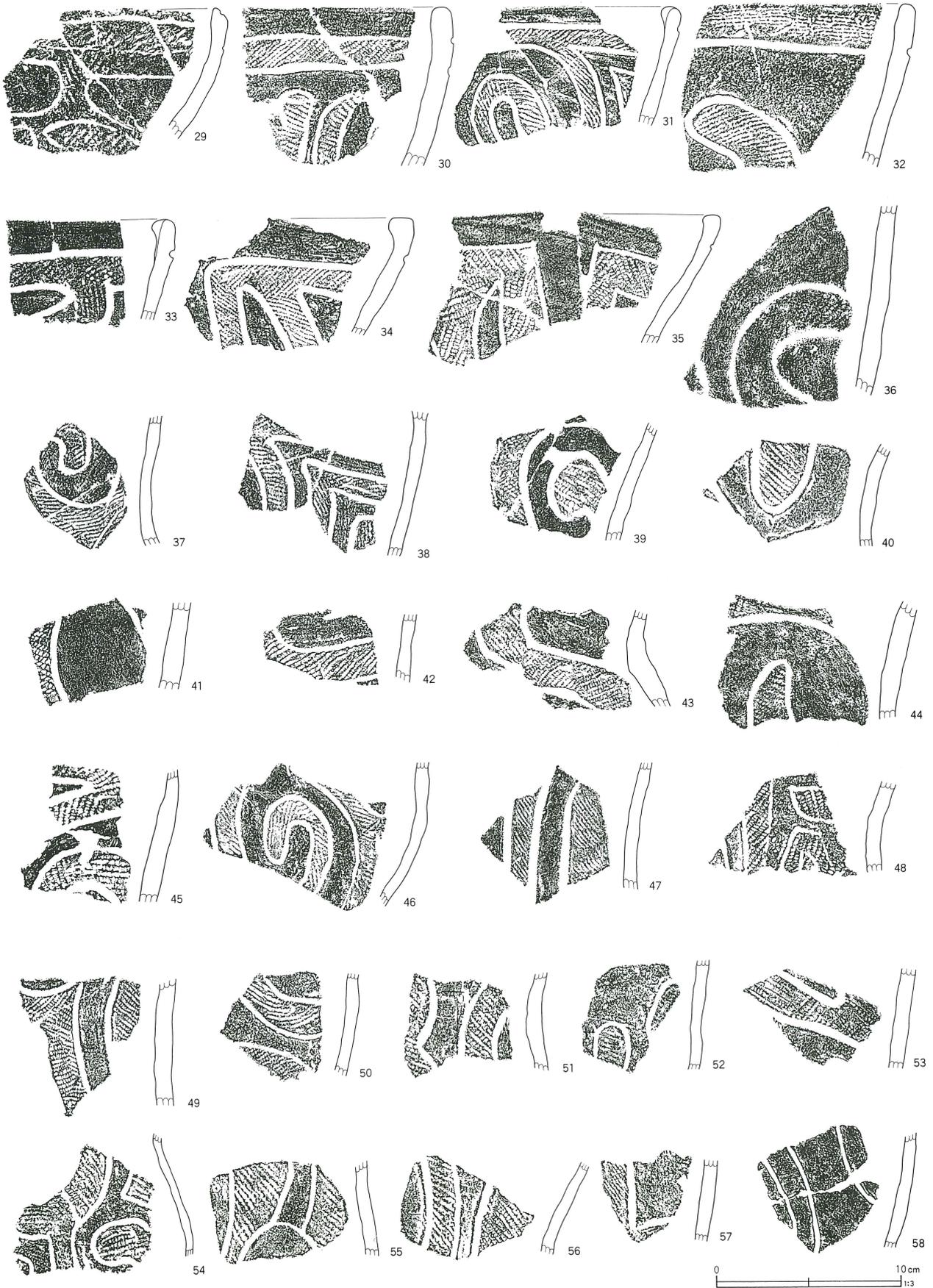
第104図 第4号住居跡出土土器(1)



第105图 第4号住居跡出土土器(2)



第106図 第4号住居跡出土土器(3)



7・9は口縁直下の区画内部に円形の連続刺突が巡る、いわゆる関沢類型である。8は注口つき浅鉢である。

11は口縁部の文様帯から垂直にたちあがる柱状の突起である。12は縦位の円盤状突起で、中央に横方向の貫通孔を有する。

13は縄文前期の諸磯b式である。半裁竹管による爪形文で、鋸歯状のモチーフが描かれる。

14は前期末葉～中期初頭の土器である。地文縄文上に横位の平行沈線を巡らせて器面を多段に区画するもので、本遺跡第1号住居跡に復元個体が存在する。地文はRL単節の縄文で、横位回転で施文される。

15は複列の角押文で文様が描かれるもので、中期中葉の貉沢式である。16は加曾利EⅢ式の磨り消し懸垂文である。

17～28は、後期初頭における加曾利E系の土器である。

17はキャリパー形深鉢の口縁部である。波状口縁の波頂部に、つまみ出し状の隆帯が突出する。

18～26は断面三角形の隆帯で文様が描かれる土器群である。19の口縁部は横位の隆帯に舌状の突起が付される。

20は、横位の隆帯から幅広の磨り消し懸垂文が垂下する。18は隆帯以下が無文になるが、磨り消し懸垂文の無文部である可能性もある。24は楕円形の区画が描かれ、内部に縄文が充填される。

27～54は沈線による磨り消し縄文が描かれるタイプである。

27・28は胴部文様帯が2段構成となり、鋸歯ないしU字状のモチーフが上下に対向するものとみられる。

29～32は、アルファベット文の土器である。

29・32は、口縁直下に帯縄文が巡って胴部との境を区画する。

33～83は称名寺式で、新旧が存在する。

33～57は磨り消し縄文である。61～65はこれに円形の刺突列が加えられる。

65は胴部に刻みを伴う隆帯が垂下し、対弧状の貼付文がみられる。62は関沢類の口縁部である。

66～68は連鎖状浮線文である。

70・71は「く」の字に内屈する口縁で、屈曲に沿って円形の刺突が巡る。

72～78、80～82は沈線間に刺突が充填される称名寺Ⅱ式である。

83は隆帯どうしの接点にボタン状の貼付文が付されるもので、注口土器の胴部であろう。隆帯の両側には沈線のなぞりが加えられる。

84は堀之内1式の深鉢胴部であろう。85～87は口縁下に幅広の無文帯を持ち、円形刺突を伴う隆帯が垂下する。

88～93は、櫛歯状工具による条線が施文され半粗製の深鉢である。88は口縁直下にへら状工具の刻みを伴う隆帯を巡らせる。

89は胴部との境を横位の条線で区画し、胴部には同一工具の蛇行懸垂文が垂下する。

90は頸部に断面三角形の隆帯を巡らせ、胴部に粗い縦位の条線が垂下する。91は条線によって三角形の区画が描かれる。

94は縄文のみ施文される胴部である。地文はLR単節の縄文で、縦位回転で施文される。

95～97は無文の底部である。95・96は胴部との境にくびれをもち、97は裾の部分がわずかに張り出す。

第107図 第4号住居跡出土土器(4)

